
トンネルを抜けたら異世界だった

夏休みの宿題

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トンネルを抜けたら異世界だった

【Nコード】

N0728Q

【作者名】

夏休みの宿題

【あらすじ】

幼馴染の彼女と親友に裏切られた一樹。傷心の一人旅でみつけた、摩訶不思議な異世界へのトンネル。異世界チートと現実チートを使い幸せを掴む為に頑張る一樹。商人からのし上がっていく。内政チートでハーレム系でさらに三角関係まで、異世界と現実を行ったり来たりの大冒険？作者の自己満足作品なので過剰な期待はしないでくださいね。

地名（前書き）

新しい、都市などが本編で登場する場合
この地名などは、随時修正します。

地名

オストレリア大陸

現代世界のヨーロッパ大陸に位置し、

ウイトウルス神権国

アレマン連合王国

イスパニア帝国

フランク王国

複数の国家が立ち並ぶ。

最初捻りを入れて、オーストラリア大陸を舞台にしようと思って、こんな名前になったのは内緒です。

ウイトウルス神権国

現在の、イタリア、スイスの位置する宗教国家。

絶対唯一神に、ウイトウルスを定め、

数百年前のオストレリア大陸では、

絶対的な国家だった。

何もしなくても各国から、お布施と食料が運ばれていた国。

しかし、近年神様は何もしてくれない。奪うだけだ！

という風潮により、国家の威信転落。

凋落により、国家崩壊の危機。

ウイトウルス神権国に詳しい人物によると、

この国が、後10年持てば神の奇跡と呼ばれている。

アレマン連合王国

現在のドイツ、オランダ、ベルギーに位置する連合王国。

アレマニア、アルマニア、アレマニアの、
3つの小国を合わせた連合国。

ワイトウルス神権国に隣している為、
ワイトウルス神権国からの移民が増大。

莫大な労働力を利用して、農業連合国家として成り上がった。

オストレリア大陸の食料の約5割が、この国で作られていたりする。
すごそうに聞こえるけど、

ワイトウルス神権国が、全然食料作ってないからだったりする。

さつさとワイトウルスが崩壊してくれば、

領地拡大できるとほくそ笑んでいる。

ワイトウルス神権国には、今まで散々迷惑をかけられた国でもある。

フランク王国

現在のフランスに位置する国。

オストレリア大陸最古の王国である。

すごそうに聞こえるけど、

戦争もせず絵を描いたり、石像を作ったり、

歌ったり、踊ったりしてただけで、

生き残れた不思議な国。

美食な国としても有名。

芸術国家として、近年注目を浴びている。

美食と芸術ばかりお金をかけるので、

民衆の不満が、そろそろ爆発しそうです。

イスパニア帝国

現在のスペイン、ポルトガルの位置に面する国。

昔は、王国だったのだが、

20年前に、軍事クーデターが起こり国家転覆。

現在は、イスパニア帝国を名乗っている新興国家。
民衆は恐怖政治に、戦々恐々としているらしい。

ハイネ

オストレリア大陸、フランク王国中部に位置し、
現実世界の、パリに位置する都市。

フランク王国の首都として、賑わいを見せる都市。
現実世界の通りにセーヌ川が流れており、
水の豊かな街となっている。

芸術国家として近年注目を浴びているだけに、
街の中心部は、とても美しい作りになっている。
しかし、この中心部の美しさと反比例するかの如く、
それ以外では、貧民街が立ち並んでいる。

地名（後書き）

クーデターを10前から20年前に変更しました。

ハイネの位置をパリへ変更しました。

ハイネを水の豊かな街へ変更しました。

登場人物？

斉藤 一樹

我らが主人公。

基本的に善人でお人よし、義理や人情にも弱い。
結構なオタクで、DOSUKEBEな漢である。

抜かずの5発ができるほどの凄まじい精力者。

容姿は2枚目なのだが、

調子に乗って3枚目を演じる悪い癖がある。

サッカーでは、U-16に選抜されるほどの実力者で、
当時はプロ確実と言われていた。

高校三年の春に、右膝靱帯断裂の大怪我を負いプロ入りを断念する。

入院生活、リハビリ生活の合間で勉強し、

見事大学に合格してしまうあたり、かなりの秀才といえる。

雪江には、幼少の頃から一途な思いを抱いていた為、

雪江以外との交際経験は無し。

（中、高校とサッカーで注目されていた少し余所見をしてしまうことはあった。）

現在は、雪江に振られ意気消沈している。

それでも、振られた当時よりはかなり回復したようだ。

坂崎 雪江

一樹の幼馴染、兼元彼女。

一樹第一主義だった為、小、中、高、大学と、

一樹以外で、友達と呼べる存在がほとんどいない。

一樹に対して、深すぎる愛情を持っていたが、寂しさに耐え切れない、弱い女性でもあった。一樹と別れてから、一樹と義春と雪江の間に何かあったようだ。現在、義春との関係はあまりうまくいってないようだ。

藤倉 義春

一樹の幼馴染、兼ライバル。
高校卒業後、即プロ入りを拒否して、
一樹と同じ大学に、入学してきた。
天然タラシのモテモテ野郎でモテナイ漢の敵。
一樹との間には、何か確執があるようだ。
現在、雪江との関係はあまりうまくいってないようだ。

ミニ

一樹の元奴隷、兼現在は嫁さん候補。
現在は、一樹のパートナー的存在。
一樹に奴隷として買われ、最初は一樹を疑っていたが、
一樹と接していくうちに、どんどん信頼していくようになった。
亜人の村の建設を、目標にしている。
巻き込む一樹に、罪悪感を感じているが、
一樹の協力無しでは、この計画の実行は不可能だと思っている。
その為、一樹の行動にストップをかけられず、
結構大変な目にあったりするかもしれない。
頭の回転は速く、結構打算で行動している部分があるが、
一樹への愛情は本物。
18話で一樹に告白しているが、その思いが通じるかどうかは、
これからの、作者次第である。

櫛名

竜人族族長の娘。

本編でも紹介するが、竜人が一樹に送った婚約者候補。

一樹との関係の強化が、大事になってくると考えた竜人族は、櫛名を、嫁に出すのが一番だと考えついた。

櫛名自身も、一樹に対して、尊敬の念を持っていたので

話は、とんとん拍子で進んだ。

ミミとは、元々は仲が良い。

高い魔力を持ち、精霊魔法の持続時間も長い為、

人に混じって薬師などの仕事をしている。

故に、一般的な教養も、通常の亜人よりも多く持っている。

ラスデ

ミミの父親。

一応、山猫族の族長である。

作中では語られていないが、亜人随一の狩りの名人である。

ミラーノ

ミミの母親。

外見は、ミミをもう少し大人っぽくお淑やかにした感じだ。

一樹的には、どっちかといえばミミよりミラーノのほうが好みである。

ミミの幸せを、心から願っており、

ミミと一樹が、結婚してくれればと思っている。

しかしそこには、一族の安泰と、娘に幸せ、亜人達の生活など、かなりの打算が働いている。

ミミの打算的な行動は、この人譲りかもしれない。

ハルク

騎士見習いの門番。

これから、結構話に絡んでくる予定。

現在の、門番の仕事に誇りを持っているが、

この扱いの低さには、少々思うところがあるようだ。

大友 信也

T県で、喫茶店をしてるマスター。

昔は、民俗学の研究に、熱意を燃やしていたらしい。

今は、寂れた喫茶店のマスターで、

いつ潰れてもおかしくないらしい。

この作品では、重要な人物になる予定。

作者が忘れなければ・・・

斉藤 一

一樹の父。

腎不全を患っていたが、

異世界の薬で、病が多少改善された。

このまま服用を続ければ、いずれ完治の予定。

一樹の持ってきた薬を、これからどう扱うのか現在頭を捻っている。

妻の恵子と、病が改善したのを切っ掛けに、

新婚生活のような、甘い生活を送り楽しんでいる。

斉藤恵子

一樹の母。

物語にあんまり関係ないけど、実は関係ある人。

夫婦仲は円満で、夫の病気が改善されたことをものすごく喜んだ。病気により、夜の生活はまったく行われていなかったが、夫の病が改善されたことにより、週2で復活したようだ。

一樹のことはとても心配だが、一樹が戻ってくると、

この甘い生活が終わってしまうので、

夏休みの間は、連絡さえ貰えれば戻ってこなくてもいいかなと思っている。

雪江父

雪江の父。

物語にもうでてこないと思うよ・・・

雪江母

雪江の母。

物語にもうでてこないと思うよ・・・

登場人物 ? (後書き)

3月9日 櫛名を追加しました。

詳細設定（前書き）

こんな感じかな？

何か矛盾点とか見つけたら教えてくださいね
修正しますので

詳細設定

通貨

1 イエン ≡ 100 セエン

1 セエン ≡ 100 リン

1 リン

1 イエン硬貨 ≡ 日本円で約1万円

1 セエン硬貨 ≡ 日本円で約100円

1 リン硬貨 ≡ 日本円で約1円

他には

1 分イエン硬貨 ≡ 25 セエン ↓ 4 枚で1 イエン

1 分セエン硬貨 ≡ 25 リン ↓ 4 枚で1 セエン

95 セエンなどになると、硬貨の量が嵩張り、持ち運びに不便になるという理由から、1分硬貨が発行された。

リンは青銅、セエンは黄銅、イエンは銀で出来ている。

この世界（以後オストと省略）で、高額な買い物をする場合は基本的に、

商業ギルドで手形に変えて支払いをする。

昔は、イエンの上に更に金貨^{レン}があったのだが、

手形の普及により、現在はほとんど作られていない。

砂糖 1 k g 約150 イエン

胡椒 1 k g 約230 イエン

サムエは、約760イエン（760万円）の儲けをたたき出した。胡椒よりも、砂糖のほうが貴重だと感じる方もいるかと思うが、オストでは、蜂蜜の生産が多少あるので、砂糖の値段のほうが安くなっている。

オストでの平民の平均年収は、200〜240イエンとなっている。オストにはボーナスという概念が無い為、月の給金はそのまま12で割る。

月給は、大体20イエン辺りが妥当となっている。

しかし、税率が6割と定められているので、

実際に手にするのは、大体8イエン〜10イエンほどとなっている。

魔法

物に魔力を込め、名前を与えることによって、

対象物の効果を高めることが出来る。

人間に使用しても効果がないのだが、

多少の治癒効果は見られるので、

現在は強化魔法としてではなく、治癒魔法として使われている。

通常は、服、家、武器、防具などに使用している。

丈夫になる、切れ味があがる、などの効果がある。

亜人の場合では、物同様に強化されてしまう。

唯でさえ、高い身体能力が強化されることを恐れて、

人間は亜人への服従の魔法を作り出した。

名前を封じ込められた物に対して、魔力を込め命令することで、強制的に、亜人を操ることが出来る。

一度服従の魔法にかかると、契約を解除しない限り、再度服従の契約を行うことは出来ない。

貧民街の亜人達は、自らの名が込められている封印物を、自種族の族長に預けている。

（亜人の場合、治癒魔法においても、人よりも高い回復力を見せる尚、回復力は魔力の高さに比例する。）

税制

ハイネの税率は、6公4民の税となっている。
税を納めることによって、

ハイネの住居権を、手に入れることが出来る。

それにより、商人は店を構えるようになるのだが、
店を構えることで、商人は、更に2割の商税を納めなければならない。
い。

利益の8割が税として徴収されてしまうので、
商売人には、まさにorz状態だ。

しかし、売り上げなど結構ごまかし放題出来たりするので、
この税率で苦しんでいるのは、農民がほとんどだったりする。
物の輸送には、護衛費などで大変な費用がかかる。

その為、通行税などは徴収していない。

通行税を徴収していないので、

行商人は、露店市などで売買すれば無税で売買が出来る。

露店市などは、一応違法行為なのだが、

警邏の騎士など、お金を渡せば処分はされない。

だが、行商人には常に命の危険が付きまとう為、
大儲け出来る行商人など、ほぼ皆無となっている。

（亜人を、奴隷として持っている行商人が、

まったくくないわけではないので、

そういった、行商人の極1分が儲けている。）

貧民街の住人は、税を支払ってはいない。

それ故に、ハイネの住居権を持っていない。
その代りに、その区画の使用料として、
毎月100〜2000イエンを支払わなければならない。
この使用料は、区画の大きさやによって変わってくる。
亜人が住む区画の使用料は、月200イエンとなっている。
最初はそんなものなかったのだが、
いつの間にか、支払うようになっていた。
区画の使用料は、区画に住む人数が増えれば増えるほど支払いが楽になる為、
貧民街に住民がどんどん集まる悪循環となり、
現在では結構な問題になっている。

居住権

ハイネに家や店を構える権利。
一応身分証明書代わりに、札をもらえる。
税の優遇だとか、医療費の軽減なんか勿論無い。
文字通り、ハイネの住む権利だけが貰える。

土地の貸し出し

基本的に畑や牧場など、
仕事をする為だけの貸し出しになる。
城壁の外に住むことは、基本的に不可能となっている。
これは、勝手に街の外に集落を作られては不味いとの措置である。
しかし、仕事上どうしても街の外に住まなければならない場合は、
(牧場など)

申請者のみに限り、城壁外の居住を許可している。
ただし、申請者以外の居住が見つかった場合、
申請の取り消しに加えて、高額な罰金か極刑となっている。

（旅人や商人に1夜の宿を貸しても、見つければ取り消しか、罰金となる。）

悪質な場合。

（2日以上の申請者以外の居住が見つかった場合。）

極刑となる。

居住権を持たない者への土地の貸し出しには、
厳しい審査があり、申請にも時間がかかるが、
賄賂一つでどうにでもなってしまう。

森や川の使用料

漁や狩りをするにも、使用料がかかる。

使用料を支払わないで使用した場合、

高額の前金か極刑となる。

基本的に、街以外の場所で何かする場合、

使用料を支払わなければいけない。

木の伐採なども、使用料を支払わなければ行うことは出来ない。

街の外にあるものは、石ころひとつ使う場合でも許可が必要なのだ。

（石ころ使用に申請している者はいないが、

見つければ罰金になる。）

この使用料、基本的にぼったくり値となっている。

名目としては、その場所での漁や狩で得ることの出来る利益の半分
を使用料とする。

となっているが、国土管理局の匙加減なので、

ほとんどが、使用料だけで赤字になる。

賄賂を渡し、使用料を低く設定させなければ、
商売にならない状態になっている。

こちらにも、住居権がなければ厳しい審査になるが、
賄賂一つで簡単に申請が通ってしまう。

貧民街で生活し、税の支払いから逃げ、

狩や漁で金を貯める悪知恵がはたく者もいる。（亜人がやってる）

プロローグ

斉藤一樹は、夏の山道をファミリーカーで走っている。
大学の夏休みを利用しての一人旅だ。

T県の山道は、緑の山々が生きずつ素晴らしい景色が広がっている。
都心部では見ることの出来ない自然な風景だ。

しかし、そんな素晴らしい風景が広がっているにも関わらず、
運転手はその風景をほとんど見ていない。

（はあ、ここはこんなにもいい景色のある場所だっていうのに・・・）

そうやってため息を吐いている一樹。

一樹の心はどんよりしている。

いや土砂降りの大雨といったほうがいいだろう。

本当はこの旅行は、一樹の彼女である坂崎雪江との婚前旅行のつもりだったからだ。

しかし、今一樹は一人で旅行に来ている。

理由は簡単、今から2月も前に彼女から別れを告げられてしまったからだ。

しかも最悪な形で、

（雪だけは違うと思ってたんだけどなあ）。

しかも、あいつがあんな奴だったとは思わなかったよ・・・
多少は吹っ切れたけど、まだまだダメージでかすぎる。）

そう、一樹の心の中は、

別れた彼女と、裏切った親友のことで頭は一杯だったのだ。

斉藤一樹と坂崎雪江は幼馴染と呼ばれる関係であった。
お互いの家は隣同士。

小学校、中学校、高校、大学と一緒に、
高校の卒業式で一樹が雪江に告白し恋人同士となり、
そのまま順調に交際を続けた。

厳しい就職難の中、一流と呼ばれる会社に内定が決まり、
約3年半の恋人生活に別れを告げるべく、

一樹は、雪江にプロポーズをしたのだ。

しかし雪江は、一樹からのプロポーズを拒否した。
その理由は、

「一樹ごめんね、私 義春のことが好きになっちゃったの。
義春も私のことを好きだっていつてくれた。」

そう一樹が就職活動に専念している間、
恋人であった雪江は、他の男に取られていたのだ。

しかもその取った相手が、一樹の幼馴染で親友と呼べる藤倉義春だったのだ。

義春は小学校、中学校、高校と一樹一緒になったことはなかったが、
幼いころから、ずっと一緒にサッカーをしていた親友だった。

小学校、中学校では同じクラブチームで汗を流し、

高校では、西の名門、東の名門と言われる高校でのライバル同士。

一樹は、高校3年の春に選手生命を失うケガのせいで、
プロ入りの夢を諦めた。

サッカーから離れてしまったせいで、

義春とは一時期疎遠になってしまったが、

偶然にも同じ大学に入学し、微妙に警戒しながら、昔と変わらず仲
良くやっていた。

ちなみに、一樹は不屈の根性で猛勉強し、雪江と同じW大学に進学
を果たした。

雪江とラブラブなキャンパスライフを送るために、死ぬ気で勉強したのであった。

義春を微妙に警戒した理由だが、
何故プロ入りを蹴ってまで大学に進学したのか一樹には謎だったからだ。

本人曰く、

「まだプロでやるだけの実力と体ができてないんだよ。
だから、このW大学でプロでも通用できる体作りと、
技術を学ぼうと思ったのさ。」

それに、プロで食っていけるかわからないし、
プロ生活も順調にいくかわからない。

大学を卒業して、のちの生活に備えるのもいいと思ったんだ。」

確かにこの大学はサッカーが強いし、偏差値も高い。
卒業しておいて損はないだろうと一樹も納得はした。

しかし、本当の警戒理由は、
何を隠そうこの義春は、もてるのだ。めっちゃもてるのだ。
かなりの2枚目だし、性格もいい。

おまけにプロ確実と言われており、結婚できれば玉の輿なのだ。
過去一樹が可愛いと思った女、一樹に好意を持っていた女、
一樹がちよっと好きだった女、

片っ端から義春にかっ攫われていたのだ。

しかも天然タラシだから始末に負えない。

いくら一樹が聞いても、友達だと返されるのだ。

一樹は、血の涙を流しながら義春の悪行？を許していたのだが、
雪江まで同じようにかっ攫われてはたまらない。

故に、雪江を義春に紹介するのは抵抗があった。

しかし、一樹と雪江は学内でほとんど一樹と一緒にいるのだ。
義春に紹介しないわけにはいかない。

なので雪江には、

「義春は天然タラシだから自分抜きで絶対会うな！」

と強く言っておいたし、

義春にも、

「雪江は俺の彼女だ。

だから自分抜きであつたら殺す！」

と脅しをかけていた。

そんな一樹に雪江は、

「一樹がそう言うなら、そんなことは絶対にしないよ。」

義春も

「俺がお前の女取ったりするわけないだろうがあゝ。」

と言っていたので、微妙に警戒しながらも安心していた。

事実3年間は何事も無く、雪江とラブラブな生活していた。しかし、一樹は最後まで気がつくことが出来なかった。

基本DOSUKEBEで抜かずの5発ができる漢だが、根は善人でお人よしな一樹には、

幼い頃からの親友の悪意に、

「あゝやめだやめだ。

もうこれ以上考えてもしようがない。

悲しいけどこれ現実なのよね。」

一樹は、寂しく独り言を喋りながら車を走らせる。

道をグングン進むと、そこに古ぼけた看板が見えてきた。

その古ぼけた看板を見て、一樹は慌てて急ブレーキをかける。

車から降り、その古ぼけた看板を再度確認すると、

その看板には車で見た通りの不思議な言葉が記してある。

【この先300m先 右折 異世界へのトンネル】

（はい？ 俺はついに悲しみあまりボケちまったのか？）

だが、ふと一樹は思った。

どうせ誰かのイタズラだろうと。

（記念にデジカメで撮っておこう。

写真を見てくれる人なんて、両親以外にいなかったけどな・・・

まあこんな面白看板なら○チャンネルにスレ立てて画像アップすればいいか。）

看板の写真を撮り車を進める。

すると、看板に記してあった通りに右折ポイントがある。

（よし、トンネルのほうもネタとして写真を撮りにいくか。）

一樹は、無駄に元気に車を走らせトンネルに向かう。

その道は碌に舗装もされていない獣道で、ガタガタと車が揺れていた。

右折ポイントから15分ほど道を進むとトンネルが見えてきた。

（トンネルまで意外と距離があったな。

道も悪かったし。

しかし、いったい何の為に作られたトンネルなんだこれは？

一樹は、トンネルに近づく。

すると、トンネルの横には看板が2枚あることに気がついた。

その2枚の看板には、こう記されていた。

【異世界へのトンネルです】

【大丈夫ですよ 帰って来られなくなることはありません】

（＾Ｏ＾）／

帰って来られるのか、それとも来られないのか、

どっちなのかわからない看板だった。

ただ分かるのは、完全にイタズラで作られた看板だと言う事だ。

まさか（＾Ｏ＾）／ AAが書いてある看板を本物だと思う人いないだろう。

一樹は、看板を写真に撮って考える。

（こっちにもちゃんとイタズラ看板あるし随分と凝った作りだな。

／（＾Ｏ＾）／ってやばい感じもするけど、

どうせイタズラだろうし、行ってみるか。

異世界へ本当に行くわけでもないしな。）

一樹は、少し周りや頭上を注意しながらトンネルを進んだ。

異世界へ行ってしまうことを注意している訳では勿論ない。

落盤や落とし穴などがあるかもしれないからだ。

悲しみのあまり人生（＾Ｏ＾）／状態の一樹だが、

こんなところで一人悲しく仏様になるわけにはいかないのだ。

ならこんな所に行くなよ！と思うが、

それは、単純に好奇心が勝ったのだろう。

（こりゃ、結構しつかりとした作りのトンネルだな。

トンナルの中に岩なんかも落ちてない。

車でトンネル抜けられそうだな。

ただトンネルの中に照明はないんだが、微妙に明るいのなんですねん（？）

少し疑問に思う一樹だが、そのままトンネルを進む。

5分ほどトンネルを進むと、光が差ししてきた。

「おお、出口が見えてきたぞ」

一樹は、まだ気がついていないが、

トンネルを抜けるとそこは異世界だった。

プロローグ（後書き）

4月17日修正いたしました。

感想、ご意見お待ちしております。

いきなりケモミミですか（前書き）

第一話はこんな感じになりました。

いきなりケモミミですか

一樹はトンネルを抜けて驚いた。

入口は、完全にトンネルだったにもかかわらず、出口は、祠のような作りになっていたからだ。

山の麓の祠といった感じだろうか。

祠の周りには森になっており、あたり一面に緑が広がってる。

祠の出口からは、真っすぐに道が出来ているが、

舗装などされておらず、ただ土を叩いて平らにしたような農道のよ
うな作りだった。

ここから少し離れた場所には、ヨーロッパ風のお城が見える。

（あの城は、テーマパークか何かなんだろうか？

こんな所でテーマパークが作られていたなんて知らなかったな。

工事中の看板は出ていないようだし、すでに完成してるのかな？

ちようどあの道もお城に向かって伸びているみたいだし、

あの城目指して歩いて行けば何かわかるかな？）

そう言って道を進むこと約30分。

森を抜けると視界が開け、お城の周りには街があることが分かった。
中央に小高い丘があり、そこにはローロッパ風の城が立っている。

城の下には家が立ち並び、その街を城壁が囲っていた。

四方に門があり、街のから少し離れた場所には川が見える。

（お城だけじゃなくて、どうやら街まであるみたいだな。

随分大規模テーマパークみたいだ。

こりゃTDKくらい立派だな。

雪と一緒に来られれば楽しかっただろうな。）

ふと雪江のことを考えてしまった一樹だが、もう終わった事だと考えるのをやめ、街へ向かって歩き出した。更に30分ほど歩くと、ようやく街を囲っている城壁の門に辿り着いた。

門の前では、門番らしき人物が立っていて、正に中世ヨーロッパを彷彿させるもので一樹を驚かせた。

（こりゃすげーな、随分凝ってるし、相当金かけて作ってるよ。）

一樹は、門番役の人に話を聞こうと喋りかけた。

「どうもこんにちは、

こんな所にテーマパークがあるなんて知りませんでしたよ。もうオープンしてるんですか？」

しかし、門番は何言ってるんだこいつは？という顔をしてこう答えた。

「貴様は何を言ってるんだ。

ここはオストレリア大陸・フランク王国の首都ハイネだ。テーマパークとかいう訳のわからん街ではないぞ。」

「ん？オストレリア大陸？

ここは日本のT県でしょ？

それとも、これはアトラクションか何かなんですか？」

「お前はさっきから何を訳のわからん事をいってるんだ！あたら何とかだのか、ひほんだの、さっきからここは、

オーストラリア大陸・フランク王国の首都ハイネだと言っているではないか。」

ここで一樹は、あの看板の事を思い出したのだ。

【異世界へのトンネルです】

（つまりここは、小説や漫画なんかでよくある異世界って奴なのか？あの看板はイタズラじゃなくて、本気^{マジ}で書かれてたのか。

しかし、なんで誰もあの看板の事に気がつかない？

あんなに親切に書いてあって誰も気が付かないなんておかしいだろう！

確かに俺も最初はイタズラだと思ったさ、

だけど、ネタだと思っても興味本位であのトンネルまで行く奴は

絶対いるはずだ！

俺がそうだったからな！

興味本位であのトンネルまで行く奴は絶対いるはずだ！

大事なことなの2回いいました。

なのに、何故誰も公表しないんだ。

それともあれなのか、所謂国家機密って奴なのか、

あれだけ親切な国家機密もないと思うんだが・・・

しかし、あれだけの面白看板だ。

絶対に○チャンネルにあの看板をうpする奴はいるはずだ！

俺が、面白い看板を見つけたってスレ立ててうpしようと思ったくらいだ。

絶対にいるはずだ！

ここも大事なことなので2回（ry

これはちよっと詳しく調べる必要がありそうだな。）

「そうですよね。

ここは、フランク王国の首都ハイネですよね。
すいません。

「どうやら、変な勘違いしていたようです。」

「あんまり変な事をいつていると、
騎士隊に拘束されるから気をつけたほうがいいぞ。
それと貴様は、随分と可笑しな格好をしているな。
旅人がするような格好ではないと思うぞ。」

「変わってますかね？」

「これは私の故郷の服なんですよ。」

「そうか、それは悪かったな。
許してくれ。」

「貴様の故郷を侮辱するつもりはなかったんだ。」

「気にしないでください。」

「引き続きお仕事頑張ってください。」

「私は、これで失礼します。」

「おい貴様、街でさっきみたいな変なことを言うんじゃないぞ。
騒ぎを起すようなら今度はしょっ引くからなあ」

門番の優しい忠告を受け、

一樹は、街の中に入っていた。

（ここが異世界っていう調べるには、
街を回って見るのが一番だよな。）

証拠探しの為に、街を色々と歩いてみると、

あちらこちらに、日本語が書かれた看板を見かけた。
周りからは、日本語が聞こえてきた。

日本語が通じるということで、ここが異世界かどうかはよくわからないが、

ここが、テーマパークではないという確信は得ることが出来た。

（明らかにここで生活をしてるって感じだもんな。

見た感じだと中世ヨーロッパ位の文化程度かな？）

そんな感想を持ちながら、街を見まわっていると、
少し先の広場に人集りが見える。

一樹は、野次馬根性でそれを見に行くと、驚くべき光景が見えた。
可愛い女の子が、首輪をつけ鎖で繋がれている。
しかも、人間ではあり得ない耳と尻尾が付いている。

（ありえねー獣人なんて漫画やアニメでしか見たことないわ。（当たり前です）

これで、ここは完全に異世界に決定したな。

日本でネコミミと尻尾付けてる人は、

秋葉原でしかお目にかかったことないからな。

しかし、この世界には奴隷制度があるのかね？

あんな可愛い子を奴隷にできるなんてなんでうらやま…ゲフンゲ
フン酷い世界だ。

なんとか出来ないもんかね。）

一樹は日本人の道德観から、

なんとかしてあげたいと思ったのだ。

（本当は俺が買い取って、そのまま逃がしてやるのが一番いいんだ
が、

さすがに先立つものが無いんだよな・・・」

どうすればあの子を解放できるのか、
考えを巡らせていると、奴隷商人（以下商人A）の男が喋りかけてきた。

「さあさあさあ、その変わった服を着た旦那どうだい。
珍しい獣人族のメスだよ。」

お値段は300イエンと値が張るが、
獣人族なんてめったに手に入るもんじゃないからね。
見てくれ中々の上玉だろ。」

そういつて、商人Aは女の子の顎を掴み、強引にこちらを向かせた。
その対応にカチンと来た一樹は、一瞬の閃きでこう答えた。

「ほう、300イエンとは随分値段だ。」

確かに珍しい獣人のメスなら、

それくらい付いてもおかしくないかもしれないがね。

俺は、こんなんでも塩・胡椒や砂糖なんかを扱う商人をやらして
貰っててね。

まだこの街では商品を卸してないんで、今手持ちがほとんどない
んだが、

商品との現物交換でいいというなら、
ぜひとも購入したいと思っているんだがどうだろう。」

一樹は、完全な張ったりをかましたのだ。

中世ヨーロッパ並みの文化なら、

砂糖、塩、胡椒は高級品のはずだ。

もし違ったとしても、自分は田舎物だということにして、
笑われて終わるだろうと考えたからだ。

一樹の発言で、辺りがざわめき出した。

（やべえこりゃ失敗したかな？

まあ笑われるくらいなら全然構わないけど。）

失敗したと考えていた一樹だが、

商人Aは、卑しい顔をしてこう言ってきた。

「旦那ゝ胡椒か砂糖との交換でしたら、

こちらとしては一向にかまいませんぜ。」

（BINGO）

一樹は心の中でそう叫んだ。

「で、旦那はどれだけの量をお持ちなんですかねえ？」

「生憎今は手持ちがないんだ。

荷物の到着が、予定より遅れているみたいなんですね。

明日の朝までには結構な量が届くはずだ。

それまで待ってもらえるかな？

勿論、その分の手間賃は払うつもりだが。」

「その話本当なんでしょうねえ。」

「ああ本当だとも。」

「わかりやした。

まあ、もし旦那の話が嘘でもこっちは困ることはないですからね。
また明日にでも、こいつを売りに出せばいいだけですから。」

「いいのかい、時は金なりってのが俺の故郷の言葉だぜ。」

「その分しっかり、手間賃を頂きやすからねえ。」

「ちゃっかりしてやがるぜ。」

では、明日またこの場所この時間でいいのかい？」

「はい、お待ちしております。」

ただし、明日のこの時間までをお願いしますよ。」

一樹は、商人Aの話を聞いてからゆっくりとその場を後にした。

（街から祠まで往復で2時間弱、車で街の往復で1時間。

今はまだ1時前か。

普通なら、日が暮れるまでにはここへ戻ってこれるんだが、

オストでの砂糖や胡椒の相場も調べて置きたいからな。

値段によっては下手をすると、

この足で相当な量の胡椒と砂糖を運ぶことになるかもしれないしな。

そうになると、かなりの時間がかかるし、

さすがに、膝が持たないかもしれないからな。

それに、夜の街や森が安全なのかもまだ確認出来てないから、あんまり遅くなる訳にはいかないし。

明日の約束を、商人Aが守らない場合は、

可哀想だけどあの子には諦めてもらうしかないな。）

その後、街を回ってみたが、

砂糖と胡椒を扱う店を発見することは出来なかった。

（だめだ、売ってね。

仕方ないから明日はでたとこ勝負でいくしかないな。

まあ、10? ずつ買っていけば量に問題ないだろう）

そう思いながら、

暗くならない内に、急いで祠へ戻る一樹であった。

いきなりメモミミですか（後書き）

4月19日に修正しました。

感想、ご意見お待ちしております。

神隠しにご用心（前書き）

もし、貴方が異世界にいたらどんなことをしますか？

神隠しにご用心

無事に祠へ戻ることが出来た一樹は車に乗り、あの世界のことを考えた。

（まったく、あのトンネルが本物だなんて思わなかったよ。しかも、蓋を開ければ中世ヨーロッパ並で獣人までいるなんてな世界なんてな

事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものだな。それよりも、何故あのトンネルが騒ぎにならないかが問題な気がするな。

ちよつと町に戻って、さぐりを入れる必要がありそうだ）

そう考えて、近くの町まで車を走らせた。

まずは、スーパーへ行き砂糖と胡椒を買うことにした。

（砂糖は、10kgでもスーパーでも問題なく買えたけど、胡椒10kgは厳しいな）

砂糖10kgくらいであればスーパーでも扱っているがむしろ、取り扱いのないスーパーがあったら見てみたいものだ。しかし、胡椒10kgとなると中々お目にかかることはない。一樹の行ったスーパーにも胡椒は置いてあったが35g入り粒胡椒といった小さなものしか扱っていなかった。

（胡椒の価値が今ひとつわからないからな
中世ヨーロッパでは一握りの胡椒は、同じ重さの黄金
もしくは牛一頭と引き替えにされた。
なんて話があるくらいだからな。

安いってことはないと思うが、300イエンってのが日本円に直すと

どれくらいの価値なのかわからないのも問題だよなあ
やっぱり、向こうで現物を見ておくべきだったな
取り合えず、多めに持ってくしかないか・・・」

「すいません、この辺りに業務用スーパーみたいなのこってないですかね？」

砂糖1kg1袋253円（税込）×10と食料品や飲み物を会計中
レジのおばちゃんに聞いてみた。

「ああ、隣町にあるよ。」

国道〇〇をずっとまっすぐで着くからね」

「そうですか、ありがとうございます。」

そういえば国道〇〇ですが、あそこに変な看板ありませんか？

その先を、300mほど行くと右折できる場所があったんですが」

「何言ってるんだいあんたは、

あの道に隣町までずっと一本道だよ。

何か勘違いしてるんじゃないかい？」

「そうですか、多分俺の勘違いですね。

ありがとうございます」

そう言って砂糖と担いでスーパーで考える。

（つまり、他の人にはあの看板は見えないってことか？

まあ、あのおばちゃんが気づいてないだけで

新たに道が作られた可能性もあるが)

そう考えながら、一樹は車で隣町まで向かう。
道中には、やはりあの看板があり右折ポイントもあった。
そこから300mほど進むと同じような看板が立っていた。

【この先300m先 左折 異世界へのトンネル】

しかし、他の車はまったく気にした様子はないようだ。

(やっぱり、俺以外には見えてないのかな？)

でも、手の込んだイタズラだとは思えないけどな
実際今でも、俺が夢でも見てたのかと思っちまうよ)

そして、隣町の業務用スーパーで黒粒胡椒500g入り820円(税込)

を20個購入し、砂糖と塩を入れる麻袋も購入した。

(さすがに、ビニール袋にいった状態で渡すわけにはいかないからな。

明らかにオーバーテクノロジーすぎる。

麻袋なら、あの世界でもおかしいってことはないだろうないだろう)

業務用スーパーを出るとその近くに喫茶店が見えた。

広い駐車所がある喫茶店だが

そのわりには1台も車が泊まっていない。

しかし、チェーン店系の店とは違うレトロな佇まいをしたお店だ。

(全然客が入ってない・・・)

仕方ないのかもしれないな、チェーン店なら1杯180円で飲めるものを

大体500円から600円で売るんだからな。

でもあの感じだと、昔からここにある店って感じだし情報収集のために入ってみるか。

それに、美味しいコーヒー飲みたいし」

結構なコーヒー好きの一樹はその店に入ってしまった。

「いらっしやいませ」

中に入ると、品のいいおじさんが出迎えてくれた。

「ブレンドコーヒーを一つ」

わかりましたと頷いて、コーヒーを入れるマスター

店内には一樹以外に誰もいなかったのだ

一樹はマスターに色々なことを聞くことが出来た。

この町のこと、この店のこと、マスター自身のこと

マスターはお喋り好きなのか、大いに会話が盛り上がる。

ここのマスターは大友さんと言って、30歳で脱サラして以後10年ここで喫茶店をしているそうだ。

まあかなり経営は厳しいらしいが

かなり打ち解けたと思い、一樹は例のトンネルについて話題を振った。

「マスター、この村から県道〇〇を上ると途中で変な看板があつて左に曲がれる場所があるでしょ。」

そこを登るとトンネルがあるんだけど、

あのトンネル何処かに繋げる計画でもあるんですか？」

はて？という顔でマスターが答える。

「あのお客様、県道〇〇はS町までずっと一本道ですよ
それに県道に看板なんてなかったと思うんですが？」

その答えを聞き驚愕する

だが、なんとか笑顔を維持してこう答えた

「そっかあゝ俺の勘違いだったかな？」

（やっぱり俺以外には見えないのかな）

ふと、そんな事を考えていると大友が意外なことを言い出したのだ。

「もしかすると、お客さんは神隠しに近いものにあったんじゃない
ですかね？」

「神隠しですか？」

「ええ、こちら辺には神隠しの伝説が昔からあるんですよ。

まあ何処にでもありそうな御伽噺ですがね。

何かを潜り抜けると、どっかに消えるって話ですよ。

ただ、残されてる話だと潜り抜けるものに決まりがなかったみたいです
ですね。

お客さんみたく、トンネルだったり、祠だったり

古井戸だったりしたらいいですよ。

それで、神隠しに遭った奴は突如ひょっこり帰ってきて

またいきなりどっかに行っちまうなんて変な話なんですよ。

普通神隠しに遭って戻ってこれたのなら

もう二度と、そんな事にならないよう気をつけるのが普通じゃないですか。

しかし、この話だと何度も戻ってきては何度もいなくなってるみたいなんですね。まあ戻ってこなかった、なんて話もあるんですがね」

「そうですか、それは面白い話ですね
それにしても、随分と詳しいんですね」

「これでも、大学時代は民俗学を専攻してましたからね
地元の話なんですからね、
研究して、卒論のレポートにこの話を書きましたからね」

「貴重な話を聞けて楽しかったです。
これ、コーヒー代です。
どうも有難うございました」

「お客さん、もし神隠しにあったら
教えてください。
町おこしに使えるかもしれませんからね」

勘定を払い、店を出て車に戻る一樹。
辺りはもう薄暗くなっていた。

（つまり、大友さんの話だと
あのトンネルは神隠しの状態であり
神隠しに会った人は、あの世界に行っちゃってことか
まあ戻ってこなかった人は、向こうに永住したか
それとも、向こうで何かあって命を落としたかだな。
これなら、俺以外にあのトンネルが見えないのも

なんとなく分かる気がするな。

波長とかそういうのが合わないとか見えなとかあるのかもしれないな。

たまたま俺は合ってたっていう訳か)

そう結論づけ一樹はあの不思議なトンネルに向かって車を走らせた。

(傷心旅行が面白いことになってきたな)

神隠しにご用心（後書き）

1月22日に修正しました。

感想、ご意見お待ちしております。

優しい門番（前書き）

何時の間にか20万PVに届きそうですし、登録数も500人を越えました

私の拙い作品をよんで頂まことにありがとうございます。

優しい門番

夏の強い日差しで目の覚めた一樹。

車の中の温度はすでに30度を越えムシムシとしていた。

昨日はトンネルの前で、車の中で寝たようだ。

「はぁあんまり眠れなかったな。

暑いし、寝苦しいし、なんか体が硬いし、

やっぱり車で寝るのはよくないわ」

アイドリングストップ&ガソリン代の節約で冷房を付けずに車の中で寝た一樹はあまり寝ることができなかったのだ。

すぐに、車のエンジンをかけ冷房を付ける。

暫くすると、涼しい風が車内の温度を下げる。

「ああ、生き返る」

クーラーはいいね、リリンの生み出した文化の極みだよ」

クーラーで少し冷やされた七甲の美味しい水を飲みながら叫んだ。
現在朝8時過ぎである。

（10時にできればこの足でも約20kの荷物を持ちながら

1時間にはあの広場につけるはずだ。

本当だったら車で街までいけばいいんだけどな）

そんなことを考えながら朝飯を食べ、10時まで時間を潰す為に辺りの散策を行ってみた。

別段珍しいものはなかったが、

辺りにゴミが一つも落ちてないのが気になった。

そして、鳥や小動物なども見かけることは無かった。

（やっぱり、ここに入り込める人間は今のところ俺だけだったことかな？

タバコの吸殻だったり、ビニール袋の一つくらいは落ちてておかしくないのに。

それに鳥の1羽だって見ていない。

まったく不思議な場所だよここは。

本当は向こうの祠の回りも散策したかったけど
どんな獣がいるかわからんからな。

行き成り、熊にでもあつたら洒落にならない）

散策に時間がかかってしまったので

一樹は、急いで砂糖と胡椒を麻袋に詰め出した。

9時45分に作業が終了

車の中で少し休憩を取り、麻袋を持って街へ向かった。

途中やはり、痛めた膝が疼きだした。

その旅に一樹は、休憩を取りゆっくりと移動していった。

（無理しても、いいことないから時間も余裕を持って出てきたし）

途中で、膝の痛みが限界に達しそうになったが

気合と根性で麻袋を運ぶ一樹。

どうにか門まで運ぶことが出来た一樹だが、

門の前で一休みする一樹

（ここからが、また一苦労だなorz）

と垂れていたところ、昨日の門番が話しかけて来た。

「どうしたんだ、そんな顔して」

「いや、商品が届いたんですがね
あんまりにも重たいんで、困ってた所なんですよ」

「何故馬車で街の中まで運び込まなかったんだ。
その荷物を抱えて、お前が苦しそうに運んでいるのが見えていた。
街まで運んでもらえばそんな苦労は無かっただろう」

「いえ、遅れを取り戻す為に
この街まで運んでる時間は無いなんて言うものですからね
約束の場所で荷物を降ろして、
さっさと馬車は他の街へ向かったんですよ」

（これで、怪しくはないと思うんだけどな・・・）

一樹は、この解答で怪しくないか不安だったが、
門番はそんな事を気にする様子もなく

「そうか、それは大変だったな
その量ではかなりの重さになるだろう。
商人も大変なものだな」

「ええ、私の故郷では、時は金なりと言って
少しの遅れだとしても、かなりの罰金などを取られることがある
んですよ。」

ですから、その遅れを取り戻す為にこんな事になってしまったんで
すがね」

そう、日本の常識で言えば

宅配予定時間をすぎることは厳禁だ。
信用問題になりかねない。

その常識が、この世界で通じるかどうかわからないが
自分の故郷の事ではこうなのだという事にして
なるべく怪しまれないようにしたのだ。

「そうか、確かに待ってる時間があれば
色々な事が出来るだろうな
時は金なりか、まさにその通りだな」

「これから、この荷物を広場に持っていけないといけません
考えただけでも憂鬱ですよ。」

「それは確かに大変だな
よし、俺は今から休憩の時間だからな
広場まで俺が荷物を持ってやろう」

「いや、悪いですから」

「かまわんさ、
商人がいなければ街は成り立たないからな。
強欲な商人は、大嫌いだが

お前はそんな感じではないからな
それに荷物の運び料なんて取らないから心配するな。
困っている人を助けるのは騎士の務めだからな」

「貴方は騎士だったんですか！」

「すまん、正確には騎士見習いだ。
何度か採用試験を受けたのだが、今だに合格できない。

なので、こんな所で門番なんてやってるんだが
でも、いつかは騎士になるぞ

その為にも、騎士の心得ぐらいはしっかりと実践しておきたいの
さ」

「そうですか、ありがとうございます。
自己紹介が遅れました。

私は斉藤一樹といいます

斉藤が苗字で一樹が名前です。

こちらの呼び方だと、一樹斉藤になると思います。
荷物の件、申し訳ないですがよろしくお願いします」

「平民なのに苗字があるのか

斉藤の故郷は少し変わっているのだな

俺は、ハルクだ。

騎士見習いのハルクだ。

俺のことはハルクでいいぞ」

「では、私のことも一樹で構いません」

「そうか、では一樹

この荷物を広場へ運べばいいんだな

すまんが何処の広場かわからるので案内を頼む」

そう言ってハルクは重たい荷物を軽々と抱えた。

一樹はこちらですと案内をしながら歩いた。

「それにしても、この街は随分と立派ですね」

日本に比べれば大したことは無いが

それでも、道はレンガのようなもので舗装され道幅も広く作られている。

上下水道まで整備されているかはわからないが廃棄物や糞尿の臭いもしない。

中世ヨーロッパ並みだと考えると綺麗なほうだろう。

「ああ、街を綺麗にするのにかなりの増税があったからな

その所為で、多くの人間が貧民街に行くことになってしまったよ。

私は、腕っ節が強かったので騎士見習いとして仕事が出来たがそれがなかったら今頃私も貧民街で生活していた所だよ。

街を綺麗にすることに関しては反対しないが

税を上げてするべきことではないと思っているよ」

（それで、こんなに綺麗なのか

でもそれやっちゃまったらヤバイだろ・・・

生活出来ないほどの増税なんてやってよく反乱が起きないもんだ）

「そうですか、この街の皆さんも大変なんですね」

「ああ、大変なんだよ」

そうやって話しているうちに

広場に到着した一樹。

昨日同様に広場には人たかりが出来ており、

昨日の奴隷商の男は、すでに広場で待っていたのだ。

「ハルクさん、ここで大丈夫です。

有難うございました」

「そうか、何か困ったことがあったら

この俺に言ってくれ

騎士として、相談に乗ってやろう」

「騎士見習いじゃないんですか？」

「常に騎士の心得を実践することが騎士になる為には大事なんだ」

そう言うと、颯爽とハルクは帰っていった。

（いい人だったな。

これから、あんまり関わり合いたく人と

商談の話をしないといけないのか　ハァ（気が重い）

一樹はそう思いながら奴隷商人と向き合ったのだった。

ずっと一樹のターン

「お待ちしておりましたぜえ〜旦那」

奴隷商人の男は、ハルクとは違い卑しそうな顔で一樹に挨拶をした。一樹は、何かとか笑顔を作り返事をした。

「待たせてしまって申し訳なかった。

それにしても随分早いな、まだ時間に余裕はあったと思ったんだがね」

「当たり前ですよ

商談では、相手より早く出向くのは鉄則ですぜ」

（こっちでも15分前行動は当たり前なのか
まあ今回はあまり関係ないと思うんだがね）

「かまわないさ、今回はすでに商談を済ませているんだからな」

「手間賃のほうは、まだ決めてなかったと思いますがねえ」

「本当にちゃっかりした奴だなお前は」

そんな挨拶をすませ、一樹は胡椒と砂糖が入った袋を相手に見せた。

「ほら、こっちの袋には胡椒がこちらの袋には砂糖が入っている。
確認してもらえるかな？」

辺りが少しざわめいていたが、

奴隷商人の男は、すぐさま袋の中身を確認しだした。

勿論ちよろまかされない様に、一樹は横でずっと男の手を見ていた。

（変なことしやがったら、ただじゃおかないからな）

そんな一樹の目が気になったのか

奴隷商人の男は、一樹をチラチラと見ながら確認していた。

「確かに確認しました。

そうですね、今の胡椒と砂糖の価格ですと

このふたつの袋全部でこの奴隷と交換ってところですかね」

「この袋の中身全部だと？」

「ええそうです、今の胡椒と砂糖の価格ですと

この2つの袋でも届くかという感じですぜえ旦那

そうだろうみんなあゝ」

そう叫ぶと周りの野次馬もそうだ、そうだと頷いていた。

しかし、一樹は違和感を感じていた。

（胡椒と砂糖の重さも量らず、

この量で、300イエンが妥当なんてなんでわかるんだ。

しかも、こいつは砂糖と胡椒の品質がわかるほど胡椒と砂糖に詳しいっていうか？

ここが中世なら上白糖なんて無いはずなんだがな）

「勿論、足りなかったとしても足りない分を後から請求したりはしませんから

安心してください旦那」

一樹はこの卑しい顔をみて確信した。

（間違いない。

こいつこつちを田舎物だと思って値段誤魔化して騙そうとしてやる。

なら、こつちもそれ相応の手段にでるまでだ）

「ところで、胡椒と砂糖の交換だところから持ちかけておいてなんなんだが

300イエンを現金で支払うってのはありなのか？」

「現金ですかねえ、あっしは一向に構いませんが

旦那は、今お金をお持ちでないのでは？」

あいも変わらず卑しそうな笑みを浮かべる奴隷商人の男
お前は金がないだろとそう言ってるようだ。

（言質を取った、ここからはずっと俺のターン）

「さあ、お集まりの皆さん、この2つの袋には大量の砂糖と胡椒が入ってます。

その男が、確認済みですのでご安心ください。

今この場にて、この2つの商品のオークションを始めたいと思います。」

「旦那あゝ行き成り何を言ってるんですか？」

「おいおい、ニーちゃんおくしょんってのはなんだい？」

周りの野次馬が騒いでいる。

「ええ、オークションとはですね。

私の故郷の言葉なんですが

早い話が、この胡椒と砂糖に一番高い値段をつけた人が買い取って手法ですよ」

「旦那、ですからこの胡椒と砂糖じゃ3000イエンいくかいかなかったって価格ですよ。

こっちとしても破格の値段だと思いますがねえ」

奴隷商の男は、少し焦ったような顔で一樹に喋りかける。

そんな男は無視して袋から砂糖と胡椒を周りの野次馬に少量ずつ配りだす。

品質を確かめて貰うためだ。

（この場で砂糖と胡椒の品質を確かめてもらえば

ここににいる人達もこれの価値に気づくはずだ。

そうすれば、この男だけに儲けさす訳にはいかないと思ってくれる）

「今お配りした、胡椒と砂糖はそのまま食べてもらって結構です。

どうですかいい品でしょう。

いいんですか皆さん、このままだとこの男だけが儲けますよ。

皆さんが儲ける機会が失われるんですよ。

はい、3000イエンから開始します。

さあさあ、3000イエンより上はいないかあ3000イエンより上はいないかあ」

奴隷商の男は周りの野次馬を睨んでいるが、ふと野次馬から声が上

がった。

「330イエンで買うぞぉ」

(キタ――(。V。)――!!!!!!)

「俺は400イエンだ」

奴隷商の男は野次馬に向かってこう叫んだ。

「てめえら、話を合わせろって言ってあつたじゃねえか！」

野次馬はそんなもん知るかといった感じでこう返す。

「てめえだけ儲けよとしたってそうはいかねえんだよ

これだけの品だ王家にだって献上できる。

それを300イエンで買い叩かせる訳にはいかねえんだよ！」

「はいはい、やっぱりそうだったんですねえ」

おかしいと思ったんですよ。

まあそれは置いておいて、オークションを続けましょう。

400イエンより上はいないかぁ、400イエンより上はいないかぁ」

「435イエン」

「520イエン」

最終的には3032イエン82セエン62リンという金額が付いた。これだけの金額が付いた理由だが

変わった服装の男が、胡椒と砂糖を持ってくると噂を聞いた商人が、広場に集まっていたこと。

奴隷商の男が、胡椒と砂糖の交換の場で

自分に有利な状態を作る為に

知り合いの商人を集めていたのが裏目に出た形だ。

落札した男は、サムエと名乗り

さすがに、3000イェンもの金額を現金で支払うのはムリなので支払いはギルド手形で構わないかと言ってきた。

一樹は、先に奴隷商人の男と話をつけたいたので待っていてくれと返事を保留した。

がっくりとした奴隷商人の男に向かって一樹はこう言った。

「さて、この獣人だが、3000イェンでよかったんだよな

まあ、手間賃もいれて、4000イェンで買い取ろうと思うがどうだろう？」

男は驚いた顔している。

当然、自分を騙そうとした相手だ買い叩かれてもおかしはずなのに一樹は手間賃として、もう1000イェン余分に払うと言っているのだから驚くのは当然だ。

しかし、一樹としては

ここでよい恨みを買う必要はないわけでこの金額を提示したのだ。

「旦那、本当にその値段でいいんですか？」

「かまわんさ、手間賃を払うといっただろ？」

ところで支払いだが、ギルド手形でも構わないか？」

「ギルド手形ですか、こちらとしては支払って頂ければ

どんな形でもかまいませんよ」

奴隷商の男は、気持ち悪いくらい良い笑顔でそういった。

「だそうです。

サムエさん先ほどの話ですが、ギルド手形での支払いで構いません。

ですが、こちらの男に400イェン分のギルド手形を渡してください。

残りの2600イェン分をギルド手形で

残りの32イェン82セェン62リンを現金でいただけますか？」

サムエは

「今用意してきますので暫くここでお待ちください」

そう言って去っていった。

15分ほどで戻ってきたサムエは、奴隷商の男に100イェンの手形4枚を渡す。

続いて、一樹に100イェンの手形26枚とお金の入った袋を渡してこう言った。

「次も、胡椒と砂糖が手に入りましたら、

ぜひとも、私の商会に卸して頂きたいものです。

場所は、この街でサムエ商会と言えば誰でも知っていると思います。

それと、これをお持ち頂ければすぐにでも私へ取り次がせますので。

では、これで失礼します」

そういつて、サムエは木札を渡し
砂糖と胡椒を抱えてホクホク顔で帰っていった。

（これは、名刺のようなものかな？

しかし、あの顔だとあの値段でも買い叩かれたっぽいな
まあ10分の1で買われなかっただけでも十分だけだな）

次に、奴隷商人の男から獣人の女の子と
指輪を受け取る。

「その指輪がこのメスの契約の証でさ

それじゃあ、あっしはこの辺で

次のもまた頼みますぜ旦那あ」

そう言つて男は去つていった。

女の子と一樹の二人だけが残されている。

（さて、あらかた片付いたな。

この指輪が契約書のかわりなのか？

そんなことより、一つ大きな問題が残つてるけどどうやって解決す
るべきか・・・）

そう、一樹に買われた獣人の女の子は、

一樹に親の敵かと思うほどの

恨みの視線をぶつけてきているのだった。

ずっと一樹のターン（後書き）

1イエシ 日本円で約1万円

1セシ 日本円で約100円

1リン 日本円で約1円

1月24日修正しました。

と考えていただければいいと思います。

流石は異世界だぜ（前書き）

やっと魔法が出ました

次回は魔法の詳細をお届けします。

流石は異世界だぜ

（さて、すげえ睨んでるこの子をどうしよう・・・
取りあえず話を聞いてみることにするかな
この世界での貴重な情報源だしな）

「初めまして、俺は斉藤一樹だ。
君の名前を覚えてもらえるかな？」

フンっとそっぽを向いて何も話してくれない彼女。

（こりゃダメっぽいな、まずは信用を得ないといけないってどこか）

一樹は取りあえず窮屈そうな首輪を外してあげることにした。
まあ、このまま逃げ出しても構わないと思っていたからだ。

「まずその首輪を外そうか
そんなものを付けている必要はないからね。」

カチャカチャッと一樹は首輪を外していく

（なんだ、鍵でも付いてるのかと思ったら簡単に外せるじゃないか。
これならあの男から逃げることも出来たんじゃないのか？
なんで、この子は逃げ出さなかったんだろう）

「ところで、君はなんで逃げなかったんだい？
こんな首輪なんてすぐに外せるだろう。
そんな視線を出すんだから、借金の形でこうなったわけじゃない
んだろう？」

彼女はキゅっと睨みつけてこう言った。

（そんなに睨みつけないでくれよ）

少しビビってる一樹に女の子はこう答えた。

「お前その指輪持っててよくそんなことがいえる。

それがある限り、逃げるなんて出来るわけがないのに」

「はい・・・こんな指輪の所為で君は逃げられないのかい？」

「よくもぬけぬけと

その指輪には服従の契約が交わされていて

指輪を持つものには逆らえないと知ってて馬鹿にしてるのか！」

一樹は首を捻って考える。

（服従の契約？もしかして、異世界にありがちな魔法とかなのか
それなんてチート・・・

やばい、こりゃ早急に情報を収集しないと命取りになりそうだ）

「すまないが、少し話を聞かせてもらいたい。

その代わりに、君には報酬を出すから

この手形で500イェンを渡そう。

それに、この指輪も君に渡す。

話を聞いてくれるだけで、君は自由になれるしお金も手に入る。

悪くないと思うんだけどね」

彼女はこいつ何言ってんだって顔をしている。

(ハァ、この世界に来てからこの顔をよくされてるな)

そんな一樹に対して彼女は

「お前は何を言ってるのか分かっているのか!」

「もちろん、指輪を先に渡すことはできないけど
お金のほうなら先に渡してもかまわないよ
どうする、先に貰っておく?」

「結構だ。」

話をした後で指輪の力を使われれば、返す嵌めになるのだからな。
ぬか喜びはしたくない

それに私は、お前の買われた奴隷だ。
結局従うしかないんだよ」

諦めた口調で話す彼女に一樹は

(別に奴隷にしたいから買った訳じゃないんだけどな・・・
可哀想だったから助ける為と
情報を貰う為だったんだけどな・・・)

可愛い女の子に結構言われてさらに凹んだ一樹だが
いい加減、ここで騒いでる訳にはいかないし
お腹も減ってきたので移動しようと考えた。

「取りあえず、移動しようここじゃ目立ってしょうがない。
それに、お腹も減ってきたしね。
そういえば、君はお腹すいてないかい?」

もう、いい時間だし。

飯でも食べながら話をしようじゃないか。
君はこの辺りの美味しい店知らない？」

「知るわけないだろ！」

「それは悪かった。

取りあえず付いてきてよ。

適当に飯屋を探すから」

そう言って店屋を探して歩き出す一樹

不機嫌な彼女は渋々一樹に付いて行った。

（やっぱり、そんなもんだよなあ〜可愛い従順な奴隷なんて

所詮は漢の夢だよなあ〜orz

奴隷ケモミミプレイかあ〜雪に試してみるべきだったな失敗した。

雪に何度かメイド服を着せてご主人様あ〜って

言わせたことあったけど、そっちは気がつかなかったぜ。

でもあればすごくよかった。

ものすごく萌えた。

いつもの3割増しで頑張れた。

って何考えてんだ俺はあああああああ

でも、あの子すごく可愛いよなあ、ちよつと気が強そうだけど

綺麗な薄緑色の腰まであるロングの髪で

全体的にほっそりしてる。

でも、しっかり主張する場所は主張してるし

あの子がレイヤーだったら、フラッシュが止まらないだろなあ）

なんて考えるうちにめしやと書かれた看板を発見した。

一樹が店に入ろうとしても、彼女は店に入ろうとはせず

「私はここで待っている。

食事が済んだら、呼んで欲しい。」

「いやいや、別に中に入って一緒に食べればいいじゃん」

「お前は、奴隷の私に

主人であるお前と、一緒に食事をしろといっているのか？
さっきからお前はおかしな事ばかり言う。

それに、奴隷の私が食事を払うお金を持ってる訳ないだろ」

「いいよ、俺が出すから入ろう。

可愛い女の子に食事代ださせるなんて
漢のすることじゃないからね」

「本当に変わってるんだなお前は」

「俺の故郷では、これが普通なんだけどな」

一樹と彼女は店に入る。

お昼時を過ぎているのか、お客はポツポツとしかない。
なので、簡単に席を確保して座ることが出来た。

一樹は取りあえず、本日のお勧めを2人前注文した。
ちなみに、本日のお勧めは一人前20セェンだった。

「さっきも自己紹介したんだけど、俺は斉藤一樹だ
君の名前を覚えてくれないかな？」

「私の名はミミだ」

（人が近くにいないので質問しても大丈夫だろう）

そう考え、一樹はミミに質問しだした。

「ミミか、いい名前だね

ズバリ聞くけど、この指輪って何なんだい？」

「だからそれは、服従の指輪だとさっきから言っているだろ」

一樹は辺りを見まわして、これだけ騒がしければ問題ないだろうと思い、ミミに話しかける。

「ミミ、驚かないで聞いて欲しいんだけど

俺の故郷では、こんなもの無かったんだ。

俺の故郷は、まったく外の情報が入ってこないような場所で隠れ里って言うってわかるかな？ そんな村だったんだよ。

この大陸が、オストレリア大陸、

この国がフランク王国

名前くらいしか村では教えて貰えなかった。

だからこの国がどんな国で、この街がどんな街かまったくわからん。

この指輪のこともわからないんだ」

（ミミ嘘ついてごめん、まだ真実は話せない

ちなみに、大陸と街の名前は門番のハルクに教えてもらいました）

「そんな場所があるのか！」

「あるんだからしょうがないだろ」

「そうなのか、私はそんな村があるなんて思わなかった。
あの胡椒と砂糖も、もしかしてその村から」

「そう、村では普通に手に入るものなんだ
こっちの世界では高価なものなんだろ
それは、村で教わる事が出来たから
村から持ってきたんだよ」

「なんで、お前は村を出たんだ。
そんなものが普通に手に入るような村ならば
街に出ずとも暮らしていけただろうに」

「外の世界を見てみたかったからだよ。
それに黙ってでてきた訳じゃない。
ちゃんと許可を貰って村を出たんだ」

（嘘で~~~~~す。

確かに傷心旅行に行く際親に許可はもらったけど
異世界にいく許可は貰ってない）

「実際、ここの食事代が高いのか、それとも安いのか。
それすら、俺にはわからないんだ。

だから、この世界についてミミが知ってる事を教えて欲しい。
さっきも言ったけど、勿論報酬は払うよ。
500イエント、この指輪をミミに渡すよ」

「随分と気前のいい男だな」

「一樹だ。

一樹と名前で呼んでくれないかな？」

「わかったわ。」

一樹は随分と気前がいいのね」

「そうかな？俺は安いくらいだと思うけど
情報は、命の次くらいに大事なことからね。
それと、その口調のほうが話しやすいね」

「ありがとう

一応信頼の証みたいなのかな？

一樹はいい人そうだからね。

奴隷になっても、絶対に屈しないって思ってたから
ずっとあの口調で喋ってたのよ。

ちなみに、この食事代は、良心的な値段よ。

一樹はいい店を選んだのね」

そう言ってミミは初めて笑顔を見せたのだった。
ミミのその笑顔をみて、一樹は思った。

（やべえ超可愛い）

丁度その時、お勧め定食が運ばれてきたのだった。

流石は異世界だぜ（後書き）

1月24日に修正しました

異世界の魔法（前書き）

ところでこの小説なんでもじファンに搭載されてるんですかね？
私的には小説家になろうに投稿したつもりだったんですが・・・

異世界の魔法

一応ミミの信頼を勝ち取った一樹は、食事をしながら、ミミの持っている情報を話してもらった。

この国のこと、この村のこと、この指輪のこと、

ちなみに、お勧め定食は牛肉と思われる焼肉定食だった。

肉は柔らかく、味付けは塩味だけだったが十分に美味しかった。

まず、この国フランク王国

昔からの身分制度があり、王族＞貴族＞平民＞亜人とあり窮屈な国らしい。

まあ、近頃はそれもかなりゆるくなってきたらしいが。

その理由だが、王族、貴族が見栄を為に、かなりのお金を使い借金だらけになってしまったからだ。

借金だらけの王家と貴族は

王家は、貴族の位をお金で売り、貴族は自分の領地や位を売リなんとか凌いでいるそうだ。

お金さえあれば、今では簡単に貴族なれてしまうそうなので貴族と平民の差もあいまいになってしまったようだ。

江戸時代の御家人株みたいなものなのかもしれない。

それでも、平民と亜人の差はいまだに健在らしい。

実際さつきから、ミミを見る目線が厳しいこんな可愛い子なのだ。

「ミミ、貴族になったり、領地を買うにはどうしたらいいんだい」

「確か、王宮近くにある、

なんとか院に申し込んでお金を払えば大丈夫だった気がするんだけど

ごめんなさい。

私は、詳しくは知らないのよ。

今までそんなこと、考えたこともなかったから」

（まあ確かにそうだろうなあ、しかたない次だ次）

次に、このハイネだ

このハイネは現在芸術都市として、有名になりつつあるらしい。

故に街の景観をよくする為に、6割の税を取り、

無役で平民に工事をさせていたらしい。

その所為で、街の中心部は美しいが

少し離れれば貧民街が立ち並んでいるらしい。

よく一揆を起さなかったものだ。

人口は約5万人でフランク王国最大の街らしい。

ただこの人口も推定でしかない

戸籍など人口を計るものがなく、あいまいらしい。

そして、問題の指輪だが

やっぱり、この世界には魔法があるらしい。

流石だぜ！異世界

ただし、RPGなんかによくある

攻撃魔法は存在しないらしい。

この世界にある魔法は、RPGでいうところ強化魔法といったところだ。

物に魔力をこめることで

通常よりも高い効果を發揮できるようにする魔法らしい。

魔力を込める際には、物に名前を与える方法が一般的で

名前は適当でいいらしい。

しかし、同じものでも与える名前によって効果が違うので
適当な名前を付けても、あまり効果が見込めないそうだ。

剣に魔力を込め名前を与える。

それにより、普通の剣が良く切れる剣になるというわけだ。
この魔力、みな大なり小なり持っているものらしい。

そして、この魔法の所為で亜人が最低の身分になってしまったのだ
そうだ。

通常この魔法は、人には効果がない。

人に魔力を込め、名前を与えても意味がないらしい。

魔力を込めることにより、多少の回復効果はあるそうだが。

だが、亜人には違うようだ。

亜人に強化魔法を使うと、普通に身体強化されてしまうそうだ。

ただでさえ、高い身体能力を持つ亜人がさらに強化されてしまう。
困った人間が対抗策として作りだしたのが、この服従の契約だそう
だ。

亜人に、仮初の名と魔力を与え、その名を何か物に封印する。

指輪や腕輪、ネックレスなんかを使うのが主流らしい。

それにより、名前を封じられた亜人を服従させることが出来るそう
だ。

それにより、この国にいる亜人達は人に隠れて生きている。

「じゃあ、今誰かがミミに服従の契約をしたら

俺じゃなくて、そいつに服従することになるのか？」

「その心配はないわよ。

この契約は一度破棄されない限り再度契約を結ぶところは出来ない
から」

ここで、一樹は疑問に思った。

それなら、簡単に回避できるのでないかと

「だったら、親か誰かに契約をしてもらって
その契約の証を自分で持っていればいいんじゃないのか？
そしたら、人に服従の契約をされても回避できるし
問題もなくなると思うんだが」

ミミはその話聞いて愕然としてた。

（その発想は無かったって顔してるよ大丈夫なのか亜人・・・少し
は考えろよ）

「でも、それにより人と亜人が争うようになるなら
ミミを、開放してあげることが出来ないよ」

そう、これにより亜人と人間の戦争が起こるようなら
一樹は、このままミミを解放することが出来なくなる。
それについて、ミミはこう答えた。

「一樹心配しないで。

元々亜人達は、争いを好まず

自然の中で自由に暮らしていく事を望んでいるのよ。

人から争いを仕掛けてこない限り

こちらから仕掛けるようなことはまずあり得と思うわ」

それを聞いて安心する一樹

やはり、そこは日本人の一樹

自分の所為で戦争なんて起きたら寝覚めが悪い。

「後はそうだな、この2600イエンってどれくらいの価値がある
か分かるかな？」

「そうね、一般平民が一年で稼ぐ金額が大体240〜300イエンくらいよ」

それを聞いて、かなり驚く一樹。

（つまり10年遊んで暮らせる金額をさっき手にいれたのか
日本円に直すと1イエン＝約1万円ってことか

ミミは400万で俺に買われたのか・・・安いな。

一人の値段が400万って日本では考えられない。

倫理的にありえないけど、もし日本でミミみたいな可愛い子が
売られることになったら馬鹿売れになるな。

空気嫁なんて誰も買わなくなるぞ）

「つまり、かなりの大金ってことか」

「そうね、一樹は私に対して、平民の約2年の年収を報酬に出すと
言ったのよ。

これで私が、驚いた訳も分かってくれたと思うんだけどね」

「いや、妥当な報酬だと思うよ。

俺にとって、これらの情報はお金に変えられない価値があるからね」

「やっぱり、一樹は変わってるのね」

そう言って微笑んでいるミミ

「この手形って何処でお金に変えられるかわかる？」

「手形なら、商業ギルドに行けば簡単に現金にしてくれるわ

商業ギルドは、大きな街なら大抵あるものだから」

「そうか、そいつは助かる」

一樹は、一息ついてコップに入っている水を飲みほした。

ちなみに、この水は日本とは違って有料で

1杯1セェンもするから驚きだ。

まあ、日本と違って蛇口を捻れば水がでてくる環境ではないのでそれは、仕方の無いことかもしれないが。

「本当に、一樹の村は外の情報がまったくといっていいほど入ってこない場所だったのね」

「そう言ったじゃないか」

何を今更といった感じで一樹は答える。

しかし、ミミは

「そんな王家からも、貴族からも、商人達にさえも見つからない場所なんてあり得ないと思ってたのよ」

「あり得ないなんて事は無いって誰かが言ってたよ」

「そっか、そうだね」

私達亜人も、人から隠れて生きていかなきゃいけないと思っ」

「シー、その先は言っちゃダメだよ

誰が聞いているかわからないんだからね

これが、誰かに知られたら俺もミミもただじゃ済まない」

一樹は小さな声でミミのその先の言葉を封じた。

この秘密を、誰かに聞かれてしまったら

一樹もミミも消されてしまうだろう。

この方法により、亜人が人の手から離れ自由になってしまう。

きっと、人間はそれを良しはしないだろう。

「そうね、ごめんなさい一樹」

すまなそうな顔をしてるミミ

とりあえず話題を変えようと一樹は先ほどの食事について
話題を振ってみた。

「そういえば、さっきのお勧め定食に使われていたのは牛肉だよ
昼のお勧め定食で牛の焼肉定食がでてくるとは思わなかったよ
しかも、柔らかくて美味しかったし」

しかし、またミミはおかしな事を言う人といった感じでこう答えた。

「何言ってるのよ、肉と言えば牛に決まってるでしょ。」

こんな店で、鳥や豚なんて高価な肉が出せるわけじゃないじゃない」

その発言により、たまたま通りかかったお店の人が、ミミを睨みつけている。

（まあ当然だ。

自分の店を、こんな店呼ばわりされたんだから）

「ミミ、あの店の人に謝れ。」

そんな事言われたら、店の人は、気分がいいもんじゃないだろ。
それに、ここの定食は美味しかった。

美味しいものを、手軽な値段で提供するこのお店を
こんな店呼ばわりは、俺も感心しない」

そういうと、ミミはすぐさま素直に店の人に頭を下げた。

店の人はちょっと困った顔をしていたが、素直に謝罪を受け入れた。
そして、一樹には店を褒めて頂いてありがとうございます
と頭を下げた。

しかし、あんまりにも素直に頭をさげたミミに対して一樹は不安に
思った。

これが、この指輪の効果なのかもしれないと思ったからだ。

「ミミ、素直に謝ってくれてありがとう」

「いいのよ、確かに私が悪かったんだから」

「そうかよかったよ」

実はこれがこの指輪の効果なのかなって思って心配したんだよ」

「何言ってるの一樹は」

その指輪には、魔力をこめて命令しないと意味はないのよ。

それに、自分の意思とは関係なしに行動させることが出来るから
私が悪かったなんていう訳ないでしょ」

「そうなのかよかったよ」

「ところで、鶏や豚が高価ってどういう訳なんだ」

「一樹の村では違うの？」

日本で牛には結構高価だ。

豚肉と牛肉では、値段が倍ほど違ったりする。

「ああ、どちらかというと、牛の肉が一番高価で次に豚、一番安い肉が鳥肉になってるね」

「そうなの、そんなところまで違っているのね。」

この国では、牛は農作業に使われるのが普通なの
そして、もう農作業に使えなくなった牛を食べる。
だから、安く手にいれられるの。

鳥肉は、飼育期間が比較的に短くて、
卵を取る目的で飼育される場合があるから

牛よりは高いのだけれど、平民が口にできない値段じゃないわ。
豚は昔から、食べるために飼育がされていたのよ。

牛の飼育もあつたらしいけど、

牛は飼育期間がとても長くて、

農作業に使われるからって失敗したらしいけど。

豚は飼育期間が牛よりも短くすむし、農作業には向かないので、
高価な肉として国に広がったのよ」

それを聞き、もしかして、この世界で

安価な肉でも、美味しく作れる牛丼を作れば、

一儲けできるかもしれないと思った一樹だった。

異世界の魔法（後書き）

感想とかもらえると

作者は狂喜乱舞します

1月24日に修正しました。

宗教について（前書き）

作者は牛丼より豚丼が好みます

宗教について

牛丼それは至高の食べ物

牛丼それは房素顔がわからない国民的ヒーローの大好物

牛丼それは貧乏学生の救いの手

牛丼それは日本食の集大成

そんな事に思考を巡らせている一樹にミミは

「どうしたの一樹、何か考え事？」

「いやちょっとね

故郷の料理を、こっちで広められないかなって思ってたさ」

「一樹の故郷の料理か、ちょっと興味があるわね。

教えてもらえる？」

「まあそれは、おいおいでね。

最後の質問になるけど。

この国って宗教とか信仰してるものってあるかな？

これ、かなり大事なことなんだけど」

（これしっかりと抑えないとやばすぎるからな

この世界は中世ヨーロッパ並だ。

俺も詳しくないけど、確か中世時代は

キリスト教がかなり幅を効かせていたらしいからな。

異端審問やら魔女狩りやらが

こっちで存在した場合、即効で死刑とかありえるからな。

宗教があるのかないのか。

實際何を崇めているのか。

政教分離はできているのか。

商人として生きていくなら、お布施っていくら払えば良いのか。かなり大事になってくるはずだ。

これ異世界とか行くことになったら、超大事なポイントだからみんなも用心してくれ

これ抑えないと、いきなり死刑とかありえるからな」

「この国での宗教ね

昔はワイトウルス信仰と言って

ワイトウルス神権国がものすごい力を持っていたの。

巫人への服従の契約を作ったのも、この国だったのだけど

今はもうなんの力もないわよ。

今じゃ誰もワイトウルス神なんて信じてないし、

そもそもワイトウルス神権国事態が、もう国として機能してないそうよ。

だから、この国というか、この大陸に宗教なんて存在してないんじゃないかしら？

他にだと、魔獣信仰くらいなものねあるのは」

一樹は、ミミの言葉に呆然とする。

一樹がそうなるのも、当然といえば当然かもしれないが

（今ミミが、聞き捨てならない事言わなかったか？

魔獣って・・・よくアニメでくる化け物のことか？）

自分の聞き違いだと祈って、ミミに話を聞くことにした。

「ミミ、魔獣ってとんでもない怪物のことか？」

「ええ、魔獣＝怪物と考えていいと思うわ

一樹の村では魔獣を見ることはなかったの？」

「ああ、まったくいなかった」

（日本に魔獣なんているわきゃねえええええだろ！）

そう一樹は、心の中でつつこんだ。

日本に魔獣なんていたら、自衛隊の出番です。
出撃ですブルーインパルス

「そう、ますますおかしい村ね、一樹の村は
確かに最近、人に害をなす魔獣なんて
少なくなっただけど、それでも街の外にいけば
魔獣なんて見る機会はあるでしょうに」

「見なかったんだよ村では！
それはいいから、魔獣信仰ってあれか
中でも力の強い魔獣が暴れないように
人を生贄に捧げるとかいう奴か？」

「そうね、力のある魔獣に供物ささげる信仰よ。
ただこれを、信仰してるのは殆どが人じゃないわよ。
私たちつまり、ほとんどは亜人が信仰してるのよ。
地方のほうだと、信仰してる人はいるみたいだけどね」

「亜人の宗教？」

「そうよ、私たち亜人は魔獣の当然変異とか
魔獣と人との間に生まれた子供が、亜人だったって考えられてい
るの。」

だから、私達亜人は魔獣に対して感謝を示すために
祈りと供物を捧げるの」

「でも生贄なんだろう、そんなこと許されるのか！」

ここで、一樹の日本の倫理観が爆発
生贄なんて許せるものではない。

「生贄ってそんな事はしないわよ
実のった野菜や麦だったり、狩りで取れた肉を供えたりするの！
それに、力のある魔獣は人語を使えるから
何か欲しいものがあつたりする場合は、言われたものを供えるは
ずよ。」

それにね、私達だって魔獣すべてを信仰してるわけじゃないわ
害を成す魔獣なら、きちんと退治するんですからね」

「そうか、それは悪かったミミ
俺が変な勘違いをしていたみたいだ」

「いいのよ、わかってくれれば
それに、私達は生贄なんてしないけど
地方なんかじゃ、まだそんなことしてるかもしれないね」

この話題終了という感じで、一樹が話を変える。

「とにかく、この国の人達は何も信仰してないんだな。
お布施とか言って、無理やりお金を払わなくてもいい訳だ」

「それをやって、ワイトウルス神権国の今があるのよ」

神の加護が、しっかりと目に見えるものでもない限り
そんなことをやってたら、崩壊するのは当たり前である。

「そうか、その国はあまりに、力を持ちすぎて
やりすぎて、反発を食らっちゃまったんだな」

「その通りよ、

それより、一樹の村では、何か信仰してるようなものはあったの
？」

「そうだな、何も無いような、何もありっていう感じかな？
俺の村では、神様はやおよろずの神っていうんだ。」

ここで一樹は、日本の新興宗教やキリスト教などは出さず
昔からある、やおよろずの神の事を話した。
新興宗教やキリスト教を説明しても
いい事はないと思ったからだ。

「やおよろずの神？それはどんな神様で
どんな信仰なの？」

「やおよろずっていうのは八百万って意味で
それだけ神様がいるっていう意味なんだ
火の神様、水の神様、雷の神様、山の神様、海の神様
なんていう風にさ、極めつけは厠の神様なんてのもいるんだ。
つまりだ、どんなものでも神様がいるのだから
どんなものでも大切にしないって意味なんだと思うよ。
それが、俺の故郷の信仰かな？」

「それは、とんでもない数の神様ね」

「そう、だからどの神様が偉いだのって事はないんだ」

「でもそれは、とてもいい考えだと思うわ。

どんなものにも神様はいる。

だからこそ、すべてに感謝して生きる。

素晴らしいことだと思うわ」

「でもその感謝が、強要されてはいけない。

だから、宗教的に何かしなきゃいけないとか

こうやって祈りを捧げなきゃいけないとかはないんだ。

宗教とか、信仰とかよりも考え方っていうのかな？」

あまり、やおよろずの神について知らない一樹は

結構適当に説明をしていた。

それでも、ミミは感心していたが

「でも、私はその考え方はとても良いことだと思うわよ」

「そう、まあ俺の村はそんな感じだよ」

「一樹の村って、とても良いところなんでしょうね？」

「まあ、それだけ聞けばいい所に聞こえるけど

悪いところだって、いっぱいあるし、

この街にだって良い所はあるだろう？」

そう、日本にも悪いところは沢山ある。

しかし、この世界に比べれば

水と安全はタダなんて言葉がある国なので

そう思われても仕方ないのかもしれない。

「そんな所あるのかしら？」

「そうかい？俺はもうこの街のいい所を一つ見つけたよ」

「それは、どんな所？」

「この店の料理が美味しい所さ」

「そうね、この店の料理はとても美味しかったわ
確かに、この街のいいところね」

そう言ってミミと一樹は微笑み合った。

「ミミ、ありがとう。」

お蔭で、色々な情報を得ることが出来て助かったよ。
これ、約束のお金と指輪」

そう言って一樹はミミに約束のお金と指輪を渡す。
ミミは少し戸惑いながらそれを受け取った。

「一樹はこれからどうする？」

「そうだな、まだ暫く情報収集でもしてから考えるかな」

「そう、一つお願いがあるんだけどいいかしら
報酬もきちんと払うつもりよ」

「ん？なんだいミミの頼みならできる限り協力するよ」

報酬なんて別にいらないんだが」

「ありがとう、でもそんな訳にはいかないでしょ。

あと、ここじゃ話せる内容じゃないから
人がいない場所で聞いて貰えるかしら」

「分かった、すみません

お会計いいですか？」

そう言って会計を済ませ、店をでる一樹とミミ

この後、ミミのお願いと報酬が一樹の考えていたことの
斜め上だったので驚くことになるのだった。

宗教について（後書き）

1月24日修正しました。

亜人達の生活（前書き）

やばい執筆スピードが落ちてきて
ストックがなくなりそうです

意見、感想をお待ちしてます

亜人達の生活

ミミの後を歩いていると、ミミへの視線が気にかかる。
侮蔑や蔑んだ感じを受ける。

（やっぱり、亜人への差別が強いな）

街の景観の美しさとは反対に
心は荒みでいるように感じられる。

何人は、ミミに対して手のひらを向けて何かやってる。

（あれが、服従の契約なのかな？

あんなに離れていても、契約を行えるものなのか
こりゃ亜人達が逃げられない訳だ）

20分ほど歩いていると、街の中心部からは随分と離れた。

すると前には、城門とは比べ物にならないくらい小さな門が見える。
門の近くには櫓があり、櫓の中からは人がこつちを見ていた。

その門を潜ると、先ほどの綺麗な景観とは違い

正に粗末と言える家が立ち並んでいる。

日本では、バラックと呼ばれそうな家々だ。

そして、先ほどからミミを見る視線が無くなっている。

（ここは、貧民街と呼ばれている場所だな

亜人を差別するのは裕福な平民だけで、

それ以外の平民は、あまり差別意識はないのかもしれないな）

すると、一人の男が驚いた顔をしてミミに声を掛けてきた。

40代くらいの体格のいいおっさんである。

「ミミちゃん捕まったって聞いたけど、無事だったのかい？
よかったよ。」

「ご両親が心配しているから早く家に帰って顔を見せてあげなさい」

「どうやら、この人はミミの知り合いらしい。」

「ミミは亜人であるにも関わらず、街に知り合いがいるようだ。」

（はて、ミミはこの街に知り合いがいるみたいだけど
亜人は隠れて生活してるんじゃないのか？）

そんな疑問を感じながらミミとおっさんを見ていた。

「いえ、私は捕まったけどあの人に助けられたの」

「この人は私の命の恩人よ。」

「だから、みんなも警戒しなくても平気よ」

一樹はミミに言われて気が付いたが、

周りの人達は一樹を、警戒して厳しい視線を向けていたようだ。

「心配しないで一樹、ここの人達はみんないい人よ」

「おじさん、私は家に急ぐからこれで失礼するわね」

「一樹行きましょう」

そう言って、ミミはまた歩き出した。

一樹は、ミミを見失わないように、急いで付いて行った。

今度は、ミミではなく一樹に対して厳しい視線が集まる。

あまり居心地が良くない。

暫くして、一軒の家の前でミミは立ち止まる。

「ここが、私の家なのよ
さあ、中に入って」

そう言ってミミはドアをあけ大きな声で

「お父さん、お母さん、私よ」

そう言って、家の中に入っていった。
中からは

「ミミ、本当にミミなのか
無事でよかった。本当に無事でよかった」

と喜ぶ男性の声と、女性の声が聞こえる。

感動の再開に水を差すわけにはいかない。

そう思った一樹は、外でポツーン一人待っていたのだ。

待っている間も、一樹への視線は収まることはなかった。

更に居心地の悪くなってきた一樹。

10分ほどすると、中からミミが出てきて一樹を呼んだ。

「一樹、中に入ってきてもよかったのに」

「親子の感動の再会に水を差すわけにはいかないだろ」

「気を使ってくれてありがとう

さあ、中に入って」

家の中に入り、居間らしき場所に案内されると

そこには、ミミの両親らしき人が立っていた。

父親は30台後半くらいの、これまた体格のいいおじさんで

母親は20台前半でも、通用しそうな美人だった。

（母親は、ミミを少し大人っぽくした感じだな。

ミミの髪の色は、母親の遺伝かな？）

「娘を救って頂いて、本当にありがとうございました」

そういつて、両親は一樹に頭を下げた。

「どうぞ、お座りになってください」

そういつて椅子を勧められた。

居間には、テーブルとイスがあるだけで

他には装飾品と呼ばれそうなものは何も無く

かなり、質素な感じを受けた。

そして、一樹は疑問に感じていた。

ミミの両親と思われる人には、耳と尻尾が生えてないのだ。

（こりゃ、義理の親かなんかなのかね？

でも、ミミと母親と思われる人とかかなり似てるんだよね〜謎だ）

「一樹、不思議そうな顔してね。

なんで、私の両親なのに耳と尻尾がないんだろうって思ってるで
しょ」

「おう、何でわかった」

「そう、顔に書いてあったわよ」

（いかん、あっさり顔にでるとは

こんなことじゃ、この先商社マンとしてやっていけるのか？)

そう、一樹は一流商社に内定を貰っていたのだ。

この就職難の中、雪江の為にと頑張った一樹だが

その間に彼女を取られてしまつて本末転倒の一樹であつた。

「まあ、普通はそう思うわよね。

私の親に、亜人特有の耳や尻尾がないんですもの
そう思うのは当然だわ。

これから、一樹にその秘密を話そうと思うわ
でもこれは、人には知られてはいけない秘密なのよ」

「分かった、誰にも話さないよ」

「お願いね、それじゃ見てて一樹
見るのが一番分かりやすいと思うから」

そう言うと、ミミは一樹の前でいきなり祈りだした。

「数多の光の精霊達よ、私に力をお貸してください。
その力を持って、私の体の一部をお隠してください」

ミミがそう祈るとミミの体が急に光だしたのだ。

光が収まると、ミミの耳と尻尾が消えてしまったのだ。
さすがに、これには一樹も驚いた。

「一樹、これが私達の秘密よ」

「これは、魔法か？でも魔法って言うのは
物に力を付与する効果しかないんじゃないのか？」

「ええ、人のもつ魔法は
物に名と魔力を与えて、それにより力を引き出す付与魔法
私達亜人の使う魔法は

精霊に魔力を与えて、精霊の力を借りる精霊魔法なの
そうね、一樹の村の考えのやおよろずの神様がわかりやすいと思
うわ

精霊は何処にでもいるし、どんな物にも宿っているの
その精霊の力を借りることで、魔法を使うことができるのよ」

「つまり、俺達の考えだと
神卸みたいなもんかな？」

「神卸？」

「そう、神様を自分の体に卸して、
その力を借り受けることが出来るとされている。
まあ、実際に見たことはないけどね」

実際にあるのかどうか分からないが
アニメや漫画で出てくる神卸の説明をする一樹。

「良く分からないけど、そんな感じだと思っ
わこれが、私達亜人の秘密よ。

人が作り出した、服従の契約から逃れる為に
私達亜人が考え付いた大切な魔法。

この魔法があるから、私達は隠れて生きていけるの」

「つまり、この魔法を使って人として生きているのか」

（だから、ミミはこの街の中で生活できたのか
この感じだと、さっきのおっさんも亜人ってことかな？）

「そうよ、ただこの魔法も自分の魔力が切れたら効果が無くなっちゃうの

そのせいで私は、捕まっちゃったんだけど」

「ミミそれは、どれくらい効果続くんだい？」

「個人差があるわ。

短い人だと3時間くらいで切れてしまう人もいるし、
長い人だと2日間くらい平気な人もいるわ」

かなり、個人差のある魔法のようだ。

まあ、当然といえば当然だが

「ミミはどれくらいなんだ？」

「私は半日くらいで切れちゃうの」

「そうやってどれ位の亜人が隠れているんだ？
さっきミミに話しかけて来たおっさんも亜人なんだろう？」

「この区画にいる人は、全員亜人よ
大体500人ほどいるわ」

「随分な人数が隠れてるんだな」

「ええ、この区画にいる亜人は皆協力し合って生きているの
精霊魔法を長時間使用できる人は、街で仕事に付いてお金を稼い

できてるし

逆に使用時間の短い人は、

この区画からは、でないで炊事や洗濯なんかをしたり、

この区画に人が入ってこないか監視したりしてるわ

この区画の入り口に櫓があつたでしょ。

あそこで、人の出入りを監視してるのよ」

「監視っていうけど

人と亜人の見分けが付くのかい？

精霊魔法を使っていると違いがまったくわからないんだが？」

「私達獣人族は、亜人の中でも特に鼻が利くのよ

人と亜人の違いは臭いで判断できるし

ここにいる人は、みんな顔見知りよ

見覚えの無い人間ならすぐに分かるわ。

そうやって監視をして、人がもしこの区画に入ってきたら

みんなに合図して、精霊魔法を使って姿を変えるの」

「その言い方だと、亜人は獣人族以外にも種族がいるのかい？」

「亜人は、獣人族、鳥人族、竜人族、魚人族に別れているわ

魚人族に関しては、水中で生きるすべがある所為か

あまり、見かけることはないわ。

それに、これは大まかな分け方でしかないの。

獣人族の中でも狼族だったり、山猫族だったりと多種多様なのよ」

「ちなみにミミは山猫族かな？」

「ええ、よくわかったわね？」

（そんなの、ミミの耳見ればすぐわかるつつうの。
あれは猫耳だったからな）

そうミミの耳はまさに、ネコミミと呼ばれるものだった。

「まあ、なんとなくね

そういえば、ミミは街に働きに出たのか？

そうじゃないと捕まった理由がよくわからないんだけど」

「私は街からでて、狩りをしていたの

その途中であいつらに偶然見つかったみたいで

それで捕まってしまったのよ」

「獣人族は臭いに敏感なんじゃなかったけ？

人が近づいてくるのが臭いでわからなかったの？」

「普通ならわかったわよ！

ただその時は、獲物の血の臭いが辺りに充満してたから
気がつかなかったのよ」

「それは、運が悪かったね」

「いいえ、運が悪かったとは思ってないわ

捕まったお陰で一樹に会うことが出来たわ

そして、そのおかげで亜人の未来を切り開くことができそうなん
ですもの」

そう言ってミミ一樹に微笑んでいた。

亜人達の生活（後書き）

1月24日に修正しました。

ミミのお願い

「そこで、一樹にお願いがあるの
一樹の村に、私達亜人を住ませて欲しいのよ」

確かに、本当に一樹の村がこの国に実在すれば連れていけるだろう。
しかし、そんな村はこの世界にはなく
日本へ亜人を連れて行けば、とんでもないことになるのは目に見えていた。

よって、一樹の返答はこうなる。

「やっぱりそうくると思ったよ
だけど、それはできないよ

それだけの人数の亜人が村にきたら色々と問題になるだろうし、
それだけの人数がいつぺんに移住するば、必ず誰かに見つかって
しまう」

（助けてあげていのは、やまやまだけど
流石に、ミミ達を日本に連れて行くわけにはいかないよ）

「そう、やっぱりそうよね
でもいいの、一樹ならそういうだろうと思ったから」

一樹に、断られるのがわかっていたような顔だ。

（俺が断るのがわかってた感じだな。

本題は、間違いなくこれだと思ったんだけどな）

「だったら代わりに、

一樹の村のような隠れ里を

亜人で作れるよう協力して欲しいのよ」

（そうきたか、でもそれは協力できないなあ

そんなの、夏休みが終わるまでに終わる事じゃない

そう一樹は夏休み中なのだ。

夏休み期間であれば、いくらでも協力することは出来る。

しかし、夏休みが終われば大学もあるのだ。

単位も殆ど取り終えて、残るは卒論だけとなっている状態ではあるが。

「ミミ、悪いけどそれも協力できないよ

俺には、あまり時間がないんだ。

一月もすれば、村に帰らないといけないし

それに協力しても、俺にはメリットがないよ

莫大な金と、莫大な時間をかけて協力するだけのメリットが」

（商人として、メリットがない仕事はしない

それなら、断る理由になるはずだ）

そんな事を考えてる一樹を、ミミは不思議そうな顔で見ていた。

「メリットっというのはどんな意味なのかしら

一樹の村の言葉？」

「ああ、利益って意味さ

俺には、これに協力しても

得られる利益がまったく無いってことさ。

それに、俺の村にも利益をもたらさない。

もし、村に利益をもたらすような物なら
村に帰って、協力する為の許可も貰えたかもそれないけど」

「そうね、それもそうだわ

でも、それは報酬の話を聞いてから判断して欲しいわね」

そう言ってミミは笑っている。

どうやら、ミミはそこまで考えて一樹にこの話をしてるようだ。

（こりゃ、一筋縄じゃいきそうにないな）

「まず第一に、村を作れた際には、

村で一樹に、店を持って商売をする権利をあげるわ」

「それはまあ、当然じゃないかな？

むしろ、それ位じゃ割りに合わない」

村を作るための、莫大な金額は一樹が出すことになるだろう
それだけの金をかける割には、あまりにもメリットが低すぎる。

「いいえ、違うわ

一樹以外には、店を持つ権利を持たせないもの
つまり、商売の権利を持つのは一樹のみになるってことよ。

でも、それだと一樹は儲けもすごいだろうけど

負担も大きいでしょうから、その権利の売買権もつけるわよ」

（こりゃ随分な権利をくれるもんだな

商売権が、俺にしかないってことは

実質支配権を持ってるようなもんだぞ）

村で作物なども作るだろうが

すべて自給自足で行える訳ではないだろう。

生活用品、飢饉の為の備え、嗜好品など

村で自給出来ない物すべてが

一樹を通さないと、販売出来なくなるのだ。

その村の支配権を持つてると言っても過言でない。

「随分と気前のいい権利をくれるんだね

俺が暴利を吹っかけるような商人になった場合

それだけで、村が崩壊するよ」

「一樹はそんな事はしないわ

そのあたりは信頼してるのよ

私を助けてくれるような人だもの」

（まあ確かにそんなことしなくても、十分儲けられるけどかなんせ、ライバルがいないんだからな）

一樹が捕らぬ狸の皮算用的な思考中に

ミミは、次の話に移っていた。

「第二に、亜人の付与魔法を優先的に

一樹が使えるようにするわ。

あの時は、説明しなかったけど

亜人の付与魔法は、人の使う付与魔法より強力よ

普段は精霊魔法を使うために、付与魔法を使う事はいないけれど

村ができれば、精霊魔法を使うこともなくなるわ。

一樹の村では、魔法を使うことがないんでしょう？

それなら、付与魔法を使った物を村に持って帰れば

一樹の村にとっても利益になると思わない？」

（やばいな、ミミはかなり頭の回転が早いな
俺の利益、村の利益をしっかりと考えてる）

そう、ミミは一樹に出会ってからの僅かな時間で
これだけの事を考えついていたのだ。

「確かにそうだな、でも魔法がなくても村は今でも豊かだよ。
それに、隠れ里までの輸送も大変だ
見つからないように輸送するのは骨が折れるよ」

「それについても考えてあるわ
報酬の第三でね」

（まだあるのかあ）

「第三に、私達亜人が使役できる魔獣の使用権の譲渡よ」

「魔獣の使役だって？」

「そう、人が亜人を奴隷にしたがる原因でもあるのだけど
亜人は、自分と同じ種族の魔獣を使役することができるの
使役できる魔獣は1匹だけだね。

空を飛ぶ魔獣だったり、馬よりも早く走れる魔獣だったり
は人の生活に無くてはならないものになっているわ。

だから、人は魔獣の使役の利用を求めて

亜人を奴隷にしたがるの」

（確かに空を飛ぶ魔獣を使えば、輸送の苦労なんてない
こんな時代だ、野盗や、魔獣の襲撃で

商品を駄目にした商人は沢山いるだろうし、それを回避する為の護衛代も馬鹿にならない確かに魅力的だな)

「実際に私は300イェンほどだったけど竜人族や鳥人族が、奴隷商に捕まったらその10倍以上の値段が付くでしょうね。

私の使役できる魔獣は、あまり利用価値がないから値段が低かったのよ」

(つまり、ミミは愛玩用として売られてたって訳か綺麗な顔してるもんな)

事実、あの奴隷商人の男も魔獣の使役に関してはアピールせずに見てくれ中々の上玉だの、ミミ自体の価値をアピールしていた。ミミは愛玩用として売られていたのは間違いないだろう。

「第四に、私を一樹にあげるわ」

「ミミ！そうゆうのは、俺は好きじゃないって言わなかったか？」

一樹はミミと会ってから出た事の無いような大きな声で叫んでいた。

奴隷として売られていた事が、可哀想だったので一樹は、ミミを助けたのだ。

ミミが、一樹の奴隷になってしまうのであれば本末転倒だ。

「言っていないと思うわ

それに、誤解しないで一樹

貴方がそういった事を好んでないのは

話をしていてもよくわかるわ。
でもこれに必要なことなのよ。

私のこの計画が成功すれば、私が村を治めることになると思うの」

「それはそうだろう、ミミの計画なんだから」

「私は、亜人の隠れ里としたいと言ったけど
いずれは、亜人と人とが

共存できる村にしたいと思ってるわ。

昔の私ならそんなこと考えもしなかったけど、
きっとこの国にも、一樹のような人はいると思うし

亜人だけですべてをするには、限界があるでしょうしね。

その為にも、村を治める私が一樹と一緒にするのは都合いいのよ。
村長である私が、人との共存を示すわけだからね。

それに、もし一樹に何かあったときにその莫大な利権を
継ぐ人がいないのは怖いわ」

一樹はミミの言っている意味が要約わかったのだ。
いきなり、そんな事を言われても困ってしまう。

「つまりあれか、ミミと結婚しろってことか？」

「ええ、そう思ってくれて構わないわ

一樹もこんなにカワイイ女の子と結婚できるのよ
少しは嬉しそうにしてよ」

「断る！」

「なんでよ、女にここまで言わせて一樹は断るの！」

「そんなものは好きな人とするもんだ！
村の為に結婚するなんて人身御供でもあるまいし」

「ちょっと待ってください」

今まで、ずっと静観していた父親だったが
そう言ってミミの父親が待ったをかけた。

「ミミは、そんな簡単な気持ちで言ったわけではありません。
確かに貴方と結婚すること

こちらに色々と都合がいいのは確かですが

その事だけを考えて

こんな事を言っている訳ではないということを信じて上げてくだ
さい。

取り合えず、第1から第3の報酬について考えて頂けませんか？
貴方にとっても、貴方の村にとっても悪くないと思うのですが。

第4の報酬については、二人はまだ出会って間もないわけですから
時間をかけてじっくりと事を進めればいいのではないのでしょうか
？」

そうやって諭された一樹は、少し考える時間が欲しかった。

実際協力しない訳にはいかないだろうが
取り合えず、今は考えさせて欲しかった。

「わかった、取り合えず第4の報酬については今はなしの方向で
それ以外について、色々と考えさせてもらいたいんだがいいでし
ょうか？

一度村に戻って、許可を得られるかどうか聞いてみないといけま
せんし

ミミも、それでいいね？」

そうミミに向かって告げると、ミミは渋々承諾した。

（はあ、傷心旅行で結婚させられそうになるなんて
それなんてエロゲ？って感じだな

しかも、異世界でシムシティーですか・・・困ったことになった）

ミミのお願い（後書き）

1月24日に修正しました

考える一樹（前書き）

一樹コーヒー大好きですが
作者も大好きです

考える一樹

今日位はここで泊まっていって欲しいと言われたが一樹は、このまま一度村に戻り

許可がもらえるかどうか聞いてくると言って断った。

また、明日にでも訪ねさせてもらいますのでと言って足早にミミの家を出て行った。

そして、街を出て祠に向かう一樹。

その道中に色々と考えていた。

ちなみに、ハルクは仕事が終わったのか

それともたまたま休憩時間だったのか

城門にはいなかった。

（結構不味いことになったなあ

確かに、この世界は魅力的な部分もある。

でも、日本に父さんや母さんを残して、こっちで生活するわけにはいかないし

何より、俺はまだ大学生で卒業くらいしたいしな

何より、この世界では命の価値が低そうだ。

奴隷なんかが、まかり通る世界だからな

あまり、派手に事を進めると

自分の命が、危なくなりそうなんだよな）

だからと言って、このままミミ達を放って置く訳にいかない一樹。

（亜人って、森やどっかで静かに暮らしてるんじゃないのか

小説の亜人とかエルフって、そんな感じだよね普通

街で姿を隠して、生活してるなんで聞いてないよ。

すでに、森かどっかに亜人の集落があるもんだと勝手に思ってた

わ。

だからと言って、ミミ達をこのまま放っておくに訳にはいかない
だろ。

俺が協力しない限り、ミミの目指す村を作ることは不可能だ。

村を作るには、莫大な時間と何より金がかかるし

時間は、数で補うことが出来るが

金は、どうやっても補うことは出来ないからな。

今のミミ達に、それだけの金を用意するのは不可能だ。

あんなところで生活してるんだ。

貯金だってないだろうし

だからって、このまま亜人を放っておいた場合

間違はなく、人との間で争いが起こるな

しかも、俺が原因で争いが起こるなんて考えたくないわ

こんなことになるんだったら

服従の契約の回避方法なんて見つけるんじゃないわ。

しかも、亜人が魔獣の使役まで出来るなんて思わなかった。

ミミは、静かに暮らしていければいいなんて言ってたけど

そうは思わない連中だっているだろうしな。

それに、このまま村が出来なければ

もう人に、服従する必要はなくなったんだから

力で権利をもぎ取ろうとする奴がでてきてもおかしくない

一樹はウーンウーンと唸りながら考えていた。

傍からみると、殆ど危ない人だ。

だが、一樹は真剣なのだ。

（こりゃ自分の生存を第一に、ミミ達に協力していくしかないさそう
だな。

といっても、俺だって貯金がそんなにあるわけじゃないし
残りの貯金も10万ちょっとか

雪へのエンゲージリング代で、50万以上飛んでいったからな。
初任給が、大体手取り18万ってことだったから
3ヶ月分の精一杯見え張って買ったエンゲージリング結局渡せなかったよ。

それに、砂糖も胡椒も高額で売れるが
村一つ作るとなると

どれくらいかかるか検討もつかんし

あまりに砂糖と胡椒を持ってきたと

こっちの世界で値段が、暴落する恐れもあるかな。

暫くは、こっちの世界から日本に輸出出来そうなもの探して、
日本からこっちの世界に輸入できるものを新たに発掘していくしかない。

取り合えず、父さんと母さんに連絡して夏休み中は帰れないって
言って置くしかないか・・・ハア）

なんだかんだと考えながら、無事祠に到着したが
辺りはもう薄暗くなっていた。

薄暗い森は、かなり不気味な雰囲気だ。

森の中からは、獣の遠吠えが聞こえてくるような感じがする。

（そういえば、この森には魔獣の類は生息してないのか？

もし生息してるようだったら

ここの移動についても、少し考えないといけないな

今まで遭遇してないのが、ただのラッキーかもしれないし

今度ミミに、この森について聞いてみるしかないな）

そう考えてから、祠を通り抜け日本に戻り車で街を目指す事にした。

（さすがに、二泊連続で車の中で寝たくはないからな）

町に向かう途中ふと携帯を見てみると、携帯の充電が切れていた。

一樹は、車用携帯充電器を差込み携帯の電源を入れると

そこには、30通を越えるメールの受信数

ほぼ母親からだった。

やばい、この2日間まったく連絡してなかった。

雪のことでもかなり心配かけて、この一人旅も反対されてたからな結構無理やり旅行に来たからな

こりゃ電話しないと不味そうだな

そう思い、母親に電話を掛ける一樹

「あ、もしもし、母さん俺一樹」

「一樹、どれだけ心配かければ気が済むの」

この2日連絡しないで、今何処にいるの？」

母親はかなり怒っているようだ。

火に油を入れるわけにはいけないので、一樹は素直に謝る。

「ごめん、母さん全然連絡できなくて」

「もういいわ、一樹が無事だったんだから」

「今T県にいるよ、」

「T県、一樹はS県に旅行にいったんじゃないの？」

「そうなんだけど、途中で面白い村の伝説があつてさ

ここで、夏休みが終わるまで

その事について調べようかと思ってさ」

さすがに、母親にも本当のことはいえないので
なんとか理由を付けて
この街に、留まろうとする一樹。

「何よ、その面白い伝説って」

「いや、ただの民話みたいなものなんだけどさ
ちよっと変わった話でね

それについて色々調べて卒論にでもしようかなって思ってたさ」

（研究に熱中してて、連絡を忘れてたって事にすれば
この先も、連絡が付かなくても何とかなるだろう。）

一樹は、集中すると一つのことしか目にいかない性格なので
それを、母親は知っている。

その理由を使えば、母親もなんとか納得してくれるだろうと思って
いた。

「そうだったらいいんだけど、連絡くらいはちゃんとしなさいね」

「わかったよ、ところで父さんはかわらない？」

「かわらないわよ

でも、流石に1週間に1度の人工透析は大変みたいね」

「そうか、取り合えず父さんにもよろしく言うておいてよ
じゃあ、また連絡するからね」

そう言っで一樹は携帯を切った。
父親の病状が変わりなく、一安心の一樹

もし、父親に何かあったらミミ達に協力してる場合ではないからだ。

（ハァー夏休みの間は、なんとかあったな

でも、これでこの街の伝説について

調べなきゃいけなくなったな・・・

調べてる時間あるかな？

取りあえず、大友さんの店でコーヒーでも飲ませで貰うか）

そういつて、一樹は車で昨日の喫茶店まで足を運んだ。

車を、店の駐車場に停め中に入る。

相変わらず、駐車所に他の車は停まっていなかった。

「こんばんは、またブレンドコーヒーお願いします」

一樹が、店の中に入ると

大友が、笑顔で出迎えてくれた。

「ああ昨日のお客さんだね

また来てくれたんだね、ありがとう」

「ええ、ちょっと大友さんから教えてもらった

この街の伝説について、興味がでましてね

ちよつと夏休みの間に、調べて俺も卒論にでもしようと思ひましてね」

「そうかい、なら俺の卒論でも見てるか？

まあそのまま君の卒論として、提出しまってもいいんだよ」

「いいんですか、そこまでしてもらっても？

自分の研究の成果なんでしょ？

そんなものを、俺に簡単に渡していいんですか？」

「この街に滞在してる間にこの店にちょこちょこ顔をみせてくれれば俺も嬉しいからね
それに、この街について興味をもってくれたのは嬉しいからね」

「そうですか、ではここに滞在してる間になるべく顔をみせるようにしますよ
俺も、大友さんのコーヒー飲みたいですからね」

「ありがとう、ちょっと卒論については家捜しでもしないと見つけれないと思うから暫く待って時間を貰ってもいいかな？」

「かまいませんよ、まだ夏休みは十分ありますから」

「そう、それはよかったよ」

それから、一樹は大友と色々な話で盛り上がった。
大友のサラリーマン時代の話はこれから就職を控える一樹にとってとても為になる話や
この街が、過疎化で困っている、
村おこしでもしないと本当に不味いなどの深刻な話など
話は尽きなかった。

しかし、そろそろいい時間になり
さすがに、2日連続で車の中で寝るのは、勘弁して欲しい一樹は
この辺りに、宿泊施設がないか聞いてみた。

「そうだ、大友さんこのあたりに
素泊まり民宿みたいところはないですかね？」

できれば、値段も手ごろなところがいいですね。

まあないなら、今日も車の中で寝ればいいだけですけね」

「この先に行くと、道の駅があるからね。

そこには仮眠スペースがあるからそこで寝ればいいよ。

そこなら朝食も取れるし便利だよ」

「ありがとうございます。

それじゃあ、また来ますね

その時は卒論よろしくお願いしますね」

「わかったよー探しておくから」

そう言って会計を済ませ一樹は道の駅に向けて車で走る

（ラッキーこれで、父さんと母さんへ報告も出来る。

夏休み使って全然調べられませんでしたじゃ

さすがに不味かったからな）

そして、一樹は道の駅の仮眠スペースでぐっすりと眠りに付いた。

考える一樹（後書き）

作者は昔自転車で日本中旅していたとき
道の駅で泊まっていました。

感想もらうと執筆が早くなる気がします
感想待ってますねあゝ

1月24日に修正しました。

選人の森の秘密（前書き）

登録数100名突破記念でもう1話余分に乘せました

選人の森の秘密

朝起きた一樹は、道の駅で朝食を食べている。

2日ぶりに食べた味噌汁は、大変美味しいものだった。

この道の駅、地域発展の為に結構地元では力を入れている場所のようだ。

食事場所もあり、温泉もあり、仮眠スペースもある。

一樹は、昨日、一昨日と風呂に入れてないので、

温泉に入りたかったのだが

朝起きると、もう9時を回っていた。

温泉にまで入っているのは、ここを出るのはお昼過ぎになってしまった。そんなわけで、泣く泣く温泉に入るのを諦めたのだった。

飯を食べ終え、あのトンネルまで車を走らせる。

あの不思議なトンネルを通り、異世界へ向かう。

道中はやはり、あの事を考えてしまう。

（はあゝ気が重い。

街に向かって、ミミに会いに行くか。

取り合えずは、出来る限りの協力をして

やばくなったら逃げるかないな。

暫くは情報収集に徹して色々学ばないといけないな）

そう考えを纏め、一樹は街へ移動した。

魔獣に会う事なく1時間ほどで、無事に街についた。

門の前では、ハルクが今日も門番をしていた。

「こんにちは、

今日もお仕事頑張ってくださいね」

「おおー一樹か
そっちも頑張れよ」

そんな軽い挨拶を交わして

一樹は、ミミの家がある貧民街に向かった。

門を潜り抜け、ミミの家に向う最中昨日と同じく視線を感じる。

しかし、警戒する視線というよりも

どちらかというと、尊敬の眼差しといった感じだ。

いったい、この変わりようは何なのだろうと思った一樹だが

ここで、深く考えても仕方ないと考え、ミミの家に急ぐのだった。

ミミの家に到着すると、家の前ではミミが待っていた。

「ミミ、家の前で待っててくれたのかい？」

「違うわよ。」

一樹が、門を通ったって連絡があったから

出迎えようと思って出てきたのよ

さあ、中に入ってお父さんも、お母さんも待ってるわ」

そう言って、一樹を家に招きいれた。

家の中では、ミミの父親と母親がイスに座り待っていた。

「どうも、こんにちは」

「ようこそ、どうぞ座ってください」

ふとミミの両親を見てみると

ミミの父親と母親はお互いに指輪をしていたのだ。

（昨日はしてなかったよな

これはさっそく服従の契約をお互いにしたのかな？)

そうミミの両親は、ミミから話を聞き

お互いに対して契約を行い、相手の契約の指輪を持ち合っていたのだ。

この行為は、自分のすべてを預ける。

そんな意味合いがあり、結婚の誓いとして亜人の中で爆発的に広まっていた。

これが後に亜人の結婚での習慣となる指輪の交換の始まりであった。

「さあ、席にお座りください」

「はい、ありがとうございます。

早速ですが、昨日村のほうに戻り

仮ではありますが、許可を頂きました。

しかし、この街で扱っているものが村の利益にならない場合

この許可は取り消しになりますのでその辺りはご了承ください」

「それで構わないわ

ところで一樹の村はこの街の随分と近くにあるようだけど
一体どのあたりにあるの？」

「秘密だ」

「そう、それはそうよね」

ミミはあまり気にしないといった感じで答えた。

ミミとしては、一樹の村が何処にあらうと一樹に協力して貰えれば
それでいいようだ。

「ところで、ミミにちょっと聞きたいんだがこの街の近くに森があるだろ

あそこは、魔獣の類は生息してないのか？」

「えっとそれは、もしかして選人の森の事かしら？」

「選人の森？その森かはわからないけど街の城門を出て左手に見える森だよ」

「選人の森で間違いないみたいね
もしかして、一樹の村は選人の森を抜けたところのあるの？
だったら誰にも気が付かないのも頷けるわ」

「村の場所は詮索しないこと！
それより、あの森を抜けるのが大変ってどういうことなんだ？」

（もしかして、今まで魔獣の類に会わなかったのは
唯のラッキーってことか？）

「選人の森は、その名の通り人を選ぶ森なの
選ばれた者以外に、森を抜けることが出来ないとされているのよ。
まあ、誰でも森に入ることは出来るし

私達も選人の森で狩りをしたりしてるんだけど
どうゆう訳だか、森の奥へ進んでも、いつの間にか森の入り口に
戻されるのよ

狩りをするには、丁度いいからよく利用してるけどね。
それと、あの森には魔獣はかなりの数が生息しているわよ。
森に入れば、すぐにでも見つける事が出来るくらいにね」

ミミの話を聞いて、少し冷や汗をかく一樹
ミミの話によれば、魔獣に会わなかったのはただのラッキーだった
ようだ。

そんな一樹を見てミミが問いかける。

「一樹は今まで魔獣に会った事がないのよね？」

「ああ、村では見たこと無いな」

「一樹、貴方はあの森を通り抜けてこの街にやって来たのね。

それなら、一樹の村が見つからないのもわかるわ。

つまり、一樹はあの森に選ばれた者って所かしら

まあ、一樹の村の人全員が選ばれてると考えると

森に選ばれた者を、魔獣は危害を加えないと考えるべきかしらね」

「確かに、俺の村はあの森を抜けたところにある

これは、秘密にしてくれ

これが、もし漏れた場合には俺はミミに協力できなくなるかな」

「分かってるわよ。

一樹の村については秘密にするし、

これ以上詮索もしないわ。

一樹の村が何処にあるのが分かってても関係ないし

それに、一樹の協力が得られなくなるくらいなら

そんなもの詮索したくもないわ。

お父さんもお母さんも分かってるわよね？」

ミミの父親と母親は深く頷いた。

「ただそうすると、私の計画も少し考えないといけないわね。

一樹の村のように、森の加護を使えるわけじゃないのだから隠れて村を作るといのは、無理そうね。

こうなったら、亜人が独立できる手段を考えなくちゃいけないさそうね」

ミミの少し物騒な発言に、少し引き気味の一樹

そんな事になるなら、協力はしないと言い出そうと思ったときミミから話しかけられた。

「ところで一樹は、この街のどんな物を村へもって行こうと思っているの？」

私は付与魔法を使ったものがないと思うんだけど

一樹の村の、利益になりそうなものなんて

それ以外中々考え付かないわ」

「そうかな？」

「そうよ、その服を見ても分かるわ。

とても高級な生地を使ってそうだし、編目だって均一だしそれだけを見ても、一樹の村がどれだけ豊か分かるわよ」

「ミミは良く観察しているな。

俺も見習わないといけないかな？

ところで、付与魔法を掛けたものっていったいどんなものがあるんだ？」

「やっぱり、一番は武器や防具よね」

「この国の武器や防具はなんで出来てるんだ？」

「大体青銅ね、王宮の騎士なんかになったりすると鉄を使ったりしてるわね」

（日本に持っていってもまず必要のないものだな。

そもそもこんな時代の鉄じゃ純度だってたいした事なさそうだしそれなら、日本から鉄を持って来て付与魔法を掛けてもらったほうがいい

だが、鉄じゃ運搬に難があるな）

一樹は少し考えてミミに答えた。

「俺の村では武器や防具や農具といったものまで鉄製品を使っているんだ。

今更付与魔法を掛けたくらいのもので村が更に豊かになるとは思えない」

「でも、魔獣の皮や骨を使った武器や防具もあるわよ」

（これも却下だな日本で武器や防具は必要ない）

「そもそも、俺の村ではあまり武器や防具は必要ない武器や防具は却下だ

さつきも言ったが、魔獣の類が襲ってくることもないからな」

「あとは、服や家なんかにも付与魔法をかけたたりするわ」

「それも却下、服はこっちで使って生地の方が高価だと自分でいっただろう

それに、家なんてどうやって運ぶんだ」

「一樹が付与魔法を掛けたものって
いったいどんなものがあるって言うから
多い順言ってるだけよ

私だって、一樹の村に服を持っていけるだなんて思っ
てないわよ」

ミミは次々と付与魔法が掛けられるものをあげていくが
日本へ持っていきそうなのはなかった。

（この世界では基本的にすべて、生活用品にいたるまで
付与魔法が掛けられるんだな

まあ掛けるだけで効果があがったり、長持ちしたりするわけだから
当然と言えば当然だな。

でもさっきからミミが言ってる物を日本に持っていっても
まったく必要ないものばかりだな）

「悪いんだけど街の中へ行かないか？

街の中心部でどんなものが売られているのか見てみたいんだ。

それに、もう昼食の時間も過ぎてるしな

昨日の店に行って、食事をしてその後一緒に街を見て回らないか
？」

「そうね、そのほうがいいかもしれないわね

じゃあ、私ちよつと街へ出る用意をしてくるから

少し待ってて貰えるかしら」

そう言ってミミは部屋をでていった。

「一樹さんどうなんでしょうか？

やはり難しいですか」

そうミミの父親は話かけて来た。

ここでいい物を見つけ出さないと

一樹の協力を得ることは出来ないのです、結構必死ばい表情だ。

「そうですね、結局利用できそうなものは

私が、鉄自体を持ってきて

こちらで付与の魔法を掛けてもらうくらいですかね？

ですが、そうなると運ぶのが辛くなってくるんですよ。

私以外は、あの森を抜けることは出来ないでしょうから
貴方達の使役する魔獣を使っても

森からは、私だけで運ばなくていけなくなりますからね。

私は、昔足に怪我を負ってしまい

あまり、重量があるものは運ぶことが出来ないんですよ」

そう一樹の足では、あまり重量のあるものを運ぶことは出来ない。

実際、森から祠まで軽トラックでも使えば簡単に輸送出来そうなもの
んだが

「そうですか、足に怪我を・・・

おおそれでしたら、治癒魔法を試みませんか？

こちらではケガや病気に対して魔力を注ぐことにより
多少の治癒効果があるんです。

それを私達は治癒魔法と呼んでいるんです。

それで完治しない場合には

竜人族が作る薬を試して頂きたい。

こちらでは、通常少々のケガや病気でしたら

魔力を込めてれば直ってしまうのですが、

それでも直らないようなやっかいなケガや病気を治すのに
薬を使うんですよ。

この国の薬は、魔法を付与してますから

とても、効果があるんですよ。

それに、竜人族の薬は

街で売っている薬よりも、とても効果が高いんですよ。

竜人族の薬は、すぐに調達させますので

一樹さんは、取り合えずミミと街を見てきてください」

それを聞いた一樹は、自分の膝と父親の病気が治るかもしれないと少しだけ、異世界の魔法に期待を掛けた。

選人の森の秘密（後書き）

これが日本に持ち込むチートです
予想できた方いますか？

金や宝石だとあまりにも捻りが無いんで
作者的には無い知恵を搾り出して考えたんですが

1月24日に修正しました。

塩の価格（前書き）

だんだん物語が勝手にストーリーを作り出してしまおう
作者の力量不足を痛感します

塩の価格

（もしかすると、この足が治るかもしれない
もう一度、思いっきりサッカーが出来るかもしれない
父さんの病気を治すことが出来るかもしれない）

そんな期待が胸を膨らませていると

一樹は、初めて異世界に来てよかったと思った瞬間であった。
そうやって一樹が、期待に胸を膨らませていると

ミミが、部屋に戻ってきた。

「ごめんな一樹、待たせちゃって

どうしたの、何かすごくいい事があったって顔してるけど？」

そう、一樹にとってとても良いことがあったのだ。

ミミの観察眼には驚かされるばかりだ。

まあ、単に一樹が顔に出やすいだけかもしれないが

「本当にミミは観察眼は本当にすごいな。

ああ、どうなるかはわからないけど

いい事があったんだよ」

「父さん何か話したの？」

ミミはそう父に問いかけた。

父親はさっき、一樹に話した事をミミにも聞かせた。

「ああ、一樹さんは昔に膝を怪我したらしいのだ。

なので、われわれの治癒魔法と竜人族の薬について

話してみただよ」

「そうなの一樹は膝が悪かったのね。
でも、治癒魔法でそこまで酷い怪我でなければよくなるし、
薬を使えばほとんどの怪我はよくなるわよ」

「そうか、まあかなりの大怪我だったからあんまり期待していないよ。」

膝の十字靱帯が切れてしまったね
元通りにはなったんだけど、後遺症が残ってしまっ
てね
膝に過度の負担がかかると、痛み出してしまっ
たんだ」

一樹は、サッカーの大会で膝を壊している。

今では、気持ちの整理も付いているが

当時は、酷く嘆いた。

夢だったプロへの道が、閉ざされてしまったのだから仕方の無いこ
とだ。

膝を壊した原因も、今はもう恨んではない。

いや、当時から原因については恨んですらいなかった。

あれは、仕方の無いことだと割り切っていたのだ。

しかし、そんな一樹でも草サッカーでもいいから

もう一度思いつきサッカーがしたいとは思っていたのだ。

なので、期待していないとは言っているものの

実は、かなり期待しているようだ。

「そうなの、どんな怪我かよくわからないけど

一樹の村で直らないような怪我なのね。

でも、一樹の村の治療より、竜人族の治療魔法と薬のほうが
効果があると思うわよ」

「そんなにすごいのかい？」

「ええ、竜人族は亜人の中でもとても魔力が高い種族なの
治癒魔法では、切断された腕や脚なんかを元に戻すことも可能だ
し、

薬はそれこそ死んでなければすべてを癒すなんて言われてるくら
いよ」

一樹は驚いて叫んだ。

もしそれが本当なら、どんな怪我や病気も直すことが出来そうだ。

「そこまでの効果があるのか！

それだけの効果のある薬なら、村へ持って行けるよ」

そう、それだけの効果のある薬ならば

日本でも売ることにも可能だと、一樹は考えたのだ。

何より、父親のように慢性の疾患を抱えた人達の助けになるはずだ。
しかし、ミミとミミの父親は少し困った顔をしていた。

「それはちょっと難しいかもしれないわ」

そう言ってミミはその訳を話してくれた。

「竜人族の薬はあまり大量には作ることができないの
普通の薬と違って、材料に特殊なものを使うから」

「特殊なものなのかい。

希少な薬草でも使うの？

だったらその採取や栽培の為に俺がお金を出しても構わないよ」

それだけの薬ならいくらお金を出してでも構わない。
一樹はそう思っていた。

それだけの価値があるものだし、それによって救われる人が多いからだ。

「いいえ、違うわ

材料はこの国の薬と、ほとんど変わらないの
ただ、決定的に違うのは

竜人族の血を使うのよ

だから、あまり多く作ることは出来ないの

それに、竜人族はあまり数の多い種族じゃないし」

一樹はその事を聞いて小さくないショックを受けていた。

これなら日本への持って行っても確実に売れる。

なにより、父親を傍で見えていたこともあり

苦しんでいる人達を救うことが出来ると思っていたからだ。

「でも一樹、普通の魔力を付与した薬だって

なかなか効果があるものなのよ

もちろんかなり高価な物になってしまいうけど

一樹なら簡単に買えるわ

だから、その薬を確かめてもらえないかしら」

「わかった。

こっちの薬を試してみるよ・

それに、竜人族の薬だって大量に作ることが出来ないだけで
少しなら作ることとは可能なんだろう

少量でいいから取引させて貰えないだろうか？」

「ええ、竜人族が許す限りの量でいいなら大丈夫だと思うわ

その辺りは父に交渉させておくわ、
お父さん竜人族に治療と薬の交渉をお願いね
私達は街の見物も兼ねて薬を買ってくるわ
それに、薬以外にも何かあるかもしれないしね
さあ、一樹行きましょう♪」

そう言って腕を取って一樹を連れ出すミミ
服装も随分とお洒落をしているようだ。

しかし、精霊魔法を使って尻尾や耳を隠していないようだ。

「ミミ、尻尾とミミを隠さなくていいのか？」

「もう隠してもしょうがないし

それに、私の顔を知ってるあの商人にもし会ったら

厄介だから、隠す必要はないわ」

「確かにその通りだな」

「それより、早くご飯にしましょう

私、お腹すいちゃったの」

そう言ってミミと一樹は急いであの飯屋に向かったのだ。

相変わず、ミミへの視線は厳しいようだが

当の本人は、まったく気にした様子は無いようだ。

昨日の店に入り、今日のお勧めをまた注文した。

今日も昼の時間が過ぎているのか、客はポツポツとしか入っていないな
かった。

暫くすると、定食が運ばれてきた。

今日のお勧めは、昨日とは違い焼き魚定食のようなものだった。

「ミミ、この魚はすぐ近くの川で取れたのもの？」

「そうよ、この街には近く川があり、そこで取れた魚はこうやって塩焼きにするとすごく美味しいのよ」

そういつて美味しそうに焼き魚を食べるミミ
ネコ科なので、魚は好物なのだろうか？

一樹は、ふと疑問に思ったことを聞いてみた。

「ミミ、この国では塩は高価なものじゃないのか？」

そうここか中世ヨーロッパ並みだとすると
塩も高価なはずだ。

しかし、昨日の焼肉定食にも塩は使われていたし
この焼き魚には、塩がふんだんに使われている。
高価だとしたら、こんな店で使えるものではない。

「一樹の村じゃ高価なものなの？」

「いや、そうじゃないけど」

「この国で塩が高価だったのは大分昔のことよ
闇塩といわれるものができてからは
大分値段が下がって、無理なく私達でも買えるようになったのよ」

（なんだその闇塩って、真っ黒な塩ってことかな
ちよっとみたくないな）

「ごめん、その闇塩って何なのかな？」

「闇塩はね、元々塩の販売は国の管轄で行っていたのよ。昔は岩塩の産出量、とても少なかった所為で塩の買占めなどを禁止する目的だったそうよ。そこに、安い値段で海水塩を販売する商人が現れたの。露天市や闇市なんかで、大量に安く売られていたので闇塩って名前がついたそうよ」

（真っ黒な塩じゃなくて、

闇市で売られていたから闇塩か。

納得のいく名前だな。

確かに、塩の産出量が少ないのに

塩の買占めなんて行ったら、国が滅ぶからな）

「そうか、つまり塩では商売にならんという訳か

まあ、豊富に塩があるって言うのはいい事だよ。

塩がないと生き物は生きていけないからね」

そう、塩がないと生物は生きていけない。

戦国時代、武田信玄が今川氏真によって塩止めを受けた。

つまり戦略になるぐらい大事ということだ。

その後、上杉謙信が武田信玄に塩を送った事で

敵に塩を送るって言葉が出来たと言われている。

「そうね、まあ闇塩なんて名前が付いてるけど

産地のほうでは、入り浜塩なんて名前らしいわよ

作り方にちなんで、そう呼んでるらしいの」

それを聞き一樹は、フォークを落として驚いた。

それはきつと、入り浜式塩田でそれは日本から持ち込まれた技術だからだ。

きつと神隠しにあった人が、この方法を広めたのだろう。

塩の価格（後書き）

誤字脱字報告

感想をお待ちします

1月24日に修正しました。

異世界の薬（前書き）

この物語で一樹はまったく強くありません
ですが、周りが強いです

そして、一樹は賢いので基本的に騙されたりしません。

一樹の基準はちょっとオタ入った大学生だと思っていたただければ
よろしいかと思えます。

異世界の葉

一樹のあまりの驚きように
ミミは一樹を心配していた。

「どうしたのよ一樹、そんなに驚くことがあったの？」

「いや、ちょっとね

この国には、そんな製塩方法があるなんてびっくりしたよ」

ハハハと苦笑いを浮かべ誤魔化そうとする一樹。

その人物が、どんな人生を送ってきたのか知らないので

日本人が、入り浜式塩田を広めたと知られるわけにはいかない一樹

「一樹の村では、そうゆう塩作りしてないの？」

だったら、この国は塩では一樹の村より勝ってるのかしら？」

「まあどうかかわらないけど

お互い塩が、安定供給されてるってところは同じだから

勝ってる、負けてるってのは比べる必要はないんじゃないのかな
？」

（日本で入り浜式塩田なんてもうないよ

膜濃縮せんごう法だっけかな？

今は工場で塩作ってるんだよね

でも、入り浜式で作った塩のほうが美味しいんだよね）

そう、膜濃縮せんごう法で作られる塩は

塩化ナトリウム含有率99%以上なのに対して

入り浜式塩田で作られる塩は

塩化ナトリウム以外にも、カリウム、カルシウム
マグネシウム、鉄など入っていて体にも良く美味しいのだ。

（逆にこっちの塩を輸入するのもありかもしれない）

そんなことを、考えていた一樹だが

これ以上話していると、ボロがでると思い

一樹は、薬のことに対して話題を振った。

「ところでミミ、この街で例の薬を買うには

何処で買ったらいんだい？」

「そうね、薬だと薬師の店から直接買うしかないわね。

大丈夫よ、場所はわかるから」

（この街には医者という存在がないのかな？

まあ、魔法で大抵の事はどうにかなるようだから
医者がいなくても、不思議じゃないな）

そう結論づける一樹。

「そうか、これ食べたら行こうか。

案内頼んだよ」

「そうねわかったわ」

そう言って焼き魚定食を美味しそうに食べる二人だった。

食事の料金を払い、店を出た二人は

そのまま、ミミの案内を受け薬師の店へと足を運ぼうとした。

しかし、一樹はあることに気づき、ミミに尋ねた。

「ミミ、薬代っていったいどれくらいなんだい？」

「そうね、物によりけりだけど

5イエンから30イエンくらいじゃないかしら」

「結構するんだな。

何個か試しに買ってみるつもりだから、ちょっと足りないかもしれないな。

「ミミ、商業ギルドってこの辺りにあるのかい？」

そう、一樹の持ち金は残り30イエンほど

どれだけ薬があるかわからないが

高額なものが、1つ30イエンでは今の持ち金では足りない。

そこで、今持っている手形を現金に変えようと思ったのだ。

「商業ギルドね。

大丈夫よすぐそこにあるわ」

「そうか、ならこの手形を現金に変えたいんで

先に、商業ギルドの案内と現金への交換を頼めるかな？」

「わかったわ、行きましょう」

そう言って、二人は先に商業ギルドへと向かった。

商業ギルドは、かなり立派な建物だった。

中は、かなりの人でごった返しになっていたが

そして、現金への交換方法だが

受付でギルド手形を渡すだけだった。

5分ほど待っていると、受付で現金を受け取った。
後でミミに聞いた話だと

手形を現金に変えるのも、現金を手形に変えるのもそう難しいことではないらしい。

早い話が、商業ギルドに加入して一定の金額を納めれば誰でも簡単に扱えるものらしい。

ここでは、一定額以上の物を買うには手形で決済するのが普通らしい。

なので、手形そのものを渡しても買い物は出来るようだ。それなら、先にそう言ってくれと思う一樹だった。

（商業ギルドはいわば銀行のようなものだな
この手形は小切手のようなものかな）

100イエンを受け取った一樹は、そのままミミと薬師の店へ向かった。

その様子を、じっと見つめる男がいたことに

一樹は、気づくことはなかった。

商業ギルドを出て、10分ほど歩くと薬師の店に着いた。

商業ギルドほどではないが、なかなか立派な建物だ。

中に入ると、店員が出迎え

店員はミミを見て、あからさまに嫌そうな態度を取っていたが一樹が、金の入った袋を見せると、コロっと態度を変えた。

「すまないけど、薬の説明してくれないか？

どんな治療に使うものなのか。

どんな効果と副作用があるのか。

しっかりと説明を頼む」

店員は、一樹に説明をしだした。

一樹の金目当てだったとしても、その説明は丁寧にされていたと思われる。

基本的に、この世界の薬は体力の回復や体調を整える薬らしい。また、傷の直りを早くするそうだ。

どうやら、自己治癒能力を高める効果もありそうだ。

値段が高ければ高いほど、効力もあがるらしい。

また、治癒魔法の効果をあげる効果があり

治癒魔法では、どうにもならない場合に使用するそうだ。

特に副作用などは無く、安全な物らしい。

ただし、一日に何本も飲んでも意味がないそうなので
1日1本を目安に飲むらしい。

だからと言って、切断された腕に薬を塗れば腕がくっつくというよう
うな

脅威の回復力を持たせるようなものではないそうだ。

（日本版のユ○ケルみたいなのなのかな

効果時間は12時間〜24時間程度かな？

これはちょっと期待はずれだったかもしれないな

今の自分が、飲んでもあまり意味がなさそうだし

父さんに飲ませてみて、どれくらい効果があるのか実験するしかないな

出来れば、他に実験できればいいんだけどな

まあ、副作用はないっていうし問題はないと思うが）

ちょっと父親の扱いが、酷い一樹であった。

一樹は店で、一番安い薬から順に一番高価な薬まですべて一つずつ
購入し

全部で合計で88イエン36セエンになった。

これは平民の月収の約4ヶ月分の金額になる。

それを、ポンと払い一樹は薬を持って店を出た。

それを、ホクホク顔の店員が見送っていた。

「うーん、ちょっと期待はずれかな
いまいち効果が、分かりづらい薬ばかりだった」

そう一樹はミミに語りかけた。

「そうかしら、逆に聞きたいのだけど
一樹の村の薬だと、どういった効果があるの？」

「そうだな、色々な効果があるんだけど
腹痛が治る薬だったり、頭痛が治る薬といった具合に
効果が限定的なんだよね

だからこそ分かりやすいってのもあるけどね。
こっちみたいに、体力が回復します。

体調が良くなります。傷の直りが早くなりますって感じだと
確かに万能なんだけど、どの程度体力が回復するのか
どれ位傷の直りが早くなるのか、よくわからないよね。

安いものと、高いものの効果の違いが

どれだけあるのかすも、よくわからないし何とも言えないよ。

それに、人の魔力を使って薬が効果を発揮してる可能性もあるわけだし

俺や村のみんなに、魔力が在るのかさえわからないからね
実際一度村に持ち帰って、効果を確かめないといけない訳だし
ちょっと困るな」

「一樹また村に帰るの？」

「そうだね。

俺一人じゃ効果を確かめることもできないし

何より今の俺は、体力回復も体調を整える必要もないわけだしね」

「そうね、それじゃあ仕方ないわね
でも、一樹村へ帰る際は気をつけてね
さつきから誰かつけて来てるわ」

「つけてきてる？」

ミミの言葉に、少し顔を強ばらせる一樹。

「そう、私を狙ってるって感じじゃないわね。
多分狙われてるのは一樹よ
なるべく、一人にならないほうがいいと思うわ」

「分かった。」

きっと俺の金目当てだろうな
商業ギルドで渡された金額を見たのか
それとも、広場のやり取りをみていたのかは知らないけど
襲って金を奪うつもりだろう」

「きっとそうね、
どうするの一樹、一樹に荒事には向いてなさそうだし
それに、逃げるにしてもその膝じゃ無理でしょ」

そう、戦うことは勿論のこと
一樹の膝では、逃げることにすら厳しいのである。
そんな事は、分かりきっている一樹はミミにこう言った。

「それよりも、この国では正当防衛は認められるものなのか？」

「正当防衛？」

「早い話が、襲われたのでやり返しましたって事」

「街の中で、争いが起った場合

基本的には、両方罪を問われるわ。

相手が、貴族や亜人なんかだとそれも違ってくるのだけれど」

「街の中ってことは、街の外だと違うのか？」

「そもそも街の外は、法の適用外となるの

街の外で起こったことに対しては自分の責任とされるのよ

だから、街の外で襲われたら護衛をつけずに外へでたのが悪いって事ね」

（つまり、街の外は無法地帯ってことか

そもそも、街の外で何が起っても証拠なんてないだろうし

それも、仕方の無いことだな）

「つまりあいつらは、街の中では襲ってこない？」

「いいえ、街の中でも一樹一人で出歩いていたら襲ってくるわよ

人通りの無い場所なら、街の中でも関係ないもの

でも、私が一緒にいる限り大丈夫よ

相手も、亜人が護衛してるのに襲ってくるほど馬鹿じゃないでしょ」

「ミミはそんなに強いのか！」

「亜人を相手にするは、王宮の騎士でもない限り無理よ

ちょっと腕に覚えのある程度の人間なら、まず負けないわ」

「亜人なら、大抵の奴には負けないってことかい？」

「負けないわね」

「なら、そうゆう馬鹿な事を考える奴には痛い目にあってもらうか」

そう言っで一樹はある作戦を考えていた。

ついでに、ミミとハルクは

どっちが強いんだろうなんてことも考えていた一樹であった。

異世界の薬（後書き）

1月24日修正しました。

ある男の末路

「一樹、痛い目の合わせるってどうするの？
何か、作戦があるのかしら」

「何簡単だよ、俺が一人で街の外に出れば
あいつらが、襲ってくるだろ
そこを返り討ちにするだけさ」

そう、一樹の立てた作戦は簡単である。
一樹を囚にして、敵を釣り
一気に殲滅するだけだ。

「返り討ちって一樹に出来るの？
相手もそんなに弱くはないわよ」

「そこは、亜人の皆様に協力してもらうのさ
気づかれないように付いてきてくれ
もちろん報酬は払うよ」

「そうゆうこと、罠に嵌めるわけね」

「そう、街の外なら罪に問われる心配もないし
ほどほどに痛めつけてやってくれ」

「わかったわ。
こっちで、その条件に合いそうな人を集めておくわ
それと、その作戦には私も参加するわよ」

「ミミが参加してくれるならこっちはありがたいよ。

それと、出来れば今日にも村へ戻りたいんだ。

早いとこ薬の効果も確認したいしね。

だから、今日の夕方までに頼むよ。

まあ、無理ならしょうがないから

悪いけど今夜は、ミミの家に泊まらせてもらおうと思ってるけど」

「そう、なら一樹に泊まってもらえるように

あまり頑張らずに、条件に合いそうな人を集めようかしら」

そんな軽口を言いながら、一樹はミミと家に戻っていった。

途中ミミは、この区画に人が入り込むかもしれないと

注意しながら歩いていた。

家に戻り、さっきの男たちがこの区画に入り込んでいるのか

ミミに確認してみると。

「ミミ、さっきの奴らはここまでつけて来たのかわかるかい？」

「ええ、どうやらつけて来たみたいね

このままだと夜襲をかけてきそうな勢いね」

「それにしても、よくそんなことがすぐにわかるね」

「さっき、ドラが鳴ったでしょ

あれが、この区画に人が張り込んだ証なの」

そう、さっき大きなドラの音が2回聞こえたのだ。

どうやら、それが合図だったようだ。

（そういえば、俺が昼前に来たときは、ドラは4回鳴ってたな

ドラの鳴る回数で、色々と取り決めがあるようだな」

「そうか、なら早いとこ集めて貰えるかな？」

夜襲まで掛けられるわけにはいかないからね

報酬は一月50イエンってとこでいいかな？」

これは平民の約2ヶ月半分の月収だ

「月収ってことは、今回だけじゃないの？」

それに報酬が多すぎないかしら」

「これからもこういった事は起こるだろうからね

それに、すぐに優秀で信頼のおける護衛を雇うのは難しいからね」

そう、これからも一樹が狙われることもあるだろう

何しろ、あの広場にいた人間ならば

一樹が、大金を持っている事を知っているのだ。

ならば、一樹は早急にも信頼できる護衛を雇う必要がある。

自分の命の代金といえは出し惜しみはしてられない。

「わかったわ。」

その金額で護衛を引き受けてくれる人を集めてもらうわ。

父さん竜人族との交渉は終わったの？」

「ああ、ただ少し時間がかかるらしい。

3日ほど時間をくれと言われたよ」

「そう、それは仕方ないわね」

そう言うと、ミミは軽く父親に事情を説明して

一樹の護衛が出来る亜人を探してきてもらおうよう頼んだ。

「それじゃあ、父さんは狼族と山猫族の中でさっきの報酬で護衛を引き受けてくれる人を探してきて貰えないかしら

父さんの頼みなら、無下に断る人はいないでしょ」

「そうだな、そういったことなら私が行ったほうがいいだろうでは、急いで行ってくるよ」

そう言ってミミの父親は家を出て行った。

一樹はふと疑問に思ったのでミミに聞いてみた。

「なんでミミの父さんなら無下には断られないんだ？」

「お父さんはあれでも、山猫族の族長なのよ
といっても、今は形だけという感じだけどね」

（まあこんな生活をしてたらそうもなるわな
こんな状態じゃ、族長なんて意味がないようなもんだしな
族長Ⅱ稼ぎ頭なんて感じなのだろうか？
もしくは、魔力の高いものが族長にでもなるのかな？）

そんな事を考えているうちに
ミミの父親は戻ってきた。

以外に早い戻りに、一樹は驚いたが
父親の顔からすると、どうやらうまく護衛の件は話が纏まったようだ。

「大変でしたよ

声を掛けたら、私が私がとひっきりなしでしたからね。

その中で、荒事に強い者を4人集めました。

これで、ミミを合わせて5人で一樹さんを護衛します」

自分は人間なのに、何故そんなにも護衛をしたがるのか

一樹は疑問だった。

確かに、報酬は高額だろう。

しかし、それは命の危険のある護衛なら

これくらいの報酬は当然だと思っているし

何より、亜人を虐げていた人間を率先して守ろうとは思わないはずだ。

不思議に思った一樹は、父親にその訳を聞いてみた。

「どうしてそんなに志願者が多かったんですか？

確かに、報酬はいいと思いますが

私は人間です。

亜人達にとっては、抵抗があると思うんですが？」

「いや、簡単ですよ。

まずは、報酬が破格です。

一樹さんには、分からないと思いますが

それだけの金額が貰える仕事に就いている亜人はいません。

それほど、亜人が人に紛れて仕事をするのは大変な事なんですよ。

そして何より、服従の契約の回避方法を見つけた一樹さんの護衛ですからね。

無報酬でも、やりたいと志願するものだっていますよ。

一樹さんは私達亜人にとって大切な恩人なんです」

「そうですか、それはありがたいですね。

ところで、お二人は契約の回避を行っているようですが他のみんなは契約の回避は行ったんですか？」

そう、ミミの両親はさっそく試したようだが

この区画に住む亜人達はどうなっているのだろうと気になっていた一樹だが

すぐにその答えは返ってきた。

「昨日話を聞いた次点で、用でこの街を出ている者を除いて全員が契約の回避を行っていますよ。」

指輪や首飾りといったものを用意できていない者は

その辺りの石ころだったりに封印してあるので

時をみて、何か封印するに相応しいものにしようと思っています」

（石ころに封印って可哀想だろそりゃ・・・）

確かに、回避を優先させるべきだとは思うけど

そりゃないだろうって感じだよ）

「それは、きちんとした物を用意したほうがいいと思いますよ。さすがに石ころじゃ可哀想ですからね」

「そうですね、

ですが、いつ人にばれるとも限らないことなので

急ぎで行ったことですから、仕方ないですよ

封印するものを選んでいる間に、人に捕まってしまったら意味がないですからね」

確かにそうだが、やっぱり石ころは酷いと思う一樹であった。せめて、身につけられるものにすべきなのではと思ったのだ。

「それより一樹、そろそろ日が沈むわ
門までは私が見送るから

そこから森へ向かって、私達は気づかれないうちに後を付けるわ」

「了解

やつらが襲ってきたら、出来る限り俺は逃げるから
うまく、相手を捕らえてくれ

他の護衛方の準備は大丈夫ですか？」

一樹はミミの父親に尋ねると

「ええ、大丈夫です

しっかりと護衛するように、言い含めてきました。

一樹さんにもしもの事が合った場合

ここから追放するという約束も交わしてありますので」

（それは、有難いがやりすぎじゃないか？）

そんな事を考えながら、一樹とミミは家を後にした。
家を出ると、確かに日が沈みだしていた。

「ミミどうだい？」

俺達をまだ付けて来ているかい」

「ええ」

（随分しつこいな、まあそのしつこさが逆に仇になるんだけどな）

ミミとは街の門で別れ、一樹は一人森を目指した。

城門にハルクの姿はがなかったので少し残念だった。

ゆっくりと、薄暗い道を歩いていると不意に声を掛けられた。

「旦那あゝこんなところを一人で歩くのは無用心ですぜえ」

声を掛けてきたのは、ミミを捕らえた奴隷商の男だった。

また、その男の後ろには2人は、一樹の見知らぬ男達もいた。

「何か用かな？」

これから、急ぎで向かわなければ行けない場所があるのでね
用件なら手短に頼むよ」

「いいえ、例のお売りしたメスの亜人は元気ですかあ？」

「ああ、大変元気にしてるよ。」

いい買い物をしたと思っているよ」

「そうですかあ、そいつはよかったですねえ

まあこっちとしては、随分安く売ってしまったと後悔していた所
だったですよ」

「何が言いたいんだお前は」

「いえ、あのメスの亜人は4000イエーンじゃ安すぎたと思ってましてね
旦那には追加料金として3000イエーン支払って頂きたいと思い
ましてね」

「一度売買が成立したものに、

この国では追加料金を支払うなんてことがあるのか？

馬鹿な話があるか

悪いがそんな金を支払う気はない」

「まあこちらとしては、穏便に支払って頂ければよかったですね
こうなっては仕方ありませんね
腕ずくで支払ってもらうしかありませんねえ、旦那あ！」

そう言って男達は剣を抜き、一樹に向かって来た。

一樹が逃げようとする、

ザシユ、ザシユ、ザシユと音がしたかと思うと、

男達の胴は分かれ、そのまま倒れ血を流していた。

背後から一太刀で、男達の命を奪ったのだ。

ふと見るとミミが血の付いた剣を持ち

男達を睨みつけていた。

「これは、一樹を襲った報いよ！」

（ああ、やっぱりここは日本とは違う世界なんだな

この世界では命が軽すぎる）

そう、思いながら一樹はこみ上げる吐き気を押さえることが出来なかった。

ある男の末路（後書き）

感想待ってますね！

1月24日修正しました。

ミシの告白（前書き）

感想にてにじファンに投稿されている理由がわかりましたので
改めて小説家になろうに投稿させて頂きました。

誠に勝手ながら土、日と投稿が難しくなったのでその分ストック分を
投稿したいと思います

ミミの告白

一樹がゲェゲェと吐いてる間

ミミ達は、奴隷商人の遺体进行处理として
穴を掘り、埋めていた。

このように、処理を行わないと血の臭いに惹かれて魔獣がやってくるそうだ。

勿論、穴に埋めた程度で血の臭いはあまり消せないが
やらないよりは、マシとのことだ。

ようやく、一樹が落ち着きを見せた頃
ミミが話しかけて来た。

「一樹どうしたのよ

まさか死体を、初めてみるわけでもないでしょうに
それじゃあ、ちょっと情けないわよ」

それを聞いて一樹は、怒りをあらわにした。

「ミミ、どうして殺したんだ！

痛めつけろとはいったが、
俺は、殺せとは言っていない」

そんな一樹に、ミミはこう答える。

「街の外で剣を向けてきたら、殺すのは当たり前よ！

一樹の村は違うって言うの！」

「そうだ！その通りだ。

俺の国では、剣を向けられても相手を殺してはいけない

俺の村では、過剰防衛になるからだ。

しかも、今回はうまく相手を捕らえる為に

こちらにも人数を用意していたじゃないのか！

奴らを殺したのは、ミミの奴らに対する私怨じゃないのか！」

一樹の言葉に、ミミは困惑していた。

ミミは、一樹を助けたる為に仕方なく、奴らを殺したのだ。

確かに、自分が奴隷商人達に対して恨みがなかった訳ではない。

奴ら、奴隷商人の所為で自分は捕らえられ

仲間の皆も辛い思いをしてきたのだ。

しかし、奴らが一樹に剣を向けなければこんなことはなかった。

むしろ、奴らに捕まったお陰で、自分は一樹に会えたのだから

少し感謝していた位なのだ。

それなのに、助けたはずの一樹からは怒りを示している。

何故一樹がここまで怒るのか、ミミには理解出来なかった。

「すこしよろしいですか一樹さん」

そう言って護衛の一人が話しかけて来た。

「ミミは一樹さんが危ないと思ったので奴らを殺したんです。

決して私怨で殺したわけではありません。

そして、一樹さんの村ははどうか分かりませんが

こちらではこれが当たり前なのです。

向って来る者に、手心を加えれば

こちらが殺されてしますのですよ」

そう言って一樹を諭し始めた。

一樹も少し冷静になった。

（そうだよな

ここは日本じゃないんだから、日本の考え方は捨てないといけないよな。

確かに、俺が大金を見せつけたのも悪いのかもしれないけど
向って来るものに同情して殺されたんじゃないよ。

俺だって死にたくないし

最終的には、欲に駆られたあいつ等が悪いわけだし」

そう思い、ここが日本とは違うのだと再認識させられて一樹であった。
た。

そして、助けてくれたのに

怒ってしまったミミに申し訳ない気持ちになった。

「ミミ、さっきはごめん

ミミは、俺を助けてくれたのにあんなこと言って

確かに、ここは俺の村とは違うんだよね」

「いいえ、私も悪かったわ。

確かに、一樹は捕らえろとは言ってけど

殺せとは言ってなかったのだから。

でも一樹、ここでは殺られる前に殺れは当然なのよ。

一樹の村のように、平和な場所ではないの。

だから、私は貴方に危害が及ぶようなら

迷わず相手を殺すわ。

それが、私達亜人の未来を守る為なんだから

それを覚えておいてね」

「ああ、わかったよ

俺だって死にたくないし

捕らえようとして、逆にミミ達が危険に晒されるくらいなら

相手を殺してしまったほうがいいよ」

相手を殺すことよりも、殺さずに無力化することのほうが遥かに危険で、難しいのだ。

一樹の我侭で、ミミ達を危険に晒すわけにはいかないそう、一樹は考えを改めたのだ。

「俺の村では、こうやって人が殺されるようなことなんてめったにある事じゃ無いんだ。

人の死体を見たのも、これが初めてので恥かしいけど、うろたえてしまったよ」

「人が、無闇に殺されることがない場所

それは、とても素晴らしいことだと思うわ

出来ることなら、私の作る村もそんな村にしたいわね」

「ありがとうミミ、

俺はこのまま村に戻るから

森の入り口までは付いてきてくれるかな？」

「ええ、勿論よ

こんな奴らが他にもいないとは限らないもの」

そう言って一樹とミミは森へ歩いていった。

勿論他の護衛4人も、一樹の周りを警戒しながら付いて行った。

そしてそこからは、特に問題もなく森の入り口に辿り着くことが出来た。

「護衛どうもありがとうミミ

それと、他の4人の方もありがとうございました」

「気にする必要はないのよ
みんな、一樹に雇われてるんだから」

ミミのその言葉で、あることに気が付いた。
報酬をまだ支払っていなかったのだ。

この世界の常識はよく分からないが
護衛なんかは、前金でいくらか渡すものなのではないだろうかと

「すみません。」

まだ報酬を支払ってませんでしたね」

そう言って、一樹はポケットから2枚の手形を取り出した。

20枚ほどの手形は、ほとんど車に置いて来ている一樹だが
もしもの為にと、3枚ほどポケットに入れて置いたのだ。

薬の為に、現金化したので残りは2枚
報酬の2000イェン分丁度だ。

「これが、今月の報酬の50イェンです

4人分で2000イェンですね

これ手形なので、ギルドで現金に変えて
4人で分けてください」

そう言って、先頭の男に手形を渡す一樹

男は、ありがとうございますと言って手形を受け取った。
それを見ていたミミは、一樹に向かってこう言った。

「一樹、私の分の報酬は？」

「ミミにも払わないといけないのか？」

そう、一樹はミミにも報酬を支払うとは思っていなかったのだ。ミミの分は用意してなかったのだ。

手形は、車に戻らないと残りはないし現金の残りも50イエンの報酬には足りない。ちよっと困った顔をしている一樹に、ミミは

「当たり前でしょ♪」

でも今すぐじゃなくていいわ

今度来た時にでも払ってくればそれでいいわよ」

「よかったよ、今持ち合わせがなかったんだ」

護衛への、報酬未払いというのは

信頼関係を崩しかねない事態なので

一樹は、助かったという顔をして答えた。

「その代わりちゃんと帰って来てね」

ミミが心配そうな顔で一樹を見ている。

「どうしたミミ？」

3〜4日できちんと帰ってくるさ

そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「一樹は、さっきの事で

この国が嫌になっちゃたかなって思ったの」

そう言って少し涙ぐむミミ

（やべえ〜やっぱりミミ可愛いなあ〜萌える）

「大丈夫だって、確かに驚いたし

人の命の扱いが軽いのは嫌だけど

自衛の為なら仕方ないと割り切っているし

なにより、このままミミ達を放っておくわけにはいかないだろ」

そう言って笑いかける一樹に

ミミは、そっと一樹に抱きついてキスをした。

「一樹、私は貴方が好きよ

だから、必ず貴方は私と結婚してもらうわ

亜人の未来の為にも、私の為にもね♪」

そういうとクルッと街のほうを向くと

「それじゃあまたね

でも、なるべく早く帰って来てね」

そう言って恥かしかったのか

ミミは、急ぎ足で街へ戻っていった。

其の後に、護衛の4人も一樹に礼をして

ミミの後を急いで追って行った。

（あれは、照れてるのかな？

まあミミみたいな可愛い子にそう言われると悪い気はしないな

でも、もうちょっと時間が欲しいかな・・・雪を忘れる時間を）

そう思った一樹は、静かに祠を目指して歩いていくのだった。

ミミの告白（後書き）

1月26日修正しました。

薬の効果（前書き）

感想に美味しい水って書いたんですが
やっぱり良薬は口に苦しってことにしました。

薬の効果

トンネルを抜け、車に乗り込む一樹
一度、家に戻るために車を走らせる。

自宅まで3時間ほどの道のりを車で走り無事に家まで着いた。
途中疲れて、休憩を入れようと思ったが

このままノンストップで行けば

まだ両親の起きているうちに、家に着くことが出来るので
休憩を挟まずに、急いで家に戻った。

到着時刻は午後10時

家の明かりはまだついていた。

（父さんも母さんもまだ寝てないのな

丁度いい父さんにこの薬を試してもらうかな

副作用は無かったし

効果が出るか、それもと何も起こらないという感じだろう）

そう、一樹は一番安い薬（5イエンほど）を

ミミの家で、すでに自分で飲んでいたのだ。

副作用があり、倒れることがあっても

ミミの家でなら、大丈夫だと思ったからだ。

そして、今まで何とも無いということは

副作用が無いということだろう。

しかし、自分が飲んでもあまり疲れている訳でもないので
効果の程はよく分かっていなかったのだ。

なんとなく、元気になったような気がするといった感じだろうか。

「ただいま」

「どうしたの一樹？」

夏休み中はT県で研究するんじゃないの？」

とすると、一樹の母が少し驚いた様子で出迎えてくれた。

「いや、ちょっとね

確認したいことが出来たから、一時的に帰ってきたんだよ。

また、2・3日したらあっちに戻るんだけどね。

ところで、父さんはまだ起きてる？」

「あらそうなの

お父さんなら、居間でTVを見てるわよ」

母親にそう言われ、一樹は居間に向かう

今では父親はTVを見ていた。

そんな、父親にただいまと挨拶をする。

「おう、一樹おかえり

夏休み中はずっと向こうにいるもんだと思ってたぞ」

「いや、ちょっと父さんに用があってね

一時的に帰ってきたんだ」

「俺に用か、一体何なんだ？」

「これ、体にいい物らしいからさ

父さんに飲んでもらうと思って持ってきたんだ。

少しでも体調が良くなればいいかなって思ってたさ」

一樹は父親に例の薬（二番安いやつ10イエング）を渡しながらそ

う言った。

そう、薬の効果が本当にあるのか
父親が使ってみれば一目瞭然なのだ。

一樹の父は、慢性腎不全を患っている。

その病が、少しでも改善されるようならこの薬は本物だ。

「なんだこれは、随分と安物の瓶だな

何処かのメーカー品って感じじゃないな。

大丈夫なのか本当に？」

一樹の父親は少し不安そうに一樹にそう尋ねた。

「効果は体力の回復と、体調を整えるらしいよ

でもその程度、体力が回復するのかよく分からないから

それを知るための実験になるのかな？」

俺も飲んでみたけど、流石に元気な俺が飲んでも効果の程はわからないからね。

副作用は無いみたいだし、ものは試ってことで飲んでみてよ」

（父さんに飲んでもらうんだ。

副作用が無いって事で安心して飲んで貰わないとね）

「なんだか怪しい感じだな

まあ一樹が持ってきたものだから悪いものではないだろう」

そう言って、一樹の父は瓶を開け、薬を飲み干した。

「こいつは、かなり苦くて不味いな・・・」

「味についてはごめん

でも、俺が飲んだものはそこまでじゃなかったよ？」

確かに一樹の飲んだものにも苦味があり美味しいものでもなかったがそこまで、顔をしかめるほどのものでもなかった。

後で分かったことだか

この薬、一番高価なものは薬草などを煎じたものをそのまま瓶に詰めるそうだ。

いわば、カルピスの原液をそのまま飲んでいるようなものだ。

そして、値段の安いものはその原液を、水で薄めたものらしい。値段が下がれば、その分水で薄まってるという訳だ。

なので、高価になればなるほど苦味が強くなるようだ。

「まあ、良薬は口に苦しっていうもんだ」

「そっか、じゃあ俺はこれからシャワー浴びて寝るからもし、体調が悪くなったりしたらすぐに言ってね

俺も飲んで、副作用ないと思ったんだけど

父さんが飲んだものは

俺が飲んだものとは、少し違うようだからさ」

「もしかして、実験だったのか？」

「言ったじゃん、効果の実験だって

俺が飲んだものは、父さんが飲んだものより安いやつだったから

万が一って事もありえると思ってさ」

そう言うと、一樹は風呂へ直行し、シャワーを浴びた。

3日ぶりに浴びるシャワーは汚れと、疲れを流した。

風呂場から出ると、父さんはすでに寝ていたようだ。

父親の事が、少し心配だったが

一樹は、疲れたのかベット入るとすぐに寝てしまった。
そして、次の日の朝父親に叩き起こされた。

「一樹起きろ！」

「なんだよ父さん、こんな朝っぱらから」

朝7時に叩き起こされ少し不機嫌な一樹
だが、次第に頭が覚醒する。

父親が起してくる違和感を感じ少し焦る一樹。

「父さん、もしかして体調が悪くなったの！」

父親は、違う違うといった感じで首を振りこう答えた。

「逆だ、すこぶる快調だ。」

疲労感などがほとんどないし、足のむくみの和らいでいる。

あの薬はものすごく効果のある薬だと思うぞ

特に副作用もないようだしな

一樹も何も変わらないんだろう？」

それを聞き、自分の体に違和感がないか確かめてみたが
何処も、おかしいところはなさそうだ。

「そうか、それはよかった。」

でも、そんな報告なら今しなくてもいいんじゃないの？

朝っぱらから、たたき起こさないでよ」

「なに、俺は今から仕事だからな

仕事に行く前に、もう一度あの薬を貰おうと思ってな」

「そう、わかった。

なら、ちょっと待ってて」

そう言っで一樹は、リュックから18イェンほどした結構高価な薬を出して渡した。

「この薬は1日1本までらしいからね

朝飲むのがいいのか、それとも寝る前に飲むのいいのかわからないけど

残りは、これを入れて3本だよ」

「まあ、ものは試しだ。

今度は、朝飲んでみるのいいだろう。

では行ってくる」

そう言っ父は、薬を持って部屋から出て行った。

一樹は、嵐は去ったともう一度夢の中に入っていった。

昼過ぎまで寝ていた一樹は、その日はダラダラと過ごした。

部屋で本を読んでいた一樹は

夕方随分早くに帰宅した父親に居間に呼び出された。

「一樹座りなさい」

「もう座ってます」

そんな漫才みたいなやり取りをしてると

父親は、真剣な顔をして一樹に聞いてきた。

「まあそんなことはどうでもいい

一樹、単刀直入に聞くこの薬はなんだ」

「たまたま手に入れた体力を回復させる薬だって
そういったじゃないか」

「そうか、なら質問を変えよう
この薬を何処で手に入れた」

「それは言えない
でも、どっかの新薬を盗んできたとかじゃないから安心して」

「一樹、出来れば教えて欲しい。
これを飲んでから俺の体調はすこぶる調子がいい
病が治ったのかと思うくらい体調がいい」

「父さん、それはいい事じゃないか」

「確かにいい事だ
だからこそ、しっかりと知っておきたいんだ。
俺は明日、会社を休んで病院で検査を受けるつもりだ
もし、病状が改善されていたなら
その意味は一樹分かるだろ」

「それでも、この薬を何処で手に入れたかは言えないよ」

（言えるわけが無い

まさか、異世界の魔法の産物ですなんて言えないよ
俺も、まさかここまで効果があるなんて思わなかったよ）

そうなのだ。

一樹は少しでも、父親の病状が良くなればと思っていたがここまで、劇的に改善されるとは思っていなかったのだ。異世界の魔法薬、恐るべしといったところだ。

「仕方ないか・・・」

ところで、今日の薬を飲んでからのほうが調子がいいんだが

今日の薬は、昨日の薬とは少し違うのか？」

「今日飲んだほうが、高価なんだよ
それで、残ってる後2本はもっと高価だよ」

「もっと効果の高い薬があるのか？
確かに、今日の薬のほうが苦くて不味かったぞ」

「多分だけどね
その分副作用とか心配だったから
安い順から飲んでもらったんだよ」

「自分で飲んで副作用を確認したとはいえ
父親で本当に実験するとは・・・
それよりも、この薬だがもっと量を揃えることはできるのか？」

「大量には無理かもしれないけど
そこそこの量なら、揃えることは可能だと思うよ」

「そうか、取り合えず俺は明日
病院に行ってくる。
その結果如何では、俺も少し考えてることがあるんだ」

「そうだね

でも、父さんの為に持ってきたっていうのは本当だよ」

「分かった

ありがとう一樹

検査結果によってだが、これをこれからどうするつもりだ」

「でも、後は10人くらい被験者が欲しいよね。

後は、どんな症状にも利くのか、

それとも、腎不全だけなのかも知りたいところなんだよね」

「本当に人体実験だなそれじゃ」

「でも、これが本物なら日本の未来は明るくなると思わない？

その為に必要な実験だよ。

しかも、副作用は無いみたいだしね

別に効果がなくても苦い水を飲むくらいで済むことだよ」

「そうだな

確かにそういった実験は必要かも知れんな

まあ、明日の検査結果次第で考えていくしかないな」

父親がそう言うと、一樹は明日の検査結果が楽しみになったのだった。

薬の効果（後書き）

ちよつと描写が弱いとの指摘があり
作者も少しそれを感じていたので
全話少し修正を行いたいと思います。

1月26日修正しました。

土、日はそれに当てようと思ってます

病の改善（前書き）

血清クレアチニン値 検査ですが

当日に、検査結果が出るものなのか作者には分かりませんが、小説ということで許してください。

病の改善

翌日父親は、朝早くから病院へ検査を受けに行った。母親は、お父さんが仕事を休んで病院に行くなんて珍しいこともあるものねと言って父親を送り出していた。

（父さんは、母さんに何も言っていないのかな？

まあ、いずれ父さんから話すだろうし

検査結果次第で、落胆させる必要もないか
結果が出てから、報告すればいいんだし）

一樹は、父親病院に行っている間パソコンを使ってT県の御伽噺や伝説について、少し調べてみた。

大友さんが、話してくれたものとあまり変わらず昔、神隠しが起こったこと

そして、そのまま戻ってくるものもいれば戻って来ない者もいたと書かれている。

しかし、一つだけ面白い話を見つけたことが出来た。

T県T町の近くの山中には、蛇沼と呼ばれる沼があるそうだ。

その沼には、昔から大蛇が住んでいるとされ

その大蛇の血を飲むと

どんな病でもたちどころに治ったという言い伝えが残っている。その伝説の名残なのか

町では、正月に一年の無病息災を祈り

蛇に似せた、荒縄を奉る風習が残っているそうだ。

（もしかして、この大蛇って

向こう世界から来た魔獣か何かなんだろうか？

つまり、波長みたいのが合えば向こうからも
こっちの世界に来られるってことかな？

その他では、特に変わった情報を得る事は出来なかった。
一応○ちゃんねるで、検索も掛けてみたがヒットすることは無かつた。

ついでに、T県にある面白い看板うpスレを立ててみたが
2時間後には、スレ落ちしていた。

そんな事をやっている間に、あっという間に時間は過ぎ
父親が、病院から帰ってきた。

そして、一樹の部屋にいのいち番にやってきた。

「ただいま、一樹」

「ああ、お帰り父さん」

「今から話があるんだがいいか？」

どうやら父親は、すぐにでも検査の結果について話したいようだ。
一樹としても、すぐにでも聞きたいことだったので
父親には、部屋に座ってもらった。

「結果から言うと、この薬の効果は本物だ」

「病気が、改善されたんだね
よかったよ父さん」

「ああ、血清クレアチニン値検査を行ったんだが
血清クレアチニン値2・2mg/dLまで下がっていたよ。
もう、人工透析は必要なくなった」

そういうと、父親は目に涙を浮かべていた。

一樹も、父親の病気が改善され本当に嬉しかった。

一樹の父はこれでも、有能な商社マンだった。

まだ、一樹が小さな頃は家にいる事はめったに無かったし
単身赴任で、数年家に戻らないこともあった。

しかし、病を患ってから

今まで勤めていた営業1課から、社内情報処理課に移ることになった。

本人は、病気でもう激務は無理だから仕方ないとは言っていたが
やはり寂しそうだった。

ちなみに、課長から部長補佐と昇進しているので
厄介払いという訳ではないようだ。

「これでもう大丈夫なの？」

「いや、まだ第4期から第2期にまで改善しただけだ
いわゆる、腎機能障害というやつだな」

腎機能障害は4段階に別れており

第1期

腎機能の低下（予備能の低下）

腎機能（濾過能力）が70～50％に低下。

腎臓の予備能力で働きは維持され、特に症状は出ない。

第2期

腎機能の障害

腎機能は50〜30％に低下。
血清クレアチニン値が正常の範囲を超えて2 mg/dL以上になる。
人によって症状が出てくる。

第3期

腎不全

腎臓の機能が30％〜10％に低下した段階。
血清クレアチニン値は3 mg/dL以上になる。
腎不全の症状が出る。
薬での治療、食事療法を行う。

第4期

末期腎不全

腎臓機能が10％以下に低下した段階。
血清クレアチニン値は8 mg/dL以上。
この段階では尿がほとんど出なくなるので
尿毒症が起き、各種の重大な症状を起こして命に関わる。
透析か腎臓移植が必要になる。
このようになっていく。
つまり、末期腎不全から、腎機能障害まで回復したことになるのだ。
現在、腎不全は不治の病と言ってもいい病気である。
腎移植以外の方法で、病状が回復することが出来ないのだ。
これはまさに、奇跡と言っても過言ではない。

「それでも、元の部署に戻って仕事が出来るとでしょ
本当によかったよ」

「いや、元の部署に戻る気はないが

その事で、一樹と話をしようと思ってたんだ
一樹としては、この薬をどうしようと思ってるんだ
この薬の効果は、実証された。
まだまだ、治験などをしなければならぬが
腎不全が治るような薬だ。
他の病気にも期待できるだろう」

そう、腎不全のような病気に効果のあるのなら
他の様々な病気にも効果が期待できる。
もしかすると、癌の特効薬にさえなるかもしれないのだ。
この薬、扱いを間違えれば大変な事になるのだ。

「俺としては、まず父さんがよくなればって思ったんだ。
確かに、少しでも効果があれば
この薬を販売しようとは思ってたけど
ここまで、効果があると俺には扱いきれないかもしれない」

そうなのだ。
成分も製法も秘密の薬だ。
大手を振って販売することは難しいだろう。
ましてや、魔法の産物だと公表することも不可能だ。

「そうだな
まずは、販売方法は置いておくでしょう。
それは、これから考えていけばいい。
まず、この薬の成分だが
一樹は知っているのか？」

「いや、俺にもわからないんだ
でも、成分を調べても仕方ないと思うよ」

「それは、どうゆう意味だ？」

「ごめん、それも秘密なんだ」

「分かった。」

だが、一応俺の知り合いに頼んで成分調査をしてもらおう思う
それは、構わないか？」

「どんな結果が出ても公表しないって約束出来るなら構わないよ」

「その辺は心配するな」

そこは徹底させる」

そう、もしここで地球上に存在しないような
成分が出てきてしまつては困ってしまう。

だが、こちらで製造可能なものだった場合
大発見になる可能性もあるのだ。

なので、その結果を誰にも漏らさないというのであれば
成分分析は、するべきだと一樹は考えたのである。

「それと、この薬なんだが」

月にどれくらいの量を用意出来るんだ？」

「それもちょっと今は分からないよ。」

その辺も、今度しっかりと調べてくるよ。

それに、治験の為に、もう一度取って来ないといけないしね」

「そうだな」

治験に使うのは

俺が昨日飲んだ薬で、治験をするのがいいんだろうか
それとも、俺のように順に飲んでもらったほうがいいのか
？」

「順に飲んで貰った方がいいかもしれないね
行き成り強力な薬を飲んで、副作用が出ないとも限らないからね」

そう、副作用は心配ないと言っていたが
今度は、見ず知らずの人に配ることになるかもしれないのだ
少しでも安全策を取った方がいいだろう。

「なら、服用期間を3日間として
治験をする為にも

一樹の飲んだ、一番安いものと

俺の飲んだ2本を、計10本ずつ頼む
治験を行う人物は、俺のほうで選んでおくから心配するな
俺位の年になると、友人も何かしらの病を抱えてるものだ。
勿論、薬については秘密にしてみようから安心しろ」

「父さん、それだけは頼んだよ」

「当たり前だ。」

まあ、別に広まったとしても
いざとなったらそんなものは知らんと突っぱねるだけだ」

ガハハハと、豪快に笑っている父親を見て少し心配になる一樹だった。

「そうそう、これを渡しておかないとな」

そう言って一樹に結構厚みのある封筒は渡した。

「父さんこれは？」

「中に30万入ってる。」

この葉が、何処のもので

どんな方法で手に入れたのかは、もう構わない。

ただ、手に入れるための必要経費はかかるのだろう

その為の必要経費だと思ってくれ」

「ありがとう、父さん

俺の貯金じゃ、ちよつと厳しいかなって思ってたんだ」

その後、父親と色々な事を話した。

大学のことや、T県の伝説のこと、

雪江の事を聞かれたときは、何も言えずに

かなり、微妙な雰囲気になって困ってしまった。

そうやって、一樹の一日が終わった。

（食事の最中に父さんが

病気が治ったと宣言するもんだから

母さんが泣き出して大変だったよ。

でも、父さんと母さんの喜びようを見て

薬を持ってきたよかったと思ったよ）

そう思いながら一樹は、眠りに就いたのであった。

病の改善（後書き）

一応、方針は決まりました。

蛇沼の伝説（前書き）

ものすごく久しぶりの更新になります。

方針が決まっただけだったのですが

自分の中であまり納得が出来なかったので

何度も、書いては消し、書いては消しを繰り返しました。

蛇沼の伝説

次の日の朝、一樹は目覚まして居間へ向かうと父親が、のんびりと朝食を食べているのに驚いた。現在時刻は朝の8時半何時もなら、とつくに家を出ているはずの父親がのんびりしているのだ。驚くのも当然である。

「父さん、どうしたの？
これじゃあ、完全に遅刻だよ」

すると父親は、心配するなという顔で

「ああ、大丈夫だ。
実は、今日も休みを取ったんだ。
本当は昨日だけのつもりだったんだが
せっかく病状が回復したんだ
母さんと何処かへ出かけようと思ってな」

今まで、ゆつくりと夫婦で過ごす時間もなかった二人だ。病状も治まり、普通と変わらない生活を送れるようになったのだから今日くらいは、夫婦で楽しんでもバチは当たらないだろうということらしい。

「確かに、そうだよね
今まで父さんは頑張ってきたんだから
今日くらいゆつくりしてもいいと思うよ。
母さんも喜ぶだろうし」

「今までは、まったく出来なかったからな
今日くらい、母さん孝行したほうがいいと思ってな
ところで一樹は、いつ向こうに戻るつもりなんだ」

父親としては、一樹に暫くここにいて欲しいと思う反面
なるべく早く、あの薬を調達して欲しいと思う気持ちもあるようだ。

「俺は、今日にもI県に戻ろうと思うんだ。
薬の件もそうだけど、卒論研究もしないと不味いからね
それに、俺がいると父さんも母さんものんびり出来ないだろ」

一樹としては、父親と母親とゆっくりのんびりするのに
自分がいては、少し邪魔かな思う気持ちもあるようだ。

「そうか、そんな事は無い
とは言えないな。

まあ薬の件は頼んだ。
それと、卒論はしっかりと頑張れよ」

そう言うと、父親は残りの朝食を食べ始めた。
母親は、せっかく父さんがよくなったのだから
もつとゆっくりすればいいのにと言っていたが
一樹は、向こうでの研究が面白いから
なるべく早く戻りたいと言って誤魔化した。
しょうがないわねと言って、上機嫌で仲良く出かけていった。

（母さん、結構気合入ってたな
久しぶりなんだろうな、父さんと二人で何処か出かけるの）

二人の、久しぶりのデートを見送り
向こうへ向かう準備を始めた。

特に家から持っていくものはないので
着替えを詰めて、準備はすぐに済んだ。

そして、車に乗り込みT県を目指す。

事前にパソコンを使って調べておいたので

途中で、業務用スーパ―により

砂糖50?、胡椒20?と麻袋を買い込んだ。

さすがに、これだけの量を運ぶのは大変なので

ホームセンターによって、折りたたみ式リアカーも買い込んだ。

(これだけあれば、1万2000イエンくらいにはなるだろう
一気に、全部卸す訳にはいかないけどね)

そうやって必要なものを買い込み

大友さんの喫茶店に向けて、再度車を走らせた。

勿論、大友に会いたいという理由もあるが

蛇沼の話の詳細を聞きたいと思ったからだ。

(大友さんに顔を見せないといけないし

何より、あの蛇沼について

詳しく話を聞きたいからな

あのホームぺだだけだと、イマイチ詳しい事はわからなかったからな)

途中休憩を挟み、午後3時頃に大友の店に着くことが出来た。

この時間でも、大友の店の駐車場には車が一台も停まっていなかった。

(この店、よく潰れないな・・・)

一樹は、結構失礼な事を思いながら店に入ってしまった。

「こんにちは〜大友さん」

「やあ、一樹君か久しぶりだね
研究は進んでるのかな？」

そうやって、大友は笑顔で出迎えてくれた。
店内には、誰も客がいないようだ。

「ええ、ボチボチですね。

ところで、お客さん他にはいないみたいですね」

「まあ、困ったことに

こんな店に通ってくれるのは、一樹君くらいなもんだよね」

そう、悲しそうに大友は話してくれた。

こんな田舎町では、喫茶店をしていくのは
やっぱり難しいのかもしれない。

「そうですか・・・

今日は、大友さんに聞きたいことがあるんですがいいですかね？
後、ブレンド一つお願いします」

「聞きたいことって何かな？
ブレンドね了解」

そうやって、大友はコーヒーを入れてくれた。
一樹は、コーヒーを楽しみながら

蛇沼について、話を聞いてみた。

「蛇沼の伝説かあ」

一樹君は、あれに興味を持ったのか

あの話は、未だにこの地方の風習として残ってるからね。

それに、神隠しの話とも繋がりがある話だから

一樹君が、興味を持つのも当然だね」

「神隠しの話と、繋がりがあるんですか？」

簡単に自分が調べた結果では

そんな話はなかったので、興味津々の一樹だった。

（こりやますます、魔獣か亜人が

こっちの世界に來た可能性が高くなってきたな）

「蛇沼伝説の話は

今から約300年ほど前から、この地方で伝えられてる話なんだけどね」

そう言っつて、蛇沼の伝説について話してくれた。

当時、この辺りで疫病が広がり

大変な量の死者が出たそうだ。

このままでは、村は全滅だと思われたとき

一匹の大蛇が、村に現れた。

村人は、もうお仕舞だと思ったが

その大蛇は、村の惨状をみるなり

村人に、自分の鱗を分け与えこう言っつた。

その鱗を持っつていれれば、病は治っつていくと。

大蛇に驚いた村人だが、藁にも縋る思いで

大蛇の言う通りにすると

鱗を渡された村人達は、少しずつ体が良くなっていき
3日もすると、元通り元気になった。

村人は何故助けてくれたのかと聞いてみると

大蛇は、こう答えたのだ。

私は、この村の青年に助けられたのだ。

これはその恩返しだと思ってくれればいいと。

さらに大蛇は

鱗を、近くにある沼や泉にでも沈めて

その水を飲んでいれば、もう病にかかることもないだろう
そう言って、村から去っていった。

大蛇が、助けられたという青年は

随分昔に神隠しに合い

行方が、わからなくなっているとのことだ。

村人達は、話を聞いてすぐさま鱗を沼へ沈めたそうだ。

沼の水は汚く濁っていたが

鱗を沈めると、みるみるうちに水は綺麗になっていったそうだ。

そして、その沼の水を飲むと

どんな病気にもかかることはなかったそうだ。

これが蛇沼の伝説といわれる話である。

「これが、この地方に伝わる蛇沼伝説だよ。

蛇沼はすごく綺麗な沼で、美味しい水で有名だったらしいけど

戦前くらいから、徐々に水が濁りだしたらしくてね

今じゃ見る影もなくなってしまったけどね」

一樹は、自分が調べた話だと

大蛇は、そのまま沼に住み着いたのではないのか？

大友の話とは少し喰い違う部分があるので

その辺りを聞いてみることにした。

「大友さん、僕が調べた話と少し違うんですが
大蛇が沼に住み着いたとなってるんですが
その辺りはどうなってるんでしょう？」

「ああ、それだけど

村から去らずに、そのまま沼に住みついたって話もあるんだけど
僕が調べてみた感じでは

大蛇は去って鱗だけが残ったというのが
今のところ、定説みたいだよ。

まあ、民話なんて解釈が色々あるものだから
どれが定説なんて、わからないものだけだね」

まあ、民話なんてそんなものなのかもしれない。

解釈の違いや、時間が立てば

歪んで伝わってしまう事もある。

その辺りの違いは、仕方ないのかもしれない。

（実際に、大蛇がどうなったかは置いておいて
神隠しで消えた青年

それに、助けられた大蛇というのは

向こうの世界の魔獣で、間違いないだろう。

つまり、向こうの世界からこっちの世界へ移動も可能という訳か
これは、少し対策を考えないといけないな）

向こうの世界から、こちらへの移動が可能となると

余計な混乱を引き起こしてしまう。

この辺りは、亜人達と協力して

あの森に、人が入り込まないようにしないといけなくなったのだ。

（この辺りは、ミミに相談して協力を要請するか
あの森周辺の土地を買い取って
出入り禁止にするしかないかな）

一樹が考え込んでいると

大友は、分厚いレポート用紙を持ってきて一樹に渡したのだ。

「一樹君、これは僕が卒論を書くために使ったデータだよ。

卒論自体はどこかにいちゃったみたいで

見つけることが出来なかったんだ。

でも、これを共にすれば大丈夫だと思うから

これを使って頑張ってみてよ」

「本当に、有難うございます。

大事に使わせて頂きますね

じゃあ、今日はこの辺りで失礼します

また、よろしく願いますね」

そう言って、一樹はレポート用紙を大事そうに抱えて店を出ると
今日の就寝場所となる、道の駅を目指して車を走らせるのだった。

大友レポート（前書き）

前回からかなり時間がかかってしまい
本当に申し訳ないです。

今回少し短いですね O r Z

大友レポート

道の駅に到着してすぐに

先日は、入ることの出来なかった温泉に入り疲れを癒す一樹。

風呂は、日本人の魂だ

そんな気持ちで温泉を楽しんだ一樹だった。

温泉を楽しんだ後は、T県の郷土料理を楽しんだ。

道の駅には、郷土料理店や地元物産展などがあり

時間を忘れて楽しむことが出来るのだ。

一通り楽しむと車に戻り

大友のレポートを読んでもみた。

このレポートには、まだ自分の知らない情報が眠っている可能性がある。
ある。

読んでおいて損はないと思ったからだ。

レポートを読んでいるうちに意外な事実がわかって来た。

神隠しが初めて確認されたのは、江戸時代初期の約1600年付近。

他にも、神隠しに合った人はいると思われるが

それ以前の資料が残っていないので、確認のしようがない。

なので、この人が神隠しの第一被害者となっている。

第一被害者の話

村から一人の女性が、忽然と姿を消したそう。

江戸時代であれば

辻斬りや、追剥などに巻き込まれた可能性が考えられるし

食い扶持を減らす為に殺すなども日常で行われていたのだ。

本来であれば、そこまで大きな事件とはならないはずなのだ。

しかし、その女性が村の地主の娘だった事で

村人総出で探し回る大事件となった。

しかし、どんなに探しても見つかることが出来なかった。
村人達は、娘は神隠しにあったのだ。

山の神様に捧げられたのだと噂するようになったそうだ。
神隠しから幾分時がたち、村人も事件を忘れかけたある時
娘がひよっこり帰ってきたのだ。

大いに喜んだ地主であったが、娘はすぐに戻らないといけな
いと言
って

すぐに、姿が見えなくなった。

そうやって、何度も戻ってきては姿を消し

地主を大変困らせたそうだと記録が残っている。

第二被害者の話

次の神隠しの被害者は蛇沼の伝説に出てきた青年である。

青年は、村周りの最中に

祠近くで休憩中いきなり姿が見えなくなったとされている。

この件に関しては、一緒にいた同僚の男性の証言が残されている
という。

40石と微禄であるが、この青年文武両道に優れ

将来を期待されていたので、これも大事件となっただけだ。

この青年は、そのまま二度と戻ってくることはなかったそうだ。

第三被害者の話

江戸時代中期に、寺子屋の教師の男が突如行方不明になった。

それから、一月ほどしてその男は戻ってきたが

まだまだやり残したことがある。

妻と子供が心配なので

一時的に帰ってきただけだ。

これからも、ちよくちよく帰ってくる。

そう言つて、また姿が見えなくなったそうだ。
その言葉通り、教師はちよくちよく帰つてきては
すぐに姿が見えなくなった。

しかし、帰つてくるたびに妻に金を渡していたので
子供と妻の生活は問題なかったようだ。

しかし、その事を大名に知られ
男は捕らえられてしまった。

金の出所を一向に教えない男は処刑されてしまったそうだ。

第四被害者の話

江戸時代中期には、たまたま村を訪れた医者が行方不明になる。

この医者は本道を修めており

善意で辺りの村を見て回っていたそうだ。

井戸に水を汲みに行くと言つて出て行つたきり

戻つてこなかったそうだ。

本道とは、漢方などの処方を行う内科医のことだ。

第五の被害者の話

江戸時代後期には、農家の三男坊が

家の倉庫を調べている最中に行方不明になっている。

上記に書いてあるとおり、この時代の農民の行方不明など
大して珍しい事ではないが

この三男坊も地主農家の家のもので

ある程度の教養もあり、武芸も嗜んだようだ。

しかも、自分の家の倉庫で行方不明になったのだから大変な騒ぎと
なった。

この三男坊も、姿が見えなくなったかと思えば
戻つてくるを繰り返していたようだ。

地主農家では、田んぼを継げるのは長男だけだったので次男や三男などの他の兄弟は、商家に奉公に出されたり医者や、僧侶になったりするため
上記の地主のように、家族を大変困らせたようだ。

第六の被害者の話

明治中期には、兵庫県で塩の生産方法を学んでいた男が帰省の最中に神隠しに合い

そのまま戻ってくることはなかったと書いてある。

この男は、向こうの世界で入り浜式塩田を広め
向こうの塩の生産に大きく貢献した男で間違いないだろう。
いずれも裕福な家の者であるか

あるいは、ある程度教養をもっている者が
神隠しに合っていることがわかった。

（これは一体どういうことなんだ？

すべて、向こうの世界にとって有益になりそうな人間だけが
神隠しに合っているような感じだ）

レポートを見る限りは、そう思っても仕方ないのだ。

他にも、神隠しに合っている人がいるのかもしれないので
そう結論づけるのは早いかもしれないが

（何か陰謀めいた雰囲気があるけど

こっちじゃ調べようがないし、

剣と魔法の世界にありがちな、召還魔法とかがある訳じゃないかな。
らな。

偶然なのか、それとも神の導きとかその辺りなのか
こればかりは、考えてもしょうがないかもしれないな

まずは、向こうの世界で情報を集めない。

向こうの世界に有益な人間だけが神隠しに合うとしたら

俺も何か向こうでやらないと不味いのかもしれんからな・・・

まあ、単純に昔の資料に残るような人は

お金持ちか教養のある人物だけだったって可能性が高いけどな。

それに、向こうの世界の公用語が

日本語になってる点で、神隠しにあった人物の誰かが

向こうでかなりの地位になっていた可能性があるし

もしかすると、捕まって奴隷のような扱いを受けていたかもしれないからな)

この神隠しに、どんな陰謀があるのかわからないが

もしかすると、そんなものないのかもしれない。

それを考えてもしようがないと割り切り

一樹は仮眠室で眠りについたのであった。

門番の意味（前書き）

大分久しぶりの投稿になります。

失踪はしませんよ

絶対に作品は終わらせます。

PVも評価もとんでもないことになってますね

こんなにも評価して頂けるとは思っていませんでした。

門番の意味

翌朝、目を覚ました一樹は

朝食を食べながら、これからのやる事を考えていた。

朝食は、日本の朝の定番

鮭の切り身、納豆、冷奴、味噌汁とご飯がついて350円ととてもリーズナブルだった。

（まずは、薬の定期的な購入資金の為に

砂糖と胡椒を換金しないといけないよな。

でも、定期的に薬を購入するより、専属で薬師を雇ったほうが安く済よな。

口の堅い薬師を見つけるのも骨が折れそうだから

例の竜人族も薬を作るようだし

龍人族を薬師として雇うのもありかもしれないな。

砂糖と胡椒も一度に大量の市場にだすと

値段が暴落するし、買い叩かれるから、少量ずつ出していかないといけないよな。

それと、胡椒と砂糖以外にも、売れそうなものも調べておかないと資金繰りが大変になりそうだ。

胡椒以外の香辛料は売れないもんかね？

胡椒以外の香辛料となると・・・カレー粉といけるかもしれないな。

カレー粉は肉の臭みを取る万能調味料だ。

しかし、そうなってくると輸送も面倒になってくるな

砂糖や胡椒も？単位での輸送になると、俺一人だとかなり大変だ。

出来れば、森の近くに倉庫でも建てるべきだよな。

それなら、祠と倉庫間をリアカーで往復するだけで済むし

倉庫に保管しておけば、一度の大量に持ってきても大丈夫になる。

倉庫の番人兼、森から町までの護衛役を兼ねれば
俺も安全に街まで移動出来るしな。

そうになると、森の近くの土地を購入しないといけなくなるな。
土地の購入方法ってどうやればいいんだろ？

そもそも、土地自体売買可能なものだろうか。

色々と情報を集めていくしかないか)

朝食を食べ終えた一樹は

道中の水分補給用にペットボトルを買い

例のトンネルへ向かって、車を走らせるのだった。

トンネルについた一樹は、車の中に置いておいた手形と、
ペットボトルを鞆に入れ、胡椒と砂糖は置いていった。

(砂糖と胡椒は一先ず置いておこう。

まだ、1800イエンの手形があるし

薬を買う分にはこれで足りるだろう。

今日は、薬を買うだけでいいな。

薬は、ダンボールに詰めて自宅に送ればいいし

後は、父さんがうまくやってくれるだろうし。

土地の購入方法なんか分かったときにでも

砂糖や胡椒は持っていけばいいだろうし。

それに、砂糖と胡椒の適正価格を調べないままに

サムエさんの店に卸すと絶対に買い叩かれるからな)

あの時は、あの悪徳商人のいい値で買い取られることに

我慢できなかったので、あの値段での売り渡したが

サムエに買い叩かれた感のある一樹は

今度は、事前に値段を調べて売り払おうと思っていたのだ。

(それとも、砂糖と胡椒の卸売り店でも開くほうがいいのかな

自分で直営店を持つて

店のほうは、長時間姿を変えることの出来る

巫人に任せれば、悪目立ちすることもないだろうし。

卸売業者として小売業者に対して

安く卸せば、そんなに非難は受けないだろう。

やっぱり自分だけ儲けたりするのはよくないからな

すでに、夜道を一人で歩けなくなってそうだし

いつ、暗殺とかされるかわからんからな)

日本の物を色々な物をもってきて販売すれば

あっという間に、億万長者になれてしまいう一樹だが

やり過ぎて悪目立ちしてしまうと

嫉妬やその財産目当てで、命を狙われることになる。

すでに、一度狙われているので

色々と慎重になっているようだ。

(何より、こっちの商売方法もよくわからないからな

行商人をしたり、店を持ったりするのに

届出とか必要ないのかね？

その際に戸籍の提出とかしなきゃいけなかったりしたら完全にア
ウトだな。

そうになったら、代理で誰か雇えばいいだけだけど。

それより、税とかどうなってるんだろ。

前回の売買に税がかからないのかな？

普通は、門番なんかに通行税として、

商品の1部だったり、それにかかる税だったり払うもんだけだな。

それ以前に、街に入るのに通行証とか必要ないのかね

普通に素通り出来たけど

その辺りも調べなきゃいけないな・・・

どんどん調べなきゃいけないことが増えていくな)

色々考えながら歩いているうちに
気がつけば城門の前まで着いていた。
門番として、ハルクが立っていたので
一樹は、ハルクに向かって挨拶をした。

「こんにちは」

いつもお疲れ様です。ハルクさん」

「おお一樹か、

それよりも、あんまり一人でこの辺りをうろつくのは関心しないぞ
魔獣にでも襲われたらどうするんだ
俺たち門番が見える範囲でなら、助けに行くことも出来るが
それ以外での場所で襲われたらお仕舞いだぞ」

「ハルクさん

街の近くで魔獣なんて出るものなんですか？」

一樹はびっくりしてハルクに尋ねると
ハルクは少し呆れた顔を答えた。

「おいおい、一樹の故郷はそんなに安全なのか？

街から一步でも出れば、魔獣に襲われるなんてこの辺りでは常識
だぞ。

勿論昼間に襲われることは、滅多に無くなったし

最近では、護衛もつけずにウロウロする奴も多くなった。

それでも、安全だと言える状態ではないんだぞ。

俺たち門番は、魔獣が街に入ってこないよう見張りをしてるし
近くに現れた魔獣の駆除が仕事なんだ。

最近はその事を忘れてしまって

『門番なんて立っているだけで楽ですね』なんて言ってくる輩もいて困っているんだ」

そう、この世界の門番は魔獣から街を守るためにいる。街が城壁に囲まれるまでは

街を魔獣の群れが襲ってくるなども、度々あったのだが現在では、城壁に囲まれ安全となったハイネでは魔獣が群れで街を襲うなどの大事件もなくなった。

あっても、1・2匹の魔獣が門番に向かって

襲ってくるような小さな事件が起きるくらいで

街の近くで、魔獣を見かけることもほとんどなくなり

門番の不要論が上がっているようだ。

（こっちの世界の門番は

街に入ってくる商人の監視や、税の取立てにいるわけじゃなくて魔獣対策としている訳か。

だから、俺でも素通りできたんだな）

「そうなんですか。

なんだか、ハルクさんも大変ですね。

門番は絶対必要だと思いますけどね。

何か遭ってからでは遅いですし

もし、魔獣が群れで襲って来たら

城門を急いで閉めたりするのも、門番の仕事ですしね」

「それを、分かってくれない奴が多いから困ってるんだよ。

俺達門番の給金は、税から出てるからな。

俺たちがいなくなれば、少しは税が安くなると思ってるのかもしれないな。

俺達がいなくなっても、税が安くなるなんてありえないけどな」

苦笑いしながら、ハルクはそう言った。

「門番は全部で20名しかいないんだ。

20名程度の給金がなくなったところで

税の負担が少なくなるなんてことはないだろうしな。

それに、この仕事は給金も安くて、休みも少なく、労働時間も長い仕事だ」

門番は12時間の交代制で、休みは不定期

昼間は多少安全なのだが

夜は、魔獣との遭遇率も高く結構危険なのだそうだ。

給金も、月20イェンと命の掛けている割にはあまりにも少ない。

門番は、騎士見習い扱いなので

騎士への昇格があるとはいえ

騎士になれるのは、ほんの極一部で

コネがない者は、余程実力がなければ騎士になることは出来ないそう
うだ。

「かなり大変な思いをして

街の安全を守っているのに、分かってもらえないのは悲しいです
ね」

「まあ俺はなんと言われようとも、

この仕事を頑張るだけだけどな。

そして、いつか騎士になるつもりだ」

「そうですね、頑張ってください。

お仕事中に話しかけてすいませんでした。

では、失礼しますね」

「気にするな

では、一樹も仕事頑張れよ」

仕事中にいつまでも話しているのは悪いと思った一樹は
会話を切り上げ、ミミの待っているだろう
貧民街を目指して歩き出したのだった。

門番の意味（後書き）

叱咤激励の感想や

こうしたらいいんじゃないかなどの
アイデアなどお待ちしております。

一樹とミミの後悔

ハルクと別れ、貧民街へと足早に移動する一樹。

一樹は、ミミの言っていた

「いいえ、街の中でも一樹一人で出歩いていたら襲ってくるわよ
人通りの無い場所なら、街の中でも関係ないもの」

という言葉が頭から、すっかりと抜け落ちていたのだった。
一人で、街を出歩いていては、いつ襲われてもおかしくないのだ。
ハルクの言葉で一樹は、自身の安全について
もっと気を配るべきだったと後悔していた。

（早急に森の近くに倉庫兼監視小屋を作らないと不味いな。

土地の購入の方法が分かったら

多少買い叩かれても、砂糖と胡椒を換金しよう。

ハルクさんが言っていたように

街から森の移動の際に、魔獣に襲われることも事もあるだろうし
俺じゃ魔獣の駆除なんて、絶対不可能だろうし

この足じゃ逃げることにすら出来ない。

街の城門から、貧民街までの移動でも襲われることも考えると
常に護衛に付いていて貰わないと、安心できないな。

倉庫兼監視小屋が出来るまでは

護衛の人達に、森まで迎えに来てもらうしかないな

前回の自身への襲撃事件で

この世界の危険性を、確認したつもりになってたけど。
分かっているつもりになってただけだったということだな。
こりゃ反省ないと・・・）

水と平和はタダ

そんな日本で暮らしていた一樹がいきなり、こちらの世界の危険な場所だから、気をつけろと言われても

早々には、頭の切り替えは出来ないものなのだ。

一樹が、貧民街の門を潜り抜けると

監視小屋からは、一樹の来訪を告げるドラが鳴り4回鳴り響いた。ここまで来て、ようやく一樹は少し落ち着きを取り戻した。

（ここまで来れば安全だろう。

急いで歩いて来たから、膝が痛くなってきた）

呼吸を落ち着かせて、ミミの家までゆっくりと移動しようとするミミが駆け足でやって来て一樹に飛びついた。

「久しぶりねー一樹」

いきなり、飛びつかれて尻餅を付いてしまった一樹。

周りを気にせずに、飛びついてきたミミに少し驚いた一樹だがそれだけ素直な行動が、嬉しかった。

周りのいる亜人達は、少し驚いているようだ。

（なんか、ミミはストレートに感情をぶつけてきて

少し、くすぐったいけど

この感じは、なんかいいな）

「ミミ、久しぶりだね。

それと、随分激しい出迎えだね。

周りの人がびっくりしてるよ。

少し話したいことがあるから、ミミの家へいいかな？」

「わかったわ、さあ行きましょう」

そう言って、少し浮かれ気味のミミは、一樹の手を引っ張りながら歩いていく。

照れくさい一樹は、顔を赤くして引っ張られていく。周りに亜人達はそれを、微笑ましそうに眺めていた。

ミミの家に着き、中に入ると

母親であるミラーノさんが出迎えてくれた。

父親であるラストさんは、狩り出て家を空けているそうだと。

「それで一樹、話したいことって何？」

ミミはさっきまでの浮かれた顔でなく

真剣な顔になっていた。

一樹も真剣な顔で答えた。

「門番のハルクさんが教えてくれたんだ

最近では、減ったとは言われても

この辺りでは、昼間でも魔獣に襲われることがあるらしいね」

「確かにその通りだけど。

でも、最近には本当に見かけないわよ」

「それでも、なるべく危険は避けたいんだ。

森から街への移動の際に、魔獣に襲われる事があるかもしれない。完全に、無いとは言いきれないだろ。

避けられる危険は、避けるべきだよ。

それと、城門から貧民街までの移動の際に襲われるかもしれない。どっちかというと、こっちが本命だけどね」

一樹の言うとおりであった。

確かに、一樹を狙った奴隷商人は始末したが他にも、一樹を狙っている輩がいらないとは限らないのだ。

せめて、こちらに戻ってくる日にちと、時間を一樹に確認して城門前で待つ位はするべきだったと後悔した。

あの時のキスで浮かれてしまい

そんな事は、頭から抜けてしまっていたのだ。

「ゴメンなさい。」

確かに、一樹の危険は少しでも排除するべきだったわね」

ミミはかなり落ち込んだ。

これでは、何の為に高いお金を貰って

一樹を護衛しているのかわからないではないかと。

「ミミ、そんなに落ち込まないで。

俺も、軽く考えていた部分が大きかったから

これから、改善策を考えていけばいいだけだしね」

ミミは、少し考えてから

「そうね、その通りだわ。

私の考えでは、一樹が故郷に戻る際に

こちらへ戻ってくる日にちと時間を教えてもらって

その時間に、森の入り口まで迎えに行くというのが

一番だと思うけどどうかしら」

「確かに、暫くはその方法しかないと思ってるけど

俺は、森の入り口に、倉庫兼監視小屋を建てようと思ってるんだ。

そうすれば、重い荷物を森から街まで一人で持ってくることもないし。

倉庫番の人に、森から貧民街まで護衛してもらえばいい」

「確かに、それはいい考えだと思うわ」

「その為には、あの森近くの土地を買い取らないといけないんだけど土地の購入方法とかミミは知ってるかい？」

ミミは首を横に振った。

どうやら知らないらしい。

（さて、どうしたものかな？

そういった情報をどうやって調べるべきか）

そういった事に詳しい人の当てが、一樹にはまったくなかった。

まあ、当然といえば当然だが。

すると、ミミが

「その辺りは、亜人が協力して調べておくわ。

暫く、時間がかかると思うけど調べられないことじゃないわよ。

それに、誰か知っている人がいるかもしれないし。

今まで、必要だとは思わなかったから

考えたことも、調べたことも無いけど。

それに、私達の村を作るのにも、必要なことだしね

それじゃあ、ちょっと行って来るわね」

そう言うのと、ミミは家を飛び出していった。

さっそく、協力してくれる亜人の元に向かったようだ。

すると、ミラーノさんが

「すみません、一樹さん

あの子ったら、一樹さんを置いて何処かに行ってしまった」

「いえいえ、気にしないでください。

なるべく早いうちに、知っておきたい情報ですから
迅速な行動は、かえってありがたいですよ」

そう言って、ミミが戻ってくるまで

ミラーノさんと喋りながら

ゆっくりとした時間を過ごしたのだった。

一樹とミミの後悔（後書き）

ミラーノさんは一樹ハーレムには入りません。

本当に入りませんのであしからず。

土地のレンタル（前書き）

間に合った・・・

急いで書いたので誤字脱字があるかも・・・

外伝の方も更新しました。

次は、この世界の税制などを纏めたものを書こうかな・・・
説明してないことが多すぎる気がしますorz

土地のレンタル

ミラーノさんが色々な話を聞かせてくれた。

ほとんどが、ミミに関することばかり

ミミが子供の時にやった、いたずらの事だったり

ミミが初めて狩りを成功させて、家族で大喜びしたこと

ミミが奴隷商人捕まって、本当に悲しんだこと

ミミが無事戻って来たこと

そして、戻ってきてからは、いつも一樹の話を家でしていること。

（正直、最後の話は嬉しく思うけど、かなり恥ずかしいぜ）

意外と純情な一樹だった。

そんな一樹にミラーノは

「ですから、これからもミミの事よろしくお願いしますね」

「いえいえ、ミミには色々助けてもらってますから

こっちがよろしくお願いしたいくらいですよ」

すると、ミラーノは苦笑いをして

「そういつて意味で言ったのではないのですけどね」

その言葉の意味を理解した一樹は
さらに、顔を赤くするのだった。

（どうやら、ミラーノさんの中では

俺とミミが結婚するのが、規定路線になってるな

確かに、ミミは可愛いし、結構好みのタイプだ。
あのストレートな愛情表現も、好感が持てる。
だからって、この世界で結婚するっていうのも
結婚Ⅱこの世界に永住になるだろうし
なにより、父さんと母さんに紹介できないし
孫が出来ても、見せられないし・・・
父さんも母さんも、孫の顔を早く見たいって言ってたしな

一樹の両親は、一樹と雪江が卒業後結婚するものだと思っていたので
誰よりも、孫の誕生を心待ちにしていたのだった。
すでに、名前も何通りか考えてあるらしい。

（父さんと母さんの期待を裏切れないよな・・・
何より、俺はまだ雪江を完全に吹っ切って無い訳で）

雪江のことを完全に吹っ切っていない一樹は
ミミの事を、好ましく思っているが
その扱いに困っていたのだった。
そんな事を考えていると

「ただいまー一樹戻ったわよー」

ミミの元気な声が聞こえてきた。
一樹とミラーノで出迎える。

「おかえりなさい」

「ミミ、おかえり。」

何か分かったことはあった？」

「まあね。」

取り合えず座りましょう」

そういつて、居間へ移動する。

ミラーノは、帰ってきたミミの為に水を用意すると言つて
台所へ消えていった。

居間で、ミラーノの持ってきた水を飲み

一息付いたミミは、さっそくわかった情報を一樹に話して聞かせた。

「土地の購入方法だけど

小規模の土地を、購入するのは無理みたいなの」

「そうか」

一樹は、残念だと項垂れる。

倉庫兼監視小屋を建てることは、厳しくなったからだ。

しかし、ミミは話を続ける。

「でも、買うことは無理でも

借りるのは、平気みたいなの

というか、そうやって借りている人は結構いるみたいなのよ」

そう、この世界では、土地の貸し借りは当たり前の事なのだ。

土地を借りて、畑を耕し、その借り賃として収穫物の何割かを収める。

もしくは、土地を借り、牧場を作る。

色々な所で、土地の貸し借りは、行われている。

このハイネでは、城壁内の安全は、一応確保されている。

城壁内での、安全賃として、税を取り立てていのだ。

逆に、城壁外に住むものは

土地の貸し賃の代わりとして、税を取り立てているらしい。

亜人の中にも、城壁外に土地を借り

農作業をしている者もいるそうだ。

ミミが、何故それを知らなかったかと言うと

彼女達山猫族は、狩りを専門に行っていた為

そういった事に、疎かったこともあるが

一番の原因としては

農作業を行っていたものが、あまり自分の仕事について

劣等感を持ち、あまり喋らなかった所為だ。

亜人の生活の殆どは、狩りによって賄われている。

森や、川などで狩りを行い。

狩りで得た獣を、食料とし

お金が必要な場合は、その獲物を換金して暮らしていた。

勿論、人の仕事を手伝うなどで給金を貰っている亜人もいるが

その多くは、狩りが出来ないから

人に混じって仕事をするという、劣等感を持っていたのだ。

これは、獣の本能というべき物の所為なのかもしれない。

そう言った、劣等感が邪魔をして

人に混じって、仕事をしている亜人は、自分の仕事を誇ったりはし

ない。

なので、自分の仕事について、あまり話題にすることもなかったの
であった。

【選人の森や、川で黙って狩りをするのは、違法行為です。

あの森で狩りをする為には、あの土地の利用料を払う必要があります。
ます。

勿論、ラステを通してその利用料は支払われています。

狩りのする人数が多くなると、それだけ利用料が多くなるため
狩りに優秀な人物だけが、登録されています。

勿論偽名です。

なので、狩りの出来ない亜人は
人に混じって、仕事をするしかないのです】

「そんな事、気にする必要はないのに
生きていく為に、みんなが協力してやってることなんだから」

そう言って、ミミは少し悲しそうな顔をした。
自分は、狩りを仕事にしていたので
その、劣等感がわからなかったようだ。

「まあ、それは仕方の無いことかもしれないな。
でも、これからそう言ったことをなくしていけばいいじゃないか
ミミが新しく作る村では
そんな劣等感が、生まれない場所にすればいいよ」

「そうね、頑張らなくっちゃ」

そういつて、ミミは笑顔を見せてくれた。

「それはそうと
土地は、どうやったら借り受けられるんだい」

「そうね、その説明がまだだったわね。
それは、王家の国土管理局に申請すればいいだけみたい
早ければ、当日にでも使用許可が下りるみたいよ」

勿論、使用する土地の広さや、場所にもよるのだろうが
選人の森の近くなど、他に借りているような者をおらず
デメリットだらけの場所ならば

すぐに、許可が下りることだ。

（もしかすると、あんな土地を借りるってことで何かあるんじゃないかと勘ぐられて

使用許可を、出し渋るとかあるかもしれないからな。

その時の為は、袖の下を渡してでも使用許可を取らないと自分の命には変えられない）

そう、一樹は賄賂を贈っても

急いで、使用許可を取らなければと思っているのだった。

土地のレンタル（後書き）

次回か次々回

新しいオンニャノ子が登場します。

多分

竜人族の櫛名（前書き）

勿論、この名前は櫛名田姫から取りました。
安直ですいません。

一応イメージしやすい様に
容姿なんかは、簡単に説明してるんですが
キチンと伝わっているでしょうか？

竜人族の櫛名

「ミミ、その申請をするのに
身分を証明するようなものは、必要ないのか？」

今、身分証明出来る様なものを持っていない一樹は
その辺りが、心配になったのだ。

まあ、この街で店を持つという名目で税を納め
住居権を買うことが出来れば、それが身分証明になるのだ。
すると、ミミは

「住民権が無くても、問題はないと思うわよ。

私達だって、住居権なんて持ってないけど

森の使用権は、得ることが出来たんだし。

使用権も、土地の貸し借りも同じようなものだって聞いたしね」

ミミの話を聞いて、少し考えた一樹は

「一応、詳しく知っておきたいから

ミミに教えてくれた人に、直接聞きに行きたいんだけどいいかな
？」

このまま、又聞きのような状態よりは

自分で、直接聞いたほうがいいだろうと思った一樹は

ミミに、案内と頼んだのだった。

「ああそれなら、大丈夫よ

もう暫くすれば、ここに来るから

準備が出来次第、こっちに家に来るって言ってたから

膝の治療も一緒に出来て、一石二鳥でしょ」

「膝の治療？」

一樹は、どうやらすっかり忘れているようだ。

自分の、膝の治療を頼んだことを

ミミは、ため息をついて

「一樹は、忘れっぽいね。

一樹の膝を、治療するのを竜人に頼んだじゃない。

その治療の為に、今からここに来るのよ。

土地の話は、そのついでよ、ついで」

どうやら、一樹は思い出したようだ。

確かに、膝の治療を頼んでいた。

元々、治るとは期待していなかったし

色々な事が、立て続けに遭ってすっかり頭から消去されていた。

「ごめん、ごめん

なんか、色々あってすっかり忘れてたよ」

すっかり、忘れていた一樹だが

ミミの話を聞いて、冷静を装っているが

実際にはかなり興奮している。

この世界の薬の効果は、父親で実証済みだ。

治癒魔法の効果は、どのくらいのものなのかわからないが

治癒魔法の効果がなくても

あの父親の、腎不全を治した薬よりも

高い効果を持つ薬を使うのだ。

自分の膝も、きつと治るとわくわくしているようだ。

（膝が治ったら、もう一度サッカーをやるんだ♪

この世界の事が落ち着いたら

もう一度、プロを目指してみようかな。

草サッカーが、出来るくらいに治れば、儲け物くらいに考えてたけど。

父さんの回復振りを見たら、膝のほうも完治しそうだし。

膝が治るなら、プロの世界に飛び込んでみたいよな。

大学卒業までに、一度体を鍛え直してセレクションを受けてみるかな）

一樹が、これからの事を妄想していると
ミミが、外を見て

「来たみたいね、行きましょう」

と声を掛けてきた。

一樹とミミが、出迎えに玄関まで行くと
綺麗な女性が立っていた。

年は、20過ぎといったところで

片メガネを掛け、長い髪を一つに結び

髪の色は、薄い水色をしている。

他の亜人とは違い、とても知的な雰囲気を持つ女性だ。（とても失礼です）

「どうも、初めまして

私は、今回一樹様の治療をさせて頂きます。

櫛名と申します。

どうぞ、よろしく願います」

「こちらこそ、どうぞよろしく願います。

あと、一樹様っていうのは、勘弁してください。

俺は、様付けで呼ばれるような

ご大層な、人間じゃないですから」

「ですが、一樹様は

私達を、服従の契約から救ってくださった、救世主なのですから。
一樹様とお呼びするのは、当然なのですよ?。」

（やっぱり、服従の契約ってのは

亜人にとって、致命的なものだったんだな。

奴隷の扱いなんて、想像するしかないから

あんまり、実感がわかないんだよな）

日本では、奴隷制度なんて、勿論ない。

しかも、比較的裕福な家庭で育った一樹は

知識としては知っていても

奴隷が、どのようなものなのか

どのような扱いを受けているのか

いまいち、ピンとこないのである。

そんな状態で、自分が、それを救った救世主だと言われても
ただ、むず痒いだけなのだ。

「取り合えず、様付けだけは止めてもらえないかな?。」

「分かりました。

そこまで仰られるなら、一樹さんと呼ばせてもらいますね」

櫛名は、あまり納得がいかないようだが

このまま続けても、一樹を困らせるだけだと判断したようで

一樹の言い分に、素直に応じた。

「それでは、さっそく治療に当たります。

一樹さん、ミミさん、中へよろしいですか？」

そう言って、治療の為に家の中へ移動する。

「一樹さん、椅子に座って

膝を出して貰ってよろしいでしょうか？」

一樹は、櫛名に言われた通りに椅子に座り。

ズボンを捲って、膝を出した。

「初めは、治癒魔法による治療を行いますね

それでも、膝が完治しない場合は

薬を使用して、膝の治療をします」

どうやら、最初は治癒の魔法を試すようだ。

（確かに、死んでさえいなければ

どんな、怪我や病気でも治すような

貴重な薬を、最初に使うわけにはいかないよな。

もし、治癒魔法で膝が治ったら、勿体無いし）

「わかりました。

処で、ミミと櫛名さんだと

どれくらい、治癒魔法の効果が変わるんですか？」

ふと、疑問に思ったので、聞いてみることにした。

竜人族の魔力は、他の亜人よりも高いとは聞いてはいたが

どの程度、変わるものなのか、興味があったからだ。

「櫛名と私じゃ、全然違うわよ」

ミミが、そう答える。

「櫛名なら、腕が切断されても、繋げることが出来るわ。私じゃそんな事、不可能だからね。

というより、私だとそこまで魔力がもたないって事なんだけど」

「もたないってどういう事なんだミミ？」

「言ったでしょ、龍人族は、他の種族に比べて魔力が高いの。この場合、使える魔力量が多いって言ったほうが正確ね。

竜人族も、私達も、治癒魔法の効果は一緒なのよ。

ただ、魔力量が少ないから

もし、切断された腕を私が治療したら

腕がくつつく前に、魔力切れを起こしちゃうの」

つまり、竜人族は、ゲームで言うMPが多いようだなので、治癒魔法を長時間使うことが出来る。

「唯でさえ、人は亜人よりも、治癒魔法が効果が薄いよ。

一樹には、しっかりと膝を治して欲しいから

今回の治療には、櫛名を呼んだのよ」

（確かに、亜人は

強化魔法も、使用できるくらいだからな。

治癒魔法の効果が高いのも当然だな）

「一樹さん、そろそろ治療に入りますので
よろしいでしょうか？」

「すみませんでした。」

「よろしく願いますね」

一樹が答えると、櫛名は治療を開始した。

竜人族の櫛名（後書き）

一樹ハーレム第2号です。

次はミミと櫛名でバチバチがあるかも

一樹の秘密（前書き）

足が治った一樹君

勿論サッカー選手にはなれません。

つか、そうなたら物語が終わってしまう・・・

ミミと櫛名のバチバチは次回に持ち越しとなりました。

一樹の秘密

櫛名は、一樹の膝に手を添えて、治癒魔法を唱える。
膝に、なんとも言えない温かさを感じる一樹。
ホットパック治療を受けているような感じた。

（なんだか、膝が軽くなってきた感じがする。
なのに、櫛名さんはなんだか難しい顔してるんだよね
感覚的には、すごくいい感じなのに。
もしかして、治療うまくいってないのかな？）

そうなのだ。

治療をしている櫛名の顔は、ずっと怪訝な顔をしているのだ。
何か、問題でもあったのだろうか？
時間にして、5分ほどだろうか治療を続ける。
すると、櫛名が立ち上がった。

「これで、完治しているはずなんですが
一樹さん、膝の具合はどうですか？」

膝の曲げ伸ばしをしても、痛みを感じない。
驚いた一樹は、ミミの家を出て、駆け回る。
一樹のいきなりの行動に、驚くミミと櫛名。

「ウオオオオオオオオ
治ったあああああああああああああああああ」

雄叫びを上げ、疾走する一樹。
そんな一樹を、何だこいつはと、冷たい目線で見つめる周りの亜人。

10分程すると、辺りを駆けずり回った一樹が戻ってきた。すると、いきなり櫛名の手を握り。

「櫛名さんありがとうございました。

膝、治りました。

本当にありがとうございました。」

涙を流して、感謝する一樹。

ちよつと、引きつった笑みの櫛名。

（膝が治った。

これで、もう一度サッカーが出来る）

櫛名に、ありったけの感謝を捧げる一樹。

その光景を、面白くなさそうに見つめるミミ。

「なによ、一樹。

確かに、一樹の膝を治したのは櫛名だけど

私だって、色々と頑張ったのよ。

少しは、私にだって」

膝の治療をしたのは、櫛名だが

その治療を手配してくれたのは、ミミとラステさんだ。

「ミミもありがとう。

ミミやラステさんがいなかったら、

治療も頼めなかっただろうし」

一樹に感謝を述べられ、ようやく笑顔を見せるミミ。

しかし、櫛名だけは、笑顔を浮かべていなかった。

「一樹さん、少し試してみたい事があるのですが、よろしいですか？」

「ええ、構いませんよ」

一樹がそう答えると、櫛名は魔法を唱え始めた。

「我、汝に命名する。」

汝の名は、一樹。

汝、契約にしたがい我に使えよ。

汝の名を、今ここに封じる」

櫛名は、服従の契約を一樹に使用してきたのだ。

（はて？ 人に使っても意味がないんじゃないかなかったこれ）

「櫛名、いきなり何やってるのよ！」

ミミが叫ぶが、櫛名は真剣な顔で

「少し黙ってて！ 大事な事なのよ」

ミミは、櫛名の叫び声なんて、

聞いたことがなかった為、黙ってしまった。

「一樹さん、手や足を動かして貰えませんか？」

櫛名に言われた通り、手足を動かそうとするが、動かすことが出来ない。

（これは、どういう事なんだ！

手足を動かすことが出来ない。

もしかして、服従の契約って俺にも効果があるのか？

俺一応人間のはずだよな）

櫛名は、一向に動こうとしない一樹を見つめ、

「やっぱりそうですか。

一樹さん、これで動けるはずですよ」

櫛名が言った通り、一樹は、手足を動かせるようになった。

「櫛名さん、これはどういう事なのか、

説明して貰えませんか？」

「櫛名、これはどうゆうことなのよ」

「分かりました。

これで、確信が持てましたので、ご説明します」

そう言って、櫛名は説明してくれた。

櫛名は、一樹に使ったさいに、違和感を感じたそうだ。

一樹の怪我が、どの程度酷いものなのかは知らないが、

走れなくなるほど、酷いものだと思っていた。

この治療には、時間がかかると思っていたのだ。

だが、実際治療に要した時間はたったの5分。

最初は、大したことない怪我だったのかと疑ったが、

一樹の喜びようを見て、かなり重い怪我だったのが分かった。

そうになると、一樹の回復力は異常だと言えない。

治癒魔法は、高い魔力を持っている人ほど回復力が高い。

治癒魔法を掛ける側の魔力に、高い低いは関係ないが、

治癒を受ける側の魔力が、回復力に大きく関係する。

亜人が、人よりも回復力が高いのは、

持っている魔力が、人よりも高いからだ。

竜人族のなかでも、豊富な魔力を持つ櫛名は、

これまでに、色々な亜人を治療してきた。

その経験から言えば、走れなくなるほどの怪我だと、

亜人でも、治療には15分程かかる。

5分で治るのは、竜人族くらいだ。

もし、一樹の魔力が亜人並な場合、

一樹にも、服従の契約が、効果があるかもしれないと思ったのだ。

そこで、一樹に了解を取り、試してみた。

そして、実験は悪い意味で成功した。

一樹にも、しっかり効果があつたのだ。

「はあ〜そうゆう訳だったんですか・・・

不味いな、こりゃ」

服従の契約を実際に受けてみて、こりゃ不味いと思う一樹。

自分の意思で、動くことが出来なくなるのだ。

（人に対して、服従の契約を使うなんてめったにないだろうから

そこまで、危険視しなくてもいいし、

契約回避の方法を使えば、さらに安全だろう。

問題は、亜人達だよな。

俺を支配する利点が、ありまくるからな。

この事は、他言無用として、

後は、ミミと櫛名さんを信用するしかない。

そして、一番の問題は、

服従の魔法が込められてる物が、椅子だってことだよな！)

そう、一樹の名前が封じ込まれているのは、

ミミの家の椅子なのだ。

せめて、名前を封じ込めるものを変えたいと願う一樹だった。

櫛名と一樹・・・おまけでミミ

「櫛名さん、

俺にも、服従の契約があることはわかりました。

何故、俺にも効果があるのかはわかりませんが、

それは、おいおい調べて行きましょう。

ところで、封印物の変更って出来るんですよね？」

封印物が小物であれば、日本に持ち帰りさえすれば、誰かに操られる心配はないからだ。

亜人達を信頼してない訳ではないが、やはり、心配の種は無いほうがいい。

「はい、一時的に椅子へ封印しましたが、持ち運び出来るようなものに、再封印します。

封印する物に何か希望がありますか？

服従の契約に使うものは、指輪や首飾りが多いですけど」

「そうですか、

ちょっと待ってください。」

一樹は、そう言う

持ってきた鞆をガサガサと探り出した。

そして、小さな箱を取り出してこういった。

「この指輪に、再度封印をお願いしますか？」

これは、雪江に渡せなかった婚約指輪だ。

（返品する訳にも、捨てるわけにもいかなかったからなこれは。資金不足になったら、こっちで売り飛ばそうと思って持ってきたけど

こんな事に使うことになるとは、思わなかったよ）

櫛名に、指輪を渡し再度封印をお願いする。

「ところで、封印物の変更ってどうやるんですか？」

一樹が疑問に思い尋ねると。

櫛名が答えてくれた。

「封印者が解除を行うか、封印物を破壊すれば服従の契約が解除されます。

今、解除を行いますね」

櫛名は椅子に向かって

「我、契約をここに破棄し、
汝の名を今解き放つ」

すると椅子が光輝き、一樹も光に包まれた。

（契約の時は、何も起こらなかったのに
解除の時は、光るのか
どうせなら、両方とも光ったりすればいいのに）

一樹がどうでもいいことを考えていると、
光は、徐々に弱まり消えていった。

「これで解除完了です。

では、再度服従の契約を行いますね。

我、汝に命名する。

汝の名は、一樹。

汝、契約にしたがい我に使えよ。

汝の名を、今ここに封じる」

（やっぱり、封印時は光らないんだな）

一樹が、更にどうでもいいことを考えているうちに、
服従の契約は完了したようだ。

「一樹さん、これで契約は終了しました」

「どうもありがとうございます。

これで、心配の種が一つ減りました」

すると、いままで口を挟まなかったミミが一樹を見つめて、

「そうね、確かに櫛名が気づかなかったら、

とんでもないことになった可能性はあるわね。

まあ、一樹に服従の契約を使う人間がいるとは思わないけど」

（確かに、人間である俺に対して、

服従の契約を使う奴なんて、いるとは思わないけど。

確立は、0%じゃないからな。

もしかして、過去こっちに来た人が、

服従させられたとか、記録に残ってたら危ないしな）

かなり慎重になっている一樹だが、

過去フランク王国では、

人間に対して、服従の契約認められた記録はない。

「契約の件もそうですけど、

足の件も再度お礼をいいます。

ありがとうございます」

すると櫛名は、

「いえいえ、そんなお礼なんて言わないでください。

妻として当然の事をしただけですから」

櫛名が笑顔で爆弾発言をする。

一樹が固まり、時間が止まる。

すると、ミミが櫛名に詰め寄り叫んだ。

「一樹の妻どうゆうことよ！」

「どうゆうことと言われましても。

お父様から、一樹さんへ嫁いでもらえないかと言われまして、私も、一樹さんでしたら構いませんと返事をしたのです。

私達亜人を、服従の契約から解放して下さった方ですから」

櫛名の話聞いて、一樹の時間がようやく動き出したようだ。

一樹は、櫛名に突っかかるミミを押さえ込んで、

「櫛名さん、俺まったく聞いてないんですけど

詳しい話を聞かせてもらえませんか？

ミミも落ち着いて話を聞いてくれ」

かなり興奮しているミミを座らせて、詳しく話を聞かせてもらおう事にしたのだ。

「お話します。

竜人族としましては、

これから先、一樹さんとの関係の強化が大切になると考えたのです。

故に、私の嫁入りが決定しました」

櫛名さんの話を聞いて分かったことは、

山猫族ばかりが恩恵を受けるのは、ズルイという話だ。

一樹の護衛でも、山猫族が4名、山犬族1名が選ばれている。

危険な仕事であるが、報酬月50イェンと破格だ。

山猫族だけでなく、竜人族にも、

美味しい仕事を回して欲しいという訳だ。

何より、山猫族主導での、亜人の村建設を防ぐことが出来る。

現在一樹は、ミミ、ラスト、ミラーノ以外の亜人を頼ることは無い。

一樹が、それ以外の亜人をよく知らないので当然なのだが。

このまま、村の建設が始まった場合、山猫族主導での村の建設になる。

村が完成すれば、当然村の中枢が山猫族ばかりになるだろう。

そうなってくると、山猫族に有利な法を作ることにも可能になる。

それを危惧した竜人族が、考えたのが櫛名の嫁入りなのだ。

「それって、私が竜人族に信用されてないってこと？」

確かに、山猫族が村の中枢を占めるかも知れないけど、

それは、今も同じでしょ。

村が出来ても、そんな馬鹿みたいな法を作ったりはしないわよ」

櫛名の発言に、ミミは怒りを露にする。

この発言は、ミミ達山猫族を信用していないと言っているようなものだ。

「確かに、そうなのですが、

私達竜人族は、亜人の中でも特に数が少ないのです。

族長会議においての発言権も弱いですし、

村が出来た際に、これまで以上に弱い立場には立ちたくないという竜人族の考えも分かってください」

竜人族の数はとても少ない。

この区画では、20人ほどこしか生活していない。

やはり、奴隷商人達に目を付けられやすいという点はあるが、一番の原因は、他の亜人に比べて、竜人族は繁殖力が弱いのだ。繁殖力が弱いというのは、語弊がある。

竜人族の生涯出産数は、約3人と決して低くはない。

しかし、竜人族は他の亜人よりも寿命が長く、成長が遅いのだ。

竜人族の寿命は約200年、成人するまでに4・50年かかる。

故に、竜人族の数はなかなか増えることがない。

逆に山猫族は、亜人の中で最大数を誇る。

生涯出産数も約5人多く、成人までは約10年と成長も早い。

寿命のほうも、約50年と人間と殆ど変わらない。

（現在は、区画内の人数調整が行われている為、

出産量の調整が行われています）

亜人の生活は、狩猟を得意とする山猫族や山犬族で持っている。故に、亜人内での発言権も強いのだ。

竜人族も、薬師などでお金を稼ぎはいるが、

人に見つかる危険があるので、特に魔力が高いもの意外は、人に混じって仕事をする事が出来ない。

しかも、人に混じって仕事することに、亜人は劣等感を感じる為、竜人族は、現状肩身の狭い思いをしていたのだ。

しかし、ここで一樹と櫛名が結婚すれば、今までの、竜人族の立場が一変するだろう。だが、そうは問屋が卸さない。

「でもだからって、一樹と結婚っていうのは話が飛びすぎよ。それに、一樹と結婚するのは私よ！」

ミミとしても、山猫族の将来を考えればここは譲れないのだ。何より、ミミは一樹のことが好きなのだ。絶対に譲るわけにはいかない。

「それは、ミミさんが勝手に言っているだけですよね？
一樹さんは了承してないと聞きましたよ。
でしたら、私が結婚を申し込んでも構わないと思います」

確かに、一樹はミミとの結婚の話を聞かされているが、ラストから、時間をかけてじっくりと事を進めればいいと言われている。

というか、そんな話のことはすっかり忘れていたのだ。

「そそそ…それはそうだけど
でも、私は一樹とくくくくく…口付けまでしたのよ！」

確かに、一樹とミミは口付けを交わした。
しかし、櫛名はあっさりと反論してみせる。

「ミミさんが、一樹さんに口付けをしたとの情報もありましたが、それも、強引にミミさんがした事だと聞いています。」

それでしたら、私も」

そういつて、櫛名は一樹に近き、
一樹の頬に手を添えて、

「一樹さん、不束者ですがどうぞよろしくお願いします」

そういつて、一樹に口付けをしたのだ。
この状態で一樹が考えたことは、

（もしかして、第二のモテ期に入った？）

二人の婚約者候補（前書き）

今回本当に短いです。

二人の婚約者候補

「このアマアアアアアアアアア
私の一樹に何やってるのよ!!」

ミミは、櫛名の襟を両手で掴みあげ、大声で叫んだ。
ミミの怒鳴り声が家中に響き、
ミミの声に驚いたミラーノさんが、居間まで飛んできた。

「ミミどうしたの、そんな大きな声をだして」

ミラーノさんが、厳しい声をあげる。
しかし、怒り心頭のミミは、櫛名を揺さぶりながら、

「だってママ！」

櫛名が一樹に対して、く…く…口づけをしたのよ」

「いいから、櫛名さんを離しなさい！」

ミラーノに言われて、渋々櫛名を離すミミ。

「櫛名さん、ミミがこうなっている訳を話して貰えるかしら」

ミラーノに言われて、事情を説明する櫛名。
ミラーノは、櫛名の説明を受け、

「事情は分かりました。

娘が迷惑をかけたようで、本当にごめんなさいね。

ミミ、貴方も櫛名さんに謝りなさい」

そういつて、櫛名に謝罪するミラーノ
そんなミラーノを見てミミは、

「確かに、櫛名に食って掛かったのは悪かったと思うけど、
櫛名が、いきなりく……く……く……口づけなんてするのも悪いのよ！
私が一樹と結婚するのよ！！」

別に一樹は、ミミと結婚すると決まった訳ではないのだが、
ミミの中では、それがデフォオとなっているようだ。
そんなミミを諭すように

「一樹さんとの結婚の話は、お互いに了承した訳ではないんだから、
櫛名さんを責めるのは間違ってるわ。」

それに、竜人族の未来のことを考えたら、
櫛名さんが、一樹さんに嫁ごうとするのは当たり前よ」

ミミの事だけを見ると、確かに櫛名の嫁入りは賛成出来ない。
娘の恋敵を増やして喜ぶ母親などいない。

しかし、亜人全体の事を考えた場合、

櫛名の嫁入りは反対すべきことでない。

一樹が、自分たちを見捨てるとは思っていないが、

一樹と親しい人物が増えるのは、亜人にとっていいことだ。

親しい人物⇨守るべき人物となる為、

一樹の守るべき人物が増えるのは、亜人全体にとっては有益なこと
なのだ。

勿論亜人全体の事を考えて、ミミを疎かにする訳にいけないので、
ミラーノとしては、ミミが選ばれるように協力するつもりだ。

「それと、それなら貴方が一樹さんを選ばれるように頑張ればいい

だけよ」

「ママァ~~~~」

ミミは、自分の味方をしてくれると思っていた所為か、かなり情けない声をあげていた。

「ミミ、山猫族だけが、一樹さんを独占しているのは、亜人全体の事を考えたら、あまりいいことではないわ。

と言っても、櫛名さんが今すぐ、一樹さんの元へ嫁ぐのも問題があるから、

今は、櫛名さんも、ミミも一樹さんの婚約者候補ということにしておきましょう。

それなら、お互いに正々堂々と勝負できると思うわ。

ミミも、櫛名さんも、それで納得してもらえないかしら？」

母親に言われ、渋々納得するミミ。

婚約者候補として、一樹の近くにいられるなら問題ないと納得する櫛名。

しかし、ここで納得してない人物が一人いる。

「あの〜すいませんが、

勝手にそんなこと決められても結構困っちゃうですが・・・」

そう、確かにミミと結婚の話は聞いていたが、

それは、いずれお互いの事をよく知ってからという話だったはずだ。実際、一樹はこの世界で暮らしていく気は、現段階ではまったくない。

よって、ミミと結婚する気も現段階ではまったくないのだ。そんな一樹にミラーノは、

「一樹さんは、ご存じないかと思いますが、
亜人の中で、女性からの口付けは、大変勇気のいることなんですよ」

ミラーノの言葉の意味がわからない一樹は

「それは、こういった意味でしょう？」

しかし、ミラーノは笑顔を浮かべて、

「一樹さんは、深く考えないでいいんですから。
これまで通りにしてください。」

一樹さんに結婚の意思がないなら、

この話は、婚約者候補のままで終わる話ですから。
それよりも、一樹さんはこの後どうするのですか？
そろそろお昼の時間ですし、お食事を食べるならご用意しますよ」

その有無を言わせない笑顔がとても怖かった一樹は、

「外で食事をしますので大丈夫です」

一樹は、そう言って家を出ていった。

ミミと櫛名は、急いで一樹を追いかけていった。

監視小屋ですか？いいえ牧場です

一樹は、街の中を足取り重く歩いている。

取りあえず、昼食をとる為に例の飯屋に向かう一樹。

その後ろには、お互いを親の敵だと言わんばかりの表情で睨みあう二人。

（ハァーなんだかともないことになっちゃったな。

しかし、こっちの事情も聞かずに、

婚約者候補だなんて、ミラーノさんも強引だな

確かに、ミミも櫛名さんも可愛いから嬉しくなくはないんだけど、
やっぱり、こっちで結婚ってのは今は考えられないな。

まあ、今は忘れよう）

婚約者候補については、忘れることにした一樹。

そんな一樹に櫛名が

「一樹さん、お食事の後はどうなさいますか？

ミミさんのお話だと、選人の森の近くに土地の借りたいという話
でしたので、

よろしければお食事後、私が国土管理局のほうまでご案内します
けど。」

うーんと一樹は考えて、

「まずは、土地の借賃の相場とか調べたいですね。

どうすればいいですかね？」

すると、櫛名は困った顔で

「土地の借賃に相場といものは在って無いようなものなんですよ。管理局に勤める貴族が決めることですから。担当する貴族によって値段は区々になります。袖の下を渡さないと、法外借賃を請求されたりするそうです。」

すかさずミミが、

「そうなのよ。」

森での狩場料が、一人年600イエンって言われたことがあったわ。

そんなに稼げるわけではないのに。

狩の名人のパパですら、年500イエン稼ぐのがやっとなのに・
・
」

何度も交渉して、現在は年間200イエンまで下がっているそうだし。ちなみに、亜人達は狩りで得た獲物は、基本的に自分たちで消費してしまう。

稀に、大量に獲った場合は街の商店に卸したりするそうだが、基本的には、塩漬けにして保存し貯蔵するそうだし。

では、どうやって狩りでお金を稼いでいるかというと、

毛皮、皮、骨といったものを加工し、

それらの加工品を店に売りお金を稼いでいるそうだし。

日本でも、毛皮のコートなどが高額で売買されているように、オストでも、防寒具として毛皮は重宝されているそうだし。

「それに、一樹さんの考えで土地を借りるのは少々難しいかもしれせんよ。」

「それは、どうゆうことですか？」

櫛名が理由を説明してくれた。

つまり、畑や牧場以外での土地の使用は基本的に禁止なのだそうだと。というより、それ以外の目的で土地を借りることがないそうだと。

なので、倉庫兼監視小屋という名目では、

土地を借りることが出来るかどうか分からないそうだと。

「そうだよな。」

確か、街の外に住むのは禁止されてるんだっけ？

それじゃあ、倉庫兼監視小屋だと厳しいかもしれないな。

それなら、牧場ってことで土地を借りることにするか。」

牧場なら、居住申請も通るはずなので、

小屋を建てても問題はない。

牧場で飼う動物も、ミミ達が狩る動物を生け捕りにして、肥育でもするように見せかければ問題ないと考えたのだ。

「そうね、牧場として借りるなら問題ないかもしれないわね。」

ミミがそう言うのと、櫛名も頷いて見せた。

どうやら問題ないようだ。

「土地の借り受けの申請なんだけど、ミミに任せていいかな？

ラストさんに聞けば申請方法とかわかるだろ。

狩場の使用料とかでそういうの慣れてるわけだし。」

ラストに任せるのには理由がある。

目立ちたくないというのもあるが、

その以外の理由として、一樹自身が牧場に住む訳ではないからだ。

居住しない人間が、土地の使用許可と居住の申請をするのもおかし

な話だと思った一樹は、
その牧場に住むことになるであろうミミと護衛の4人に、
申請をやってもらうことにしたのだ。

「私が申請するのはちよつとまずいと思うわよ。
申請するときには、耳と尻尾隠さないと無理だし、
今は隠さずに行動してるから、それを見られてないと言えないわ。
だから、あの4人にやってもらうことにするわ。」

ミミの言う通りである。
今のミミの姿を、国土管理局の人間が見ていないとはいえないのだ。
実際には、貴族の人間はこんなところ歩くことはないので、
問題なかったりする。

「態々危険を犯すことももないか。
それじゃ、あの4人に頼むか。
やり方はラステさんに聞いてもらって、
ラステさんが知らないようなら、他の土地を借りている亜人に聞
けばわかるだろ。」

「わかったわ。
4人には、私から話しておくわ。」

すると、今度は櫛名が、

「一樹さん。
その他にも、小屋を作るために森の木を材料に使うなら使用料が
かかります。
ですから、そちらの使用料も支払っておいたほうがいいと
思います。」

確かに、日本でも他人の土地の木を勝手に切ったりすれば犯罪だ。森の木を材木として利用するなら、その使用料を支払うのは当然のことだ。

「それもついでに払っておいて貰おうかな。両方で、どれくらいかかるんだろ。

森の木の使用料は結構かかりそうだな。

一緒に払えば使用料安くなりたりしないかな？」

すると、櫛名は苦笑いを浮かべ

「ありえませんよ。」

「そうだよね。」

ミミ、使用料のお金は後で渡すから4人に渡しておいてくれ。さすがに、1000イェンあれば足りると思うんだ。」

「わかったわ。」

でも、今渡しても大丈夫だと思うわよ。」

そういうと、護衛の4人のうちの一人がさっと一樹の前に現れた。実はこの男、貧民街からずっと影から一樹を護衛していたのだ。

そして、山猫族の耳の良さで今までの会話をずっと聞いていたのだ。ちなみに、猫はものすごく耳がいい動物なのだ。

護衛の男は手形を受け取ると、また一樹から離れていった。

（別に別に影から見守るとかしないでいいから、一緒についてくればいいんじゃないかね？）

しかし、一樹の認識は間違いである。

影ながら護衛するのは理由がある。

街中でも護衛が必要な人物など、裕福だと言っているようなものだ。そうになると、無用な危険を呼び込む可能性がある。

それに、もし街中で数人の男に絡まれても、

ミミなら問題なく処理出来るのだ。

しかし、万が一ということもあるので、

4人は影ながら一樹の護衛をしているのであった。

「まあ、腹減ったから飯屋に急ごうか」

そう言って、3人は飯屋に急ぐことにした。

ずっとサムエのターン（前書き）

今回は一樹ふるぽっこ

ずっとサムエのターン

「やっぱりこの店の料理はうまいな！」

そんな一樹の声が響く店内。

一樹は、以前にもミミと一緒に来た飯屋で食事を摂っていた。

「ここの料理は美味しいわ。」

「はい、とても美味しいです。」

ミミと櫛名も、この店の料理を絶賛している。

しかし、店には客がポツポツとしかいない。

「こんなに美味しい店なのに、お客さんが全然いないな。前は、お昼過ぎだからお客が少ないと思ったんだけど、何か原因があるんかね？」

一樹は、ハルケの物価をよく知らないが、

ミミ曰く、この店は良心的な値段で商売をようだし、

こんなに美味しい店なら、大繁盛してもおかしくない筈だ。するとミミが、

「それはね。今のハイネで、

お店で食事が出来る程お金を持っている平民がほとんどいないからよ。」

「よくそんなんで店を開いてるね・・・」

あれか、ハルクさんが言ってた街の修繕で税の負担が増えたって

奴の所為か。」

そんな開店休業状態で、よく店が続くもんだと一樹は感心したが、

「一樹さん、それは違います。」

長く続く街の修繕で、街の平民の税負担が増えたのは事実です。ですが、何とか生活することは出来ていたんです。

しかし、去年はそこに凶作が重なってしまったんです。

その所為で、多くの平民が貧民街へ居住を移したと聞きます。税の軽減などがあれば、

ここまでひどい状態にはならなかったのでしょうか。」

「つまり、今は生きてくだけで精いっぱい、

外食なんか余分なお金を使えないってことか？」

「そうなります。」

櫛名は、悲しそうに呟いた。

亜人達は、狩りで食料の確保を行っている。

その為、去年の凶作の被害はほとんど受けなかった。

しかし、それは亜人だから出来ることで、

普通選人の森で狩りを行なったら、魔獣の餌になるのがオチだそう
だ。

現在凶作により、小麦や芋の値段が高騰。

深刻な食糧難に陥っているようだ。

（そんな事になってたのか。

こりゃ、砂糖や胡椒なんて売ってる場合じゃないかもしれないな。
でも、砂糖や胡椒を買うのは貴族だろうから、

実は、あんまり関係ない？）

「この街の状態は何となくわかった。
飯を食ったら、ちよっと市場調査しに行こう。」

「一樹、この街の食糧難までどうにかしようと思ってるの？」

ミミはそんなのほっといて、私たちの事をもっと考えてほしいと、
目で訴えていた。

「違うよ。」

砂糖や胡椒を売るよりも、もっと儲かる物がないか調べにいくんだよ。

そうすれば、ミミの考えをもっと早く実行出来るようになるかもしれない。」

どうにかしてやりたいとは思っているが、
一人では、どうする事も出来ない。

お金儲けのついでに、少しでも食糧難が解決出来るのであれば頑張るつもりだが、
率先してどうにかしようとは思っていない。

「サムエさんが買い取った砂糖と胡椒の売値も気になるし、
こっちでは安く手に入るものでも、

俺の村では高価なものがあるかもしれないからね。

という訳で、午後からは市場調査をすることに決定。

まずは、サムエさんの店によってから、

色々巡ってみよう。」

その後食事を食べ終えた一樹達は、
ミミの案内で、サムエ商会を目指した。

サムエが言っていた通り、この街でかなり有名なんだそうだ。店に入ると、ここでも店員がミミに対して露骨に嫌な顔をしていた。しかし、サムエに渡された木札を見せると急に態度を変え、慌てて奥の部屋に案内された。店員の話では、サムエは今店を開けているので、この部屋でお待ちくださいとのことだ。30分ほど部屋で待っていると、サムエが笑顔で部屋に入ってきた。

「いやーお待たせしてしまつて申し訳ないです。」

「いえいえ、こちらこそ連絡もせずに来てしまひましてどうもすいません。」

私は、商人の一樹といいます。

こちらは、付き人のミミと櫛名です。」

そう言つて一樹は頭を下げる。

そのまま、当たり障りのない話を続け、

「そういえば、あの時は有難うございました。」

サムエさんが買い取ってくれたおかげで、

あの商人Aに買い叩かれないで済みましたよ。」

「いえいえ、こちらもあるは随分と酷い値段だと思っただけですから、

ところで、今日はどういった要件でしょうか？」

先ほどまでにこやかな笑みを浮かべていたサムエだが、急に顔が厳しくなった。

さすがに、商売の話となると真剣な顔になるようだ。

（うーんどうすっかな・・・）

店先には胡椒も砂糖も置いてなかったから、
値段がわからなかったんだよな。

かと言って、ストレートにいくらで売れましたなんて聞けないし。

）

商品の値段とは、

売値＝原価＋経費＋利益などを計算して決められている。

しかし、一樹の場合には、

売値＝利益となってしまうっているので、

今の値段のままでも、十分利益がでているのだ。

しかし、なるべくなら高く買い取って欲しいと思うのは、
人の性というものだろうか。

「その顔は、前回の値段よりも、

どうすれば高く買い取って貰えるかと悩んでる顔ですね。」

凶星をつかれて焦る一樹。

「どうやら、一樹さんはまだ駆け出しの商人のようですね。

例の売買方法は、

物の適正価格が分らない為に起こした苦肉の策と言ったところで
しょうか？

あんな事、胡椒や砂糖なんて高価な物扱う商人がすることではな
いですからね。」

（やばい、完全にこっちの状態を読まれてる。）

完全にこちらの状態を読まれて更に焦る一樹と櫛名。

ミミは、サムエをかなり警戒しているようだ。

「ミミさん、そんなに警戒しなくてもよろしいですよ。
我が商会在儲かるのであれば、亜人であっても取引させて頂きま
す。」

それと、胡椒と砂糖に関してですが、
私の商会以外には、卸さないほうがいいと思いますよ。」

何故、そんなことを言うのかといった表情の一樹。
しかし、続くサムエの話を聞いて納得してしまった。

「砂糖や胡椒といった高級品ですが、
貴族や王族といった上流階級の方々と取引のある商会でないと、
扱い切れない商品です。」

他の商会が、そういった方々と取引がないとはいいませんが、
私の商会以上の規模ではないでしょう。

それに、一樹さんは例の件で目立っていますからね。

これ以上変に目立っては、敵を作るだけです。

そうなっては困るでしょうから、これからも私の商会に取引頂け
るなら、

私が、一樹さんの後ろ盾となり、

そういったことから、お守りしようと思っ
ているんですよ。

決して、悪い話ではないと思うのですが。」

サムエの話を聞いて、一樹は悟った。

（やっぱり、海千山千の本物の商人には勝てないorz）

一樹の反撃 1

一樹とサムエの交渉は決裂してしまった。

一樹的には、サムエと取引することによって、安全を確保出来るというメリットがあった為、サムエとの取引には積極的だった。

継続的に売買を行うので、

多少なら値引き交渉にも応じる姿勢だった。

しかし、サムエは一樹を駆け出しの商人だと下に見過ぎた。

物の価値もわからないような商人だと思い、

かなり値引いた値段での取引を持ちかけたのだ。

サムエが最初に提示した取引金額は、

砂糖一貫	281イエン	一斤	45イエン
------	--------	----	-------

胡椒一貫	431イエン	一斤	69イエン
------	--------	----	-------

これが、サムエの提示した取引金額だ。

オストでは、江戸時代の一貫、一斤が重量の目安となっているようだ。

一樹は、一貫、一斤という重量に戸惑ったが、

携帯の辞書機能を隠れて使うことにより、

正確な重量を確認したところ、

前回よりも、約1200イエンの値引きを提示されていた。

確かに、一樹はこの世界では駆け出しの商人だ。

この世界の知識がかなり不足している。

しかし、馬鹿ではない。

さすがに、これには応じられないと、

一樹が提示した金額は、

砂糖一貫 419イエン 一斤65イエン50セエン

胡椒一貫 629イエン 一斤98イエン

これは、前回の値段よりも約1割値引いた金額だ。

継続売買と安全料を考えれば、

これくらいの値引きに応じるのがいいだろうと考えたからだ。

それに、値段交渉では最初に大幅に値引いた金額を提示し、

そこから駆け引きで互いの妥協点に持っていくものだと思っていたからだ。

しかし、サムエは首を縦に振らなかった。

なので一樹は、前回よりも2割引いた値段を提示したが、

頑なに首を縦に振らないサムエ。

ここで、サムエが一樹の提示した金額が

前回の値段から、1割引き、2割引きと値引かれることに気がつけば、

計算能力の高い商人だと認識を改めたのだろう。

しかし一度、駆け出しの坊やだと思い込んだサムエは、

砂糖一貫 281イエン 一斤 45イエン

胡椒一貫 431イエン 一斤 69イエン

この値段でなければ、取引には応じないと答えた。

その瞬間一樹は切れた。

完全に舐められてると。

商人Aの時は感謝したが、こいつもあの商人Aと同じだと。

その場で、今回はご縁がなかったようです。

と言ってミミと櫛名を連れて部屋を出て行った。

残ったのは、啞然とした顔のサムエのみ。

「ふざけんな！あの商人

前の取引では、世話になったが、

あそこまで、舐めた値段を提示されて取引出来るかつての！」

ミミと櫛名も同調している。

「そうよ！そうよ！」

何が、亜人でも取引するよ！

取引はするかもしれないけど、あからさまな値段での取引じゃないかしら。」

「あそこまで、露骨な値段を提示するとは思ってもありませんでした。ところで、一樹さん。

これから、どうするですか？

サムエ商会が後ろ盾になる件はもう無理でしょうし、

確かに、一樹さんには敵が多いかもしれません。」

駆け出しの商人が、砂糖や胡椒を扱うのが気に食わない同業者などもあるだろうし、

それらを狙っている人間もいるだろう。

確かに、護衛には強力な人物が付いているが、

絶対とは言い切れない。

「それについては、考えがある。

早い話が、サムエ商会以外に後ろ盾になって貰えばいいだけの話だよ。」

「「ん？」」

ミミと櫛名は同じように首を傾げる。

どうやら、サムエの話から推察することは出来なかったようだ。

「サムエの話を聞いてて思ってたんだけど、

貴族と王族の取引はサムエ商会が一番多いんだろ？

でも、他の商会も取引がない訳じゃない。」

「確かに、そう言っていましたね。」

「逆を言えば、

目の上のたんこぶであるサムエ商会から、

そういった、上流階級との取引を奪って、

商会の拡大を狙ってる商会がいると思うんだ。」

そう、サムエ商会が上流階級との取引が多いなら、

そのサムエ商会の取引を邪魔だと思ってる商会もいるはずなのだ。

「そういった商会と取引をしようと思ってるんだ。

ミミは聞いてただろ？あのオークションの時、

これなら、王族に献上出来る。

そう言ってた商人がいたんだ。

つまり、砂糖と胡椒は献上するほど希少価値があるもんなんだ。

それを、安定的に販売できる商会があったら、

その商会の覚えも良くなると思わないか？

さらに、サムエ商会が前回買った砂糖と胡椒で同じ事をしていたとしても、

サムエ商会は、もう砂糖も胡椒も手に入れることは出来ない。

出来たとしても、量は極僅かなはずだ。

俺は、絶対にサムエ商会には売らないからな。」

つまり、現在ハイネでのN O 1商会はサムエ商会で間違いないだろう。

そこに、敵対している商会に砂糖と胡椒を売り、サムエ商会の地盤を根こそぎ奪ってやろうという作戦なのだ。

（砂糖と胡椒以外にも、

王族に献上出来そうなものは、

まだまだ、いくらでもあるんだ。

経済大国日本を舐めるな。

サムエの野郎に吠え面かせてやる。）

一樹の信条は、受けた恩は倍返し、受けた仇は10倍返しなのだ。さすがに、命まで奪ってしまった商人Aに対しては、

とてつもない罪悪感を感じてしまったが、

元々、あの商人A達も、ボコボコにするくらいはやっていただろう。義理や人情にあつい一樹だが、意外と短気なのだ。

「ミミと櫛名は、

サムエ商会と敵対関係になりそうな商会を調べてくれ。

それが、わからないようなら、

サムエ商会と同等の規模の商会を調べてくれ。」

そう告げる一樹の顔は、ものすごくいい笑顔だった。

それを見てミミと櫛名は、

（（一樹を敵に回さなくて、本当によかった。））

と心の中で呟いた。

一樹の反撃 1 (後書き)

一貫 $\parallel$ 3.75 kg

一斤 $\parallel$ 600 g

一樹の反撃 2

市場調査を忘れ、ミミの家に戻った一樹は、

ミミと櫛名に亜人達への聞き込みを行ってもらっている。

その間一樹は、

砂糖や胡椒以外の、希少性の高いものを考えていた。

（オストは中世ヨーロッパの文化と、

江戸時代の文化がごっちゃになって、

希少性のあるものが、よくわからないんだよな。

中世ヨーロッパなら、羊用紙ばかりのはずだから、

和紙なんて高級品のはずなんだけど、

時代劇なんか見ると、貧乏長屋の障子なんかにも、

和紙は使われてたりするし、

シルクや宝石なんかは、オストでも高価だと思うけど、

日本でもめっちゃめっちゃ高価だし・・・

やっぱり、もっとこの世界のことを理解しないと、

何が必要があるのかよくわからないな。

今は、飢饉が起こってるから、食糧持ってくれば儲かりそうだけ
ど、

オストの食文化もよくわかってないんだよな。

こっちではあんまり飯食ってないし、

一般家庭の飯を食った事もない。

主食は、小麦？芋？

多分米は作られてないだろうな。

今の日本は夏だから、オストも夏なんだろうけど、

夏にしては気温も湿度も低い。

これは、北海道並だろう。

き○ら397の無いこの世界では、寒い地方での稲作は無理だろ

う。

飯屋で食った定食には、パンみたい物と、ジャガイモみたい物が付いてきたけど、ひえや粟なんかは、こっちにないんだろうか？ あれって、江戸時代飢饉が起きた時に、農民が食べてたって聞いたことあるんだよな。

江戸時代の文化が入ってきてるなら、そういった物も持ち込まれて、栽培されててもいいと思うんだよ。双方の文化がごちゃごちゃで、情報がないから意味不明状態だよ。」

オストでは、日本語が公用語であり、江戸時代の知識や文化などが、様々な部分で使われてはいる。しかし、実は読み書き算盤以外はほとんど浸透していないのだ。知識面は、分け隔てなく広まっていたのだが、技術面は、秘匿され一部にしか広まっていなかったのだ。特許申請などがないオストでは、技術を広めることは、自分の首を絞めることに他ならない。故に、和紙制作技術、製塩技術、農作業の技術など、オストの一部での秘匿となっている。本道のみは、上記の技術と異なり、オスト全土に広がり、現在の薬師の扱う薬は、日本の本道と、オストの薬学が混ざり合って出来たものである。この事実を知らない一樹は、無駄に考え込んでると、

「一樹く帰ったわく」

どうやらミミが戻ってきたようだ。

「ミミどうだった？」

「そうね、私のほうはほとんど情報なんて得られなかったわ。こういった事は、櫛名のほうがよく知ってるのよね。」

竜人族って、人と一緒に仕事をしたりする事が多いから、そう言った事に情報もよく知ってるはずよ。」

竜人族は、その高い魔力を使って、

人に混じって仕事をすることを得意としてる。

故に、人間の情報を一番持っているのは竜人族なのだ。

今までは、人の情報など持っていることで、

人間の社会に疎い亜人達の、大事な情報源だったのだ。

（やっぱり、亜人達に情報を集めてもらっても限界があるよな。

でも、俺こっちに亜人以外の知り合いなんて・・・）

「いたあ~~~~~~~~~！」

いきなり椅子から立ち上がり、大声で叫び一樹。

その声に驚いたミミは、

「一樹！」

いきなり大きな声出さないでよ。

ビックリするじゃない」

聴覚が鋭い耳は、一樹の声が耳に響いたのか、耳を押えて、一樹に文句を言う。

「いや、こっちで情報収集を頼めそうな人がいたよ。今から行ってくるから、ミミ付いて来て。」

そう言って、ミミを連れて家を出る。

「ちょっと一樹、いきなり何所に行くのよ。別に付いていくのは構わないけど、何処に行くのかは説明してよ。」

一樹の安全を考えれば、ミミは付いていくという選択しかないのだが、

説明くらいはして欲しい。

「いや、親切な門番さんのところだよ。

オストで唯一の俺の知り合いさ。

困っていたら助けてくれたし。

昼間でも城壁の外は危険だって注意してくれた人なんだ。」

そう、一樹が向かっているのは、

あの優しい門番のハルクのところだ。

ハルクが、商人に対して詳しいかはわからないが、

亜人には知られていない情報など、

もしかしたら、持っているかもしれないのだ。

話を聞いて損はないと思ったのだ。

そのまま、城門へと向かい、

城門まで来ると、そこにはハルクが暇そうに立っていた。

「ハルクさん、お仕事にすいません。

ちょっとお聞きしたいことがあるんですが

今大丈夫ですか？」

「なんだ一樹か。

どうしたんだ。

それと、隣のべっぴんさんは誰だ？
どうやら見たところ亜人のようだ。」

どうやらハルクは、亜人に対して差別的な感情は持っていないようだ。

反対に、ハルクの同僚はミミに対して冷たい目を向けている。

「こっちは、俺の相棒でミミっていいいます。

今日、仕事終わって何時ぐらいですかね？

その後に相談に乗ってほしいことがあるんですが。」

「夕暮れが交代の合図だから、

それくらいにもう一度来てくれ。

困ったことがあったら言ってくれと言ったのは俺だからな。

相談には乗ってやるぞ。」

「わかりました。

そのくらいの時間にまた来ます。」

ハルクと約束を取り付けた一樹は、
意気揚々と、貧民街の家へ戻って行った。

一樹の反撃 2（後書き）

き○ら397 北海道など寒い地方でも栽培できる美味しいお米の品種。

更新じゃないです。

行き当たりばったりに小説を書いていたツケが回ってきました。
このままでは、いずれ行き詰ると思い、
設定を詳細にしています。

物語自体の大まかな流れは変更するつもりはありませんが、
修正を入れたり、加筆しております。

現在、流石は異世界だぜまで修正が終わりした。

修正点ですが、

税の割合、土地の貸出、
輸送について、行商人について、商会について、
もう少し、詳しく設定しようと思っています。

修正に時間がかかりますが、これからもトンネルをよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0728q/>

トンネルを抜けたら異世界だった

2011年5月12日15時29分発行